護教論

テルトゥリアヌス
藤遥　制作

1章　知らずに憎むこと

1:1 ローマ帝国の長官たちよ。あなたがたは、開けた高い場所、ほとんど町の頂に座を占めて裁きを行っています。それなのに、キリスト者をめぐる訴えの真相を、公然と見極め、人前で調べることが許されないのかもしれません。この案件に限って、あなたがたの権威が、正義を尽くして公に問いただすことを恐れ、あるいは恥じているのかもしれません。さらに、最近起きたように、この一派への敵意が家の中の裁きに熱を入れすぎて、弁明を阻んでいるのかもしれません。もしそうなら、せめて、物言わぬ文書という隠れた道を通ってでも、真理があなたがたの耳に届くことを許してください。1:2 真理は、自分の訴えについて、何一つ許しを請いません。自分の境遇に驚いてもいないからです。真理は、自分が地上では旅人として過ごすことを知っています。見知らぬ者たちの中では、たやすく敵に出会うことも知っています。けれども、自分の生まれも、住まいも、望みも、恵みも、誉れも、天にあることを知っています。1:3 ただ一つ、真理がさしあたり切に願うのは、知られないまま罪に定められないことです。法は自分の領土で支配しています。真理が聞いてもらえたとして、その法に何の損があるでしょうか。それとも、真理を聞いたうえで罪に定めれば、法を執る者たちの権力は、なおさら誇れるのではないでしょうか。1:4 逆に、聞かずに罪に定めるなら、不当だと非難されるでしょう。そればかりか、何かやましいことがあるのではないかと疑われもするでしょう。聞いてしまえば罪に定められないものを、聞こうとしないのですから。ですから、キリスト者という名への憎しみが不当である第一の理由として、このことをあなたがたの前に置きます。1:5 この不当さに言い訳を与えるように見える名目が、かえってその責めを重くし、罪を明らかにします。つまり、無知です。実際、人が知らないものを憎むことほど、不当なことがあるでしょうか。たとえ、それが憎しみに値するものであってもです。1:6 憎しみに値するのは、値するかどうかが知られたときだからです。値するかどうかを知らないまま、どうして憎しみの正しさを弁護できるでしょうか。憎しみの正しさは、結果からではなく、知っていることから証すべきものです。人々は、自分が憎んでいるものがどういうものかを知らないから、憎んでいます。それなら、それが憎むべきでないものであっても、おかしくないではありませんか。1:7 こうして、わたしたちは、二つのことを、互いにもう一方から明らかにして、彼らを責めます。彼らは、憎んでいるあいだは知らずにいるのであり、知らずにいるあいだは不当に憎んでいるのです。無知は不当さを言い訳しながら、かえってそれを罪に定めます。その無知の証しはこうです。以前に憎んでいた者たちは、憎んでいたものがどういうものかを知らなかったから憎んでいたのです。その人々はみな、知らずにいるのをやめるとすぐに、憎むのもやめます。1:8 このような人々から、キリスト者が生まれます。もちろん、確かめたうえでのことです。彼らは、かつての自分を憎み始め、かつて憎んでいたものを公に言い表し始めます。こうしてわたしたちは、非難されるとおりの大勢になります。人々は、町が包囲されたとわめき立てます。野にも、村にも、島にもキリスト者がいる、と言うのです。男も女も、どの年齢の者も、どの身分の者も、高い地位の者までもが、この名に移っていくことを、損失であるかのように嘆きます。それでいて、何か隠れた善があるのではないかと考えてみようとはしないのです。1:9 もっと正しく推し量ることを自分に許さず、もっと近づいて確かめることを好みません。ここでだけ、人間の好奇心は鈍ります。ほかの人々は知ったことを喜ぶのに、彼らは知らずにいることを好むのです。アナカルシスは、音楽を知らない者が楽人を裁くことをとがめました。それなら、この人々のことは、なおさら強くとがめたことでしょう。愚かな者が賢い者を裁いているのですから。1:10 彼らは知らずにいることを選びます。すでに憎んでいるからです。それほどまでに、彼らは、知らないものについて先に決めてかかっています。知ってしまえば憎めなくなるものだ、と。けれども、もし憎むべき理由が何も見つからなければ、不当に憎むのをやめるのが、もちろん最もよいのです。逆に、憎しみに値すること

がはっきりすれば、憎しみは少しも減らず、かえって、続けるための力を増すでしょう。正義そのものの権威までも、それに加わるからです。1:11「しかし、多くの人を改宗させるからといって、善いものだということにはならない。実際、どれほど多くの者が悪へと形づくられていることか。どれほど多くの者が、ゆがんだ道へ寝返っていることか」と、人は言います。だれがそれを否定するでしょうか。けれども、本当に悪いものは、それにさらわれた者たちでさえ、善いものだと言って弁護する勇気はありません。1:12自然は、あらゆる悪に、恐れか恥を染み込ませました。現に、悪事を働く者は、隠れていたいと願い、人目に立つのを避けます。捕まれば震え、訴えられれば否みます。拷問にかけられても、たやすく、またいつも告白するとはかぎりません。少なくとも罪に定められれば、嘆き悲しみます。1:13彼らは、悪い心の衝動を、自分に向けて数え上げて責めるか、運命や星のせいにします。それが自分のものだとは思いたくないからです。悪だと分かっているのです。では、キリスト者には、何か似たところがあるでしょうか。キリスト者は、だれ一人恥じず、だれ一人悔いません。悔いるとすれば、ただ、以前にキリスト者でなかったことだけです。1:14キリスト者は、名指しされれば誇ります。訴えられても、弁解しません。尋問されれば告白し、尋問されなくても、自分から告白します。罪に定められれば、感謝します。悪に本来備わっているものを何一つ持たない悪とは、いったいどんな悪でしょうか。恐れも、恥も、言い逃れも、悔いも、嘆きもないのです。1:15どうでしょう。訴えられた者が喜ぶものが、悪でしょうか。訴えられることが願いであり、刑罰が幸いであるものが、悪でしょうか。あなたは、これを狂気と呼ぶこともできません。あなた自身が、知らずにいることを暴かれているのですから。

2〜3章　名だけが裁かれること

2:1 さらに、わたしたちがこの上なく罪深い者だということが確かだとしましょう。それなら、なぜわたしたちは、あなたがた自身から違う扱いを受けるのでしょうか。わたしたちと同じ者たち、つまりほかの罪人たちとは違う扱いです。同じ罪には、同じ扱いがなされるべきなのにです。2:2 ほかの人々は、わたしたちと同じどんな名で呼ばれても、自分の潔白を訴えます。自分の口でも、雇った弁護人の力でも訴えるのです。答弁し、言い争う機会も開かれています。弁護されず、聞かれもしないまま罪に定めることは、まったく許されないからです。2:3 ところが、キリスト者にだけは、何一つ言うことが許されません。訴えの疑いを晴らすことも、真理を弁護することも、裁き手が不正を犯さずに済むようなことも、言えないのです。待たれているのは、ただ、世の憎しみに必要なことだけです。つまり、名を告白することであって、罪を調べることではありません。あなたがたは、ほかの罪人を審理するときには、そうではありません。その者が、人殺しや、神聖を汚す者や、近親姦の者や、国家の敵という名を告白したとしましょう。わたしたちに着せられた罪状を挙げて言えば、こういう名です。それでも、あなたがたは、すぐにそれで満足して判決を下しはしません。それに伴うことまで問いただします。犯行の性質、回数、場所、手口、時、知っていた者、仲間です。2:4 わたしたちについては、そうしたことは何もありません。偽って言いふらされていることも、同じように問いただして引き出すべきなのにです。それぞれが、殺した赤子をこれまでにいくつ味わったか。暗闇に紛れて近親姦をいくつ犯したか。どんな料理人が、どんな犬がその場にいたか。2:5 すでに百人もの赤子を食べた者を掘り出したなら、その長官の誉れはどれほど大きかったことでしょう。ところが、わたしたちに対しては、捜し出すことさえ禁じられているのが分かります。実際、プリニウス・セクンドゥスは、属州を治めていたとき、何人かのキリスト者を罪に定め、何人かをその立場から退かせました。それでも、その数の多さそのものに困り果てて、この先どうすべきかを、当時の皇帝トラヤヌスに問い合わせました。彼は、こう申し立てました。いけにえをささげようとしない頑固さのほかには、彼らの秘儀について何も突き止められなかった。分かったのは、夜明け前に集まって、キリストと神に[1]歌をうたい、規律を誓いで固めていることだけだ。その集まりでは、人殺し、姦淫、詐欺、背信、そのほかの悪事を禁じている、と。2:6 そこでトラヤヌスは、この種の者たちは捜し出してはならないが、訴え出られたなら罰すべきだ、と返書を送りました。なんと、窮地に追い込まれて、ちぐはぐになった判決でしょう。潔白な者であるかのように、捜し出すことを禁じながら、罪人であるかのように、罰することを命じているのです。2:7 容赦しながら荒れ狂い、見て見ぬふりをしながら罰しています。判決よ、なぜあなたは、自分で自分を欺くのですか。罪に定めるのなら、なぜ捜し出しもしないのですか。捜し出さないのなら、なぜ放免もしないのですか。盗賊を追い詰めるためには、すべての属州にわたって、兵の駐屯所がくじで割り当てられます。2:8 大逆の罪人や国家の敵に対しては、だれもが兵士になります。捜し出すことは、仲間にまで、知っていた者にまで及びます。ただキリスト者だけは、捜し出してはならず、訴え出られるのはよいというのです。まるで、捜し出すことが、訴え出させること以外の何かを果たすかのようです。2:9 こうして、あなたがたは、訴え出られた者を罪に定めます。だれも、その者が捜し出されることを望まなかったのにです。思うに、その者が刑罰に値したのは、もはや罪人だからではなく、捜し出されるべきでないのに見つかったからなのでしょう。ですから、この点でも、あなたがたは、わたしたちに対して、悪人を裁く決まりに従っていません。ほかの者が否めば、告白させるために拷問にかけるのに、キリスト者にだけは、否ませるために拷問にかけるからです。もし悪いことであれば、わたしたちは否み、あなたがたは拷問で告白を強いるはずなのにです。2:10 実際、あなたがたは、名の告白から悪事が犯されたと確信しているかもしれません。それでも、だから拷問による取り調べで悪事を問いただす必要はな

い、とは考えないでしょう。あなたがたは今でも、人殺しを告白した者から犯行の次第を引き出しているからです。人殺しが何であるかを知っていながら、それでもそうしているのです。2:11 それだけに、なおさらあべこべです。あなたがたは、名の告白から、わたしたちの悪事を決めてかかっています。それなのに、拷問によって、告白を取り下げさせようとします。わたしたちが名を否めば、名の告白から決めてかかっていた悪事も、当然いっしょに否むことになるようにです。2:12 しかし、思うに、あなたがたは、この上なく悪い者と信じているわたしたちを、滅ぼしたくないのでしょう。実際、あなたがたは、人殺しには「否め」と言い、神聖を汚す者は、告白し続けるなら引き裂かせるのが常なのでしょうから。あなたがたは、罪人であるはずのわたしたちを、本当の罪人と同じようには扱っていません。それなら、わたしたちをこの上なく潔白な者と判断しているのです。この上なく潔白な者に対するように、あなたがたは、わたしたちが告白を続けることを望みません。その告白は、正義によってではなく、やむをえず罪に定めなければならないものだと、知っているからです。2:13 ある人が叫びます。「わたしはキリスト者だ」その人は、自分がそうであるものを言っています。あなたは、そうでないことを聞きたがります。真理を引き出すための長官であるあなたがたが、わたしたちからだけは、偽りを聞こうと骨を折っているのです。その人は言います。「わたしは、あなたが、そうかと尋ねているとおりの者だ」2:14「なぜ、ねじ曲げようとして、わたしを拷問にかけるのか。わたしは告白しているのに、あなたは拷問にかける。もし否んだら、どうするだろうか」もちろん、あなたがたは、ほかの者が否んでも、たやすくは信じません。ところが、わたしたちが否めば、すぐに信じます。このあべこべを怪しんでください。何かの力が、ひそかに潜んでいるのではないでしょうか。その力が、裁きの決まりにも本性にも反し、法そのものにも逆らって、あなたがたを手先に使っているのではないでしょうか。2:15 実際、わたしの思い違いでなければ、法は、悪人を掘り出すことを命じていて、隠すことは命じていません。告白した者を罪に定めるように定めていて、放免するようには定めていません。元老院決議も、皇帝たちの訓令も、そう定めています。あなたがたが仕えるこの統治は、市民にふさわしい支配であって、僭主の支配ではありません。2:16 僭主のもとでは、拷問は刑罰としても用いられたからです。あなたがたのもとでは、拷問は取り調べのためだけに抑えられています。拷問には、必要な告白に至るまで、あなたがたの法を守らせてください。告白が先にあれば、拷問はもう用がありません。判決が要るのです。罪人は、刑罰の負債を果たして帳消しにされるべきで、免除されるべきではありません。2:17 現に、だれも罪人を放免したいとは思いません。そう望むことは許されないのです。ですから、否むように強いられる者もいません。ところが、あなたは、キリスト者を、あらゆる悪事の罪人、神々の、皇帝たちの、法の、道徳の、自然全体の敵と考えています。それなのに、否むように強いています。否まなければ放免できない者を、放免するためにです。2:18 あなたは、法を裏切って馴れ合っています。つまり、あなたは、その者を潔白な者にするために、自分は罪人ではないと否ませたいのです。しかも、本人はもう望んでいないのに潔白にされ、過去のことで訴えられることもなくなるのです。このあべこべは、どこから来るのでしょうか。あなたがたは、次のことさえ考え直してみないのです。自分から告白する者のほうが、力ずくで否む者よりも信じるに値する、ということを。2:19 また、否むことを強いられた者は、本心からではなく否むのではないでしょうか。放免されると、法廷のすぐ裏で、あなたがたの敵意をあざ笑い、またキリスト者に戻るのではないでしょうか。あなたがたは、そのことも考え直してみないのです。このように、あなたがたは、何から何まで、わたしたちをほかの罪人とは違うように扱っています。ただ一つのことを目指して、わたしたちがその名から締め出されるようにしているのです。実際、キリスト者でない者のすることをすれば、わたしたちはその名から締め出されます。それなら、分かるはずです。問題になっているのは、何かの悪事ではなく、名なのです。この名を、ある敵対する働きの企みが追い回しています。その企みがまず目指すのは、人々が確かに知ろうとしないようにすることです。自分が確かには知らないと確かに知っていることを、です。2:20 だから人々は、わたしたちについて、証明されていないことを信じ、調べられることを望みません。信じてしまったほうがよいと思っていることが、そうではないと証明されてしまわないためです。こうして、あの敵対する企みにとって敵であるこの名は、自分の告白だけで罪に定められるのです。悪事は、決めてかかられただけで、証明されてはいません。2:21 だか

ら、わたしたちは、告白すれば拷問にかけられ、告白し続ければ罰せられ、否めば放免されます。名をめぐる戦いだからです。現に、なぜあなたがたは、判決の書き板から、その者を「キリスト者」と読み上げるのでしょうか。なぜ「人殺し」とも読み上げないのでしょうか。キリスト者が人殺しだというのなら、なぜ近親姦の者とも読み上げないのでしょうか。あなたがたが、わたしたちをそうだと信じているほかのどんなものとも、です。2:22 わたしたちに対してだけは、悪事の名そのもので宣告するのが、恥ずかしく、気が進まないのでしょうか。キリスト者が、どんな罪の名でも訴えられておらず、ただ名だけの罪だというのなら、それは、まことに汚れた罪です。

3:1 どうでしょう。多くの人は、目を閉じて、この名への憎しみにぶつかっていきます。そのため、だれかによい証言をするときにも、名へのそしりを混ぜてしまうのです。たとえば、「ガイウス・セイウスはよい人だ。ただ、キリスト者なのだが」と言います。3:2 また、ある人は言います。「わたしは驚いている。賢いルキウス・ティティウスが、急にキリスト者になったとは」だれも、考え直してみません。ガイウスがよい人で、ルキウスが賢いのは、キリスト者だからではないか。あるいは、賢くてよい人だから、キリスト者になったのではないか、と。3:3 人々は、知っていることをほめ、知らないことをけなします。そして、知っていることを、知らないことで打ち壊すのです。隠れたことを、明らかなことから前もって判断するほうが正しいのにです。明らかなことを、隠れたことから前もって罪に定めるよりもです。3:4 ほかの人々は、ある人々を、ほめているそのことによって、とがめます。この名を受ける前には、浮ついた、取るに足りない、ふしだらな者だと知っていた人々です。憎しみのあまり目が見えず、思わずほめ言葉にぶつかってしまうのです。「なんという女だったか。あんなに陽気で、あんなに楽しい女だったのに」3:5 「なんという若者だったか。あんなに浮かれて、あんなに恋多き男だったのに。それが、キリスト者になってしまった」こうして、行いが改まった者に、この名が罪として負わされます。中には、自分の利益を引き換えにして、この憎しみと取引する者さえいます。憎むものを家に置かずに済むなら、損をしても満足するのです。3:6 夫は、もう嫉妬する必要がなくなったのに、貞淑になった妻を離縁しました。父は、以前は我慢していたのに、従順になった息子を勘当しました。主人は、かつては穏やかだったのに、忠実になった奴隷を、目の届かない所へ追いやりました。だれでも、この名によって改まると、人の気に障るのです。3:7 善いことも、キリスト者への憎しみほどには重んじられないのです。そこで、もし名が憎まれているのなら、名にどんな罪があるのでしょうか。呼び名に、どんな訴えがあるのでしょうか。名の響きが、異国風であったり、不吉であったり、口汚かったり、淫らであったりするなら、別ですが。3:8 ところが、キリスト者（クリスティアヌス）という名は、その意味から言えば、油注ぎから来ています。また、あなたがたは、これを誤ってクレスティアヌスと発音します（あなたがたは、この名さえ確かには知らないのです）。それでも、その語は、優しさや慈しみから作られていることになります。3:9 こうして、害のない人々のうちで、害のない名までもが憎まれているのです。「しかし、一派は、まさにその創始者の名のゆえに憎まれるのだ」と、人は言うでしょう。ある教えが、師の名から取った呼び名を、従う者たちに付けたからといって、何が珍しいのでしょうか。3:10 哲学者たちも、創始者の名から、プラトン派、エピクロス派、ピュタゴラス派と呼ばれているではありませんか。集まりや居場所の土地の名から、ストア派、アカデメイア派とも呼ばれているではありませんか。同じように、医者はエラシストラトスから、文法家はアリスタルコスから呼び名を取っています。料理人さえ、アピキウスから呼び名を取っているではありませんか。3:11 それでも、創始者から伝えられた教えとともに、その名を名のることが、だれかの気に障ったことはありません。もちろん、だれかが、一派が悪く、したがって創始者も悪いと証明したとしましょう。その人は、名も悪く、一派と創始者の罪のゆえに憎しみに値すると証明することになるでしょう。ですから、名を憎む前に、まず創始者から一派を、あるいは一派から創始者を調べ直すのが筋だったのです。3:12 ところが、今は、そのどちらを調べることも知ることもなおざりにされたまま、名が罪に縛られ、名が攻め立てられています。そして、知られていない一派も、知られていない創始者も、ただ名の響きだけで、先に罪に定められています。名を呼ばれるからであって、罪を暴かれるからではありません。

訳注

1 『神としてのキリストに』と読む版もある。元の書簡は『神に対するように』。

4〜6章　法と父祖の定め

4:1 さて、わたしたちに向けられた世の憎しみの不正をあばくために、前置きとして、これだけのことを述べました。ここからは、わたしたちが潔白であるという点に立って論じます。わたしたちに着せられる罪を退けるだけではありません。それを着せる者たち自身に投げ返します。そうすれば、人々はこのことからも知るでしょう。自分たちのうちにあるとは気づいていないものが、キリスト者のうちにはないことを。同時に、訴える者たちは恥じ入るでしょう。最悪の者が最善の者を訴えている、とまでは言いません。しかし、彼らの望むとおり、自分と同じ者たちを訴えているのです。4:2 わたしたちは、ひそかに犯していると言われていることの一つ一つに答えます。それは、彼ら自身が公然と犯しているのを、わたしたちが見ていることです。それによって、わたしたちは、罪深い者、愚かな者、罪に定めるべき者、あざけるべき者とみなされているのです。4:3 しかし、わたしたちの真理は、どんな非難にも立ち向かいます。すると最後には、法の権威が、真理に対して持ち出されます。法が定めた後では何も考え直すべきではない、と言われるのです。あるいは、心ならずも、従わなければならないことが真理より重んじられるのです。そこで、わたしはまず法について、法の守り手であるあなたがたと渡り合います。4:4 まず、あなたがたは「おまえたちは存在してはならない」と言って、厳しく定めます。しかも、もっと人間らしく考え直すこともなく、それを命じます。許されないのが当然だったからではなく、ただそう望むから許さないと言うのなら、あなたがたは暴力を公言しているのです。城塞から押しつける、不当な支配を公言しているのです。4:5 しかし、許されるべきでないから許したくないのだ、というのなら、許されるべきでないのは、疑いなく、悪く行われることです。そして、まさにそのことによって、よく行われることは許される、と前もって判断されているのです。4:6 あなたの法が禁じたことが、よいことだと、わたしが見いだしたとしましょう。それなら、あなたの法は、あの前もっての判断によって、それをわたしに禁じることができないのではありませんか。悪いことであれば、正当に禁じるはずのことをです。あなたの法が誤ったのなら、思うに、人間が考え出したものだからです。天から落ちてきたものではないのですから。4:7 人間が、法を作るときに誤ることもあり、法を退けるときに正気に返ることもあると、あなたがたは驚くのですか。実際、リュクルゴスの法でさえ、ラケダイモン人に改められると、作った本人にひどい苦しみを与えたではありませんか。そのため、彼は引きこもって食を断ち、自分で自分を裁いたのです。4:8 あなたがた自身も、毎日、経験の光で古い時代の暗がりを照らしています。そして、古く荒れ果てた法の森をまるごと、皇帝の勅答と布告という新しい斧で、刈り込み、切り倒しているではありませんか。パピウス法は、ユリウス法が結婚を結ばせるより先に、子をもうけることを強いる、まったく空しい法です。それほどの権威を帯びて古びていたこの法を、つい昨日、皇帝たちのうちで最も揺るぎないセウェルスが、退けたではありませんか。4:9 また、判決を受けた者を、債権者たちが切り分けてよいとする法もありました。しかし、のちに人々の合意によって、その残酷さは削り取られ、死刑は恥の印に変えられました。財産の公売が用いられるようになり、それは、人の血を流すより、顔に血をのぼらせるほうを選んだのです。4:10 あなたがたが洗い清めるべき法が、まだどれほど隠れていることでしょう。法を推すのは、年の多さでも、定めた者の位でもなく、ただ公正さだけです。ですから、法は、不公正だと認められれば、罪に定められて当然です。その法が人を罪に定めているとしてもです。4:11 不公正と言うだけで済むでしょうか。いや、法が名を罰するのなら、愚かでもあります。行いを罰するのなら、なぜ名だけを根拠に行いを罰するのでしょうか。ほかの者については、名ではなく犯行によって証明したうえで罰する行いなのにです。4:12 わたしが近親姦の者だというのなら、なぜ調べないのでしょうか。赤子殺しについては、なぜ白状させないのでしょうか。わたしが神々に、カイザルたちに、何かの罪を犯しているというのなら、なぜ言い分を聞

かないのでしょうか。わたしには、身の潔白を示す手立てがあるのです。どんな法も、犯すことを禁じている事柄を、詮議することまでは禁じていません。許されないことが犯されたと確かめなければ、裁き手は正しく罰することができないからです。また、法が罰するのがどんなことかを知らなければ、市民は法に忠実に従うことができないからです。4:13 どんな法も、自分が正しいことを、自分一人だけが知っていればよいのではありません。従うことを期待する人々にも、それを知らせなければならないのです。そもそも、吟味されることを望まない法は疑わしいものです。吟味で認められないまま支配するなら、それは邪な法です。

5:1 このような法の起こりについて、少し振り返ってみましょう。古い定めがありました。どの神も、元老院に認められなければ、皇帝によって祀られてはならない、というものです。マルクス・アエミリウスが、自分の神アルブルヌスのことで、それを身をもって知っています。5:2 このことも、わたしたちの側の言い分に役立ちます。あなたがたのもとでは、神であるかどうかが、人の思惑で量られているのです。神は、人に気に入られなければ、神とはならないでしょう。今では、人のほうが神に恵みを垂れなければならないのです。5:3 さて、ティベリウスの時代に、キリスト者という名が世に入ってきました。ティベリウスは、シリア・パレスチナから知らせを受けました。その知らせは、あの地で、キリストご自身の神性の真理が現れたことを明らかにしていました。彼はそれを元老院に持ち込み、自分が真っ先に賛成の票を投じました。5:4 元老院は、自分で認めたものではなかったので、退けました。カイザルは考えを変えず、キリスト者を訴える者たちを危険な目にあわせると脅しました。あなたがたの記録を調べてください。そこに見いだすでしょう。ちょうどローマで起こりつつあったこの一派に向かって、最初にカイザルの剣を振るって荒れ狂ったのは、ネロだったことを。5:5 しかし、わたしたちは、自分たちへの断罪をこのような者が始めたことを、むしろ誇りとします。ネロを知る人なら、ネロに罪に定められたのは、何か大きな善にほかならないと分かるからです。ドミティアヌスも、残酷さではネロの片割れで、同じことを試みました。しかし、彼にも人の心があったので、始めたことをたやすくやめ、追放した者たちを呼び戻しさえしました。5:6 わたしたちを迫害するのは、いつもこのような者たちです。不正な者、不敬な者、恥ずべき者です。あなたがた自身も彼らを罪に定めるのが常で、彼らに罪に定められた者たちを、もとに戻すのが常でした。それにしても、それ以来今日まで、神のことも人のことも知る皇帝たちは大勢いました。その中から、キリスト者を討ち滅ぼそうとした者を、一人でも挙げてみてください。5:7 ところが、わたしたちは反対に、保護者を挙げることができます。この上なく重々しい皇帝マルクス・アウレリウスの手紙を調べてくだされば分かります。その手紙で彼は、ゲルマニアでのあの渇きが雨によって消えたと証言しています。その雨は、たまたまキリスト者であった兵士たちの祈りによって得られたものでした。5:8 彼は、このような人々から刑罰を公然と取り除きはしませんでした。けれども、別の仕方で、公然と刑罰を無効にしました。訴える者たちに罪の宣告まで加えたのです。しかも、もっとむごい宣告です。それなら、これらの法は、どのようなものでしょうか。わたしたちに対してそれを振るうのは、不敬な者、不正な者、恥ずべき者、凶暴な者、愚かな者、狂った者だけなのです。5:9 トラヤヌスは、キリスト者を捜し出すことを禁じて、これらの法をいくらか骨抜きにしました。ハドリアヌスは、あらゆる珍しいことを探った人でしたが、この法を押しつけはしませんでした。ウェスパシアヌスも、ユダヤ人を征服した人でしたが、押しつけませんでした。ピウスも、ウェルスも、押しつけませんでした。5:10 最悪の者たちを根絶やしにすべきだと判断するのは、確かに、その仲間たちよりも最善の人々のほうでしょう。最善の人々は、彼らに敵対しているからです。

6:1 さて、法と父祖の定めを守り、背く者を罰する、この上なく敬虔な人々に答えてもらいたいものです。先祖の決めたことに対する、彼ら自身の忠実さと敬意と従順についてです。どの定めからも離れなかったか。どの点でも道を外れなかったか。規律のうち、必要でこの上なくふさわしいものを、すべて消し去りはしなかったか、と。6:2 浪費と見栄を抑えたあの法は、どこへ行ってしまったのでしょうか。一回の食事に銅貨百枚より多くを充ててはならない、と命じた法です。雌鶏は一羽より多く出してはならず、それも太らせたものであってはならない、と命じた法です。三キロあまりの銀を持っていたというだけで、見栄の大きな証しだとして、貴族を元老院から退けた法です。風紀を汚すために建ちかけた劇場を、すぐに取り壊させた法です。官職や由緒ある生まれのしるしを、軽々し

く、罰も受けずに身に着けることを許さなかった法です。6:3 こう尋ねるのは、次のことが見えるからです。今では「百の宴」という名は、十万セステルティウスの費えにちなんで付けるべきものになっています。銀の鉱山がまるごと、大皿に打ち延ばされています。それが元老院議員のものであれば、まだよいでしょう。ところが、解放奴隷や、いまだに鞭で打たれる身の者たちのものなのです。6:4 劇場も、一つずつでは足りず、むき出しのままでも足りなくなっているのが見えます。冬にさえ恥知らずな楽しみが冷えないように、ラケダイモン人が初めて、見世物のための外套を考え出したのですから。また、既婚の婦人と娼婦とのあいだに、身なりの違いが何も残っていないのが見えます。6:5 女たちについては、慎みと節度を守っていた先祖の定めも廃れてしまいました。かつては、どの女も金を知りませんでした。ただ一本の指だけは別で、婚約者が婚約の指輪でそれを押さえていたのです。また、女たちはひどくぶどう酒から遠ざけられていました。酒蔵の戸棚の封を切った既婚の婦人を、身内の者たちが飢えさせて死なせたほどです。ロムルスの時代には、ぶどう酒に手を触れた女が夫のメテンニウスに殺され、夫は罰を受けませんでした。6:6 そのために、女たちは身内の者に口づけをしなければなりませんでした。息で調べられるためです。あの結婚の幸せは、どこへ行ったのでしょうか。それは、もちろん、身持ちのよさによって栄えていた幸せです。そのおかげで、都が建てられてからほぼ六百年のあいだ、離縁状を書いた家は一つもありませんでした。6:7 ところが今では、女たちの体には、金のせいで軽い所は一つもありません。ぶどう酒のせいで、はばかりなくできる口づけは一つもありません。離縁は、もう願いごとにさえなっています。まるで、それが結婚の実りであるかのようです。6:8 あなたがたの神々そのものについても、父祖が先を見通して定めたことを、あなたがたは取り消してしまいました。あれほど従順なあなたがたがです。執政官たちは、元老院の権威によって、父リベルとその秘儀を、都からだけでなく、イタリア全土から追い払いました。6:9 セラピスとイシスとハルポクラテスは、自分たちの犬の頭の神とともに、カピトリウムに持ち込むことを禁じられました。つまり、神々の議場から追い出されたのです。執政官のピソとガビニウスは、彼らの祭壇をも倒して、彼らを退けました。もちろん、二人はキリスト者だったわけではありません。恥ずべき、怠惰な迷信の悪徳を抑えようとしたのです。6:10 あなたがたは、これらの神々をもとに戻し、この上ない威光を与えました。あなたがたが先祖に負っている敬虔は、敬意は、どこにあるのでしょうか。身なりでも、食べ物でも、暮らしの調度でも、考え方でも、そして言葉そのものでも、あなたがたは曾祖父たちと縁を切りました。いつも古い時代をほめながら、日ごとに新しく暮らしています。6:11 このことから分かります。あなたがたは、先祖のよい定めから離れていきながら、守るべきでないものを保ち、守っています。守るべきものは、守らなかったのにです。父祖から伝えられたもので、あなたがたが今もこの上なく忠実に守っていると見えるものがあります。そのことでこそ、あなたがたはキリスト者を背いた罪人と決めつけました。神々を拝む熱心のことです。古い時代は、これについてこそ最も大きく誤りました。あなたがたは、すでにローマのものとなったセラピスのために、祭壇を建て直しました。すでにイタリアのものとなったバックス（父リベル）に、自分たちの狂乱をいけにえとしてささげています。それでも、しかるべき所で示しましょう。この熱心さえ、先祖の権威に逆らって、あなたがたに軽んじられ、なおざりにされ、壊されていることを。6:12 今は、隠れた悪事についてのあの悪評に答えるつもりだからです。もっと明らかなことへ進む道を、自分のために清めておくためです。

7〜8章　赤子殺しと近親姦の噂

7:1 わたしたちは、この上ない悪人だと言われています。赤子殺しの秘儀を行い、その肉を食べ、宴の後には近親姦を犯す、というのです。明かりを倒す犬たちが、闇の取り持ち役となって、不敬な情欲の慎み[1]を守ってやるのだそうです。しかし、わたしたちは、いつもそう言われるばかりです。それなのに、あなたがたは、これほど長く言われていることを、掘り起こそうともしません。7:2 それなら、信じているのなら、掘り起こしてください。掘り起こさなかったのなら、信じないでください。あなたがた自身の見て見ぬふりが、あなたがたに対する抗弁となります。あなたがた自身もあえて掘り起こそうとしないものは、存在しないのだ、と。あなたがたは、キリスト者に対して、まるで別の務めを刑吏に命じています。していることを言わせるのではありません。自分が何者であるかを否ませるのです。7:3 この教えの始まりは、すでに述べたとおり、ティベリウスの時代です。真理は、自分への憎しみとともに始まりました。現れるとすぐに、敵とされたのです。よそ者の数だけ、真理には敵がいます。とりわけ、ユダヤ人はねたみから、兵士たちはゆすりのために敵となります。わたしたち自身の家の者たちさえ、生まれつきの性から敵となるのです。7:4 わたしたちは、毎日取り囲まれ、毎日密告されています。ほかならぬ自分たちの集まりや会合のさなかに、たいてい襲われます。それなのに、だれが一度でも、そのように泣き声を上げている赤子のいる場面に踏み込んだでしょうか。だれが、キュクロプスやセイレンのような血まみれの口を、見つけたときのまま、裁き手のために取っておいたでしょうか。7:5 だれが、せめて妻たちの身に、何か汚れた跡を見つけたでしょうか。だれが、そのような悪事を見つけ、当の人々を引き立てていながら、それを隠したり、金と引き換えに見逃したりしたでしょうか。わたしたちがいつも隠れているのなら、わたしたちの犯すことが漏れたのは、いつのことでしょうか。7:6 いや、そもそも、だれから漏れることがありえたでしょうか。実際、罪人たち自身から漏れたのでないことは確かです。どの秘儀でも、決まりとして、沈黙を守る誓いが求められるからです。サモトラケやエレウシスの秘儀でさえ、口外されません。まして、こうした事柄なら、なおさらでしょう。漏れれば、神の罰が取っておかれるあいだにも、さしあたり人間の罰まで招くのですから。7:7 それなら、自分で自分を漏らしたのでないなら、よそ者が漏らしたことになります。では、よそ者は、どこから知ったのでしょうか。敬虔な手ほどきの儀式でさえ、いつも手ほどきを受けていない者たちを遠ざけ、人目に用心しているのにです。不敬な者たちのほうが恐れを知らない、というのなら別ですが。7:8 噂というものの性質は、だれもが知っています。あなたがたの言葉に『噂という悪ほど速いものはない』とあります。なぜ噂は悪なのでしょうか。速いからでしょうか。密告者だからでしょうか。それとも、たいていは嘘つきだからでしょうか。7:9 噂は、何か本当のことを運んでくるときでさえ、嘘という欠陥から逃れられません。真実から削り、付け加え、作り変えるからです。それだけではありません。噂には、嘘をついているあいだしか生き延びられない、という定めがあります。何も証明しないあいだだけ、生きているのです。実際、証明したとたんに、噂は消えてしまいます。知らせるという務めを果たしたかのように、事実を引き渡すのです。そこから先は、事実として扱われ、事実として語られます。7:10 たとえば、だれも「ローマでこんなことがあったそうだ」とは言いません。「あの人が属州を割り当てられたという噂だ」とも言いません。「あの人が属州を割り当てられた」、「これはローマで起こった」と言うのです。7:11 噂とは、不確かなものの名です。確かなところに、噂の居場所はありません。いったい、思慮のない者でなければ、だれが噂を信じるでしょうか。知恵ある者は、不確かなことを信じないからです。だれにでも分かることがあります。噂は、どれほど広く行き渡り、どれほど言い張られて築かれていても、いつか口火を切った一人から生まれたに違いないのです。7:12 そこから噂は、舌から耳へと伝わり、忍び込んでいきます。こうして、小さな種の欠陥が、風評の残りの部分をすべて曇らせます。

そのため、だれも考え直さないのです。最初のあの口が嘘をまいたのではないか、ということを。それは、よくあることです。ねたむ心のたくらみから、疑いの勝手な判断から、あるいは、ある人々に生まれつき備わった、嘘をつく楽しみからです。その楽しみは、新しく身についたものではないのです。7:13 しかし幸いなことに、時はすべてを明らかにします。あなたがたの諺や格言も、それを証言しています。これは自然の定めによります。自然は、何事も長くは隠れていないように整えたのです。噂が言いふらさなかったことでさえ、そうです。7:14 ですから、これほど長いあいだ、キリスト者の悪事を噂だけが知っているのは、当然です。あなたがたは、この密告者を、わたしたちに対して持ち出します。しかし噂は、かつて言いふらし、これほどの年月をかけて世の思い込みに固めたことを、今に至るまで証明できていません。それで、わたしは、自然そのものの証言を持ち出すのです。そんなことを信じるべきだと決めてかかる者たちに対してです。

8:1 見てください。わたしたちは、これらの悪事の報いを掲げます。これらの悪事は、永遠のいのちを約束するのだそうです。さしあたり、それを信じてみてください。実際、わたしが問いたいのはこのことです。信じたあなたは、そんなことを胸に抱えたまま永遠のいのちに至ることに、それだけの値打ちがあると考えるでしょうか。8:2 さあ、来なさい。刃を赤子に突き立てなさい。だれの敵でもなく、だれに対しても罪のない、すべての人の子である赤子にです。それがほかの人の務めだというなら、あなたは、ただそばに立っていなさい。生きる前に死んでいく人間のそばにです。逃げていく新しい魂を待ち受けなさい。あの初々しい血を受けなさい。その血をあなたのパンにしみ込ませ、喜んで食べなさい。8:3 そのあいだに、席に着きながら、場所を数えておきなさい。どこが母の席で、どこが姉妹の席かをです。よく覚えておきなさい。犬のもたらす闇が落ちたとき、間違えないためです。近親姦を犯さなければ、償いの要る過ちを犯したことになるからです。こうした手ほどきを受け、封印を受ければ、あなたは永遠に生きるのです。8:4 答えてほしいものです。永遠には、それだけの値打ちがあるかどうか。もしないのなら、だからこそ、そんなことは信じるべきではありません。たとえ信じたとしても、あなたがそれを望むとは、わたしは認めません。たとえ望んだとしても、あなたにそれができるとは認めません。それなら、あなたがたにできないのに、なぜほかの者たちにはできるのでしょうか。8:5 ほかの者たちにできるのに、なぜあなたがたにはできないのでしょうか。思うに、わたしたちは別の性質を持っているのでしょう。わたしたちは、犬の頭の人々か、足で日陰を作る人々だとでもいうのでしょうか。歯の並びが違い、近親姦の情欲に向かう筋が違う、とでもいうのでしょうか。人間について、そんなことを信じるあなたなら、それをすることもできるはずです。8:6 あなた自身も人間です。キリスト者も人間であるのと同じです。それができないあなたは、信じるべきでもありません。キリスト者も人間であり、あなたと同じものだからです。「しかし、知らない者には、こっそり仕組まれ、だまして押しつけられるのだ」と、人は言うでしょう。8:7 実際、彼らは、キリスト者についてそのようなことが言われているのを、知らなかったのでしょう。自分のために必ず見張り、あらゆる注意を払って調べるべきことなのにです。ところが、手ほどきを受けたい者は、思うに、まずあの祭儀の父のもとへ行き、準備すべきものを書き取るのが習わしです。8:8 すると、その父は言います。「まだ柔らかい赤子が要る。死を知らず、おまえの小刀の下でも笑っているような赤子だ。それから、パンも要る。それで生臭い血を受けるのだ。さらに、燭台と灯火、何匹かの犬と肉の切れ端も要る。肉の切れ端は、犬が明かりを倒すほうへ身を伸ばすようにするためだ。何よりも、おまえは母と姉妹を連れて来なければならない」8:9 彼女たちが嫌がったら、あるいは、そもそもいなかったら、どうなるのでしょうか。結局、身寄りのない独り身のキリスト者は、どうなるのでしょうか。思うに、兄弟か息子でなければ、正規のキリスト者にはなれないのでしょう。では、どうでしょう。これらすべてが、本人の知らないうちに準備されるのだとしたら。8:10 確かに、彼らは後で知り、それに耐え、それを赦すのでしょう。声を上げれば罰を受けると恐れるのだ、というのでしょうか。守ってもらって当然の人々がです。そんなことを胸に抱えて生きるより、進んで死ぬほうを選ぶはずの人々がです。では、恐れるのだとしましょう。それなら、なぜその後もとどまり続けるのでしょうか。8:11 実際、当然こうなるはずです。あなたは、前もって知っていたら、なりはしなかったはずのものに、もうそれ以上とどまりたいとは思わないでしょう。

訳注

1 多くの写本は『不敬な情欲の恥知らずを取り持つ』と読む。

9章　あなたがたのもとの赤子殺しと近親姦

9:1 わたしは、こうした非難をなおいっそう退けるために、それをあなたがた自身が行っていることを示しましょう。あるものは公然と、あるものはひそかに行われています。そのために、あなたがたは、わたしたちについても、そう信じたのかもしれません。アフリカでは、ティベリウスが地方総督であったときまで、赤子が公然とサトゥルヌスにいけにえにされていました。ティベリウスは、その祭司たちを、ほかならぬ彼らの神殿の木々に、奉納物として十字架にかけてさらしました。その木々は、彼らの悪事を陰で覆っていたのです。わたしたちの祖国の兵士たちが、その証人です。彼らは、まさにその務めを、その地方総督のために果たしたのです。9:2 しかし、今でも、この祭儀としての悪事は、ひそかに続けられています。あなたがたを侮っているのは、キリスト者だけではありません。どんな悪事も、永久に根絶やしにされることはありません。どんな神も、自分の習わしを変えはしません。9:3 サトゥルヌスは、自分の子供たちさえ容赦しなかったのですから、当然、他人の子供たちも容赦せずに続けました。しかも、その子供たちは、実の親たちが自分から差し出していたのです。親たちは、喜んでそれに応じ、赤子をあやしました。赤子が泣きながらいけにえにされることのないためです。9:4 しかも、身内殺しは、ただの人殺しとは大いに違います。ガリア人のもとでは、大人がメルクリウスに屠られます。タウリ人の作り話は、それにふさわしい劇場に返しておきましょう。見てください。敬虔なアエネアスの子孫たちの、あの宗教心のきわめて篤い都にも、あるユピテルがいます。人々は、その祭りの競技のときに、このユピテルに人の血を浴びせるのです。9:5 「しかし、それは獣と戦わされる者の血だ」と、あなたがたは言います。思うに、それなら人の血より軽い、というのでしょうか。それとも、悪い人間の血だから、かえって醜いのではありませんか。いずれにせよ、それが人殺しによって注がれることは確かです。ああ、キリスト者のユピテル、残酷さにかけては父のただひとりの子よ。9:6 しかし、赤子殺しについては、祭儀として行われるか、思いのままに行われるかに違いはありません。身内殺しは人殺しと違うとしても です。そこで、わたしは民衆のほうに向き直りましょう。ここに立ち並び、キリスト者の血に口を開けている人々の中から、あなたがたが望むだけ、その良心の戸を叩いてみましょうか。わたしたちに対してこの上なく正しく厳しい長官である、あなたがた自身の中からでもかまいません。生まれた自分の子供を殺している者たちのことです。9:7 殺し方にも違いがあるのですから、あなたがたのほうが確かに残酷です。水の中で息を絞り取ったり、寒さと飢えと犬にさらしたりするのです。大人でさえ、刃で死ぬほうを選ぶはずだからです。9:8 しかし、わたしたちには、人殺しがきっぱりと禁じられています。そのため、胎に宿ったものでさえ、滅ぼすことは許されません。血がまだ人間へと分け取られているあいだでもです。生まれるのを妨げるのは、人殺しを早めることです。生まれた魂を奪うのも、生まれつつある魂を打ち壊すのも、変わりはありません。9:9 これから人間になる者も、人間です。実もまた、すべてすでに種の中にあるのです。血を糧とすることや、そうした悲劇めいたごちそうについては、どこかに書かれていないか、読んでみてください（ヘロドトスにあると思います）。ある民族が、腕から流した血を互いに味わい、盟約の固めとした、というのです。9:10 カティリナのもとでも、何かが味わわれました。スキタイ人の同族のある人々のもとでは、死んだ者はだれでも、身内の者たちに食べられるといいます。話が遠くへそれました。今日、この地でも、ベッロナに捧げられた血が、印を押しています。切り裂いた腿から手のひらに受け、食べるために与えられる血です。9:11 また、剣闘の見世物で、闘技場で喉を切られた罪人たちの血を、癲癇を治すために持ち去る者たちは、どこにいるのでしょうか。喉から流れ落ちる新しい血を、むさぼるような渇きで受けて、持ち去るのです。また、闘技場の獣の肉で食事をする者たち、猪の肉や鹿の肉を求める者たちは、どこにいるのでしょうか。9:12 その猪は、組み合ううちに、自分が血まみれにした人の血を、その体にぬぐいつけたの

です。その鹿は、剣闘士の血の中に倒れたのです。熊の腹そのものまでが求められます。人の臓物がまだこなれずに残っている腹です。こうして、人間で養われた肉を、人間がげっぷとともに吐き出すのです。9:13 こうしたものを食べているあなたがたは、キリスト者の宴と、どれほど隔たっているでしょうか。また、獣のような情欲で、人の肢体にむさぼりつく者たちもいます。生きた者を食らうのだから、していることが軽いとでもいうのでしょうか。これから血になるものをなめるのだから、人の血で汚れに捧げられていることが軽い、とでもいうのでしょうか。9:14 確かに、彼らは赤子を食べはしません。むしろ、成人した者を食べるのです。あなたがたの思い違いは、キリスト者の前で恥じ入るがよいのです。わたしたちは、動物の血でさえ、食べ物の中に入れません。そのために、絞め殺したものや自然に死んだものも断っています。どんな形でも、血で汚れないためです。臓物の中に埋もれた血であってもです。9:15 その証拠に、あなたがたは、キリスト者を試すときに、血を詰めてふくらませた腸詰めまで差し出します。もちろん、道を踏み外させようとするそのものが、彼らのもとでは許されていないと、よく知っているからです。それにしても、どういうことでしょうか。家畜の血を嫌うとあなたがたが確信している者たちが、人の血に口を開けていると信じるとは。あなたがたが、人の血のほうがおいしいと、試して知っているのでなければです。9:16 それなら、その人の血も、キリスト者を調べる道具として持ち出すべきです。小さな火鉢や香箱と同じようにです。そうすれば、供え物を拒むことと同じように、人の血を欲しがることでも、キリスト者だと証明されるはずだからです。さもなければ、もし味わわなかったら、いけにえをささげたときと同じように、否んだ者とされるはずです。それに、牢につながれた者たちを審理し、罪に定めるときに、あなたがたに人の血が足りないことも、決してないでしょう。9:17 同じように、近親姦の者といえば、ユピテル自身が教えた者たちより、だれがまさっているでしょうか。ペルシャ人が自分の母と交わることは、クテシアスが伝えています。マケドニア人も疑わしいものです。悲劇『オイディプス』を初めて聞いたとき、近親姦の嘆きをあざ笑って、「母のところまで行き着いたのさ」と言い合ったからです[1]。9:18 さあ今度は、考えてみてください。取り違えによって、近親姦の交わりがどれほど起こりうるかをです。放縦の見境のなさが、その材料を差し出しているのです。まず、あなたがたは自分の子供を捨てます。通りかかった他人のあわれみに拾われるためです。あるいは、よりよい親の養子にするために、親の権から手放します。9:19 よそへ移された血筋は、いつかその記憶が失われるに違いありません。そして、取り違えが起こるやいなや、そこから近親姦が伝わって広がっていきます。血筋が、悪事とともに這い広がっていくのです。そのうえ、どこにいても、家でも、旅先でも、海の向こうでも、情欲が連れ添っています。至る所での情欲のほとばしりは、どこかで、本人の知らないうちに子をもうけることがたやすくできます。わずかな種の一部からでもです。こうして、まき散らされた血筋は、人と人との交わりの中で、自分の出どころに行き当たります。しかも、近親姦の血に目の見えない者は、それと見分けないのです。9:20 わたしたちは、この上なく注意深く、忠実な貞潔によって、そうした成り行きから守られています。わたしたちは、淫らな交わりからも、結婚の後のあらゆる逸脱からも安全です。それと同じだけ、思いがけない近親姦からも安全なのです。9:21 ある者たちは、もっと安全に、この取り違えの力のすべてを、純潔の禁欲によって退けています。年老いても童のままの者たちです。こうしたことがあなたがたのうちにあると考えるなら、同じように、それがキリスト者のうちにはないことも見抜くはずです。同じ目が、その両方を告げてくれたはずです。9:22 しかし、二種類の盲目は、たやすく重なり合います。あるものが見えない者には、ないものが見えるように思えるのです。わたしは、すべてについて、このことを示しましょう。今度は、もっと明らかなことについて話します。

訳注

1 原文はギリシア語。写本で崩れていて、読みも意味も定まらない。

10〜11章　人間であった神々

10:1 「おまえたちは神々を拝まない。皇帝たちのために供え物もささげない」と、あなたがたは言います。当然、わたしたちは、同じ理屈で、ほかの人のためにも供え物をささげません。自分自身のためにもささげないからです。神々を拝まないと、きっぱり決めているのです。10:2 そのため、わたしたちは、神聖を汚す者、大逆の罪人として訴えられます。これが訴えの要点です。いや、訴えのすべてです。そして、確かに審理されるに値します。決めつけや不正が裁くのでなければです。決めつけは真理に望みを捨て、不正は真理を拒むのです。10:3 わたしたちは、あなたがたの神々が神ではないと知ったときから、それを拝むのをやめるのです。ですから、あなたがたが求めるべきは、このことです。それが神々ではなく、それゆえ拝むべきものではないことを、わたしたちが証明することです。もし神々であったなら、そのときに初めて、拝まれるべきだったからです。10:4 キリスト者は、ある者たちを、神ではないと思って拝まずにいます。もし、それが神々であることがはっきりするなら、そのときこそ、キリスト者も罰せられるべきでしょう。「しかし、われわれにとっては神々だ」と、あなたがたは言います。わたしたちは、あなたがたから、あなたがたの良心へと上訴します。良心がわたしたちを裁けばよいのです。罪に定めればよいのです。あなたがたのそうした神々がみな人間であったことを、良心が否めるならです。10:5 もし良心までもが否むなら、良心は、自分の持つ昔の記録によって暴かれるでしょう。良心は、その記録から神々のことを知ったのです。今日に至るまで、神々の生まれた町々と、神々が何かを行って跡を残した地方も、証しを立てています。その地では、神々が葬られていることまで示されているのです。10:6 それでは、わたしは、これほど多く、これほど大いなる神々を、一人一人たどっていきましょうか。新しい神と古い神、異民族の神とギリシアの神とローマの神、よそから来た神と捕虜にされた神と養子に迎えた神をでしょうか。固有の神と共通の神、男神と女神、田舎の神と町の神、船乗りの神と兵士の神をでしょうか。呼び名を並べることさえ、むだなことです。ですから、かいつまんでまとめましょう。それも、あなたがたに知らせるためではなく、思い出させるためです。10:7 あなたがたは、確かに、忘れたふりをしているからです。あなたがたのもとでは、サトゥルヌスより前の神は一人もいません。神性の全体、あるいは少なくとも、より力があってよく知られた神性は、サトゥルヌスから出ているのです。ですから、始まりについてはっきりしたことは、その子孫についても当てはまるでしょう。10:8 さて、サトゥルヌスについて、書物が教えるかぎりではどうでしょうか。ギリシア人のディオドロスもタッロスも、カッシウス・セウェルスもコルネリウス・ネポスも、人間としか伝えていません。こうした昔のことを書き記したほかのだれも、同じです。事物の証拠についていえば、イタリアそのものほど確かな証拠は、どこにも見当たりません。サトゥルヌスは、多くの遠征を重ね、アッティカで客として迎えられたあと、イタリアに落ち着いたのです。ヤヌスに、あるいはサリイの言うようにヤニスに、迎えられてのことでした。10:9 サトゥルヌスが住んでいた丘は、サトゥルヌスの丘と呼ばれました。杭を打って境を定めた町は、今もサトゥルニアです。そして、イタリア全体も、かつてのオエノトリアという名の後に、サトゥルニアと呼ばれていました。書き板と、像を刻印した貨幣は、初めてサトゥルヌスによって作られました。そのため、サトゥルヌスは国庫をつかさどっているのです。10:10 しかし、サトゥルヌスが人間なら、当然、人間から生まれたのです。人間から出たのだから、当然、天と地から生まれたのではありません。ただ、親の知れない者を、わたしたちみながその子とみなされうるものの子と呼ぶのは、たやすいことでした。10:11 実際、敬意と誉れのために、天を父、地を母と呼ばない者がいるでしょうか。あるいは、人間の習いからも、そう呼びます。素性の知れない者や、思いがけず現れた者は、天から降ってきたと言われるのです。10:12 そのため、突然現れたサトゥルヌスは、至る所で天の者と呼ばれることになりました。実際、生まれのはっきりしない者を、世間は大地

の子とも呼ぶのです。昔の人々は、まだ粗野に暮らしていました。そのため、見知らぬ男を見ただけで、神を見たかのように心を動かされたのです。そのことは言わずにおきます。今日、すでに洗練された人々でさえ、数日前に国を挙げての喪で死んだと認めた者を、神として祀っているのにです。10:13 サトゥルヌスについては、わずかな言葉ながら、もう十分でしょう。ユピテルについても、人間であり、人間から生まれた者であることを示しましょう。そして続いて、その一族の群れ全体が、死すべきものであり、自分の種に等しいものであることも示しましょう。

11:1 あなたがたは、彼らが人間であったことを、あえて否もうとはしません。それと同じように、死後に神々にされたと言い張ることにしました。そこで、彼らを神々にすることを求めた理由を検討してみましょう。まず、あなたがたは、もっと高いある神がいることを認めなければなりません。神性の持ち主とでもいうべき者で、人間から神々を作った者です。11:2 彼らは、自分の持っていない神性を、自分で身に取ることはできなかったはずだからです。また、それを持たない者たちに与えることができたのも、それを固有に持っていた者のほかにはいなかったはずだからです。それに、もし神々を作る者がだれもいないのなら、作り手を取り去っておいて、神々が作られたと決めてかかってもむだです。11:3 確かに、もし自分で自分を神にすることができたのなら、彼らは決して人間ではなかったはずです。もちろん、よりよい身分になる力を持っていたことになるからです。それでは、神々を作る者がいるとしましょう。わたしは、人間から神々を作る理由を調べることに戻ります。しかし、理由は一つも見当たりません。あの大いなる神が、神としての務めのために、仕えと助けを必要としたというのでなければです。11:4 第一に、その神がだれかの働きを必要とするのは、ふさわしくないことです。しかも、死んだ者の働きをです。死者の働きを必要とするはずだったのなら、むしろ初めから、だれか神を作っておくほうがふさわしかったはずです。しかし、わたしには、その働きの出番も見当たりません。11:5 実際、この世界という体の全体は、ピュタゴラスの言うように、生まれたのでも作られたのでもないとしましょう。あるいは、プラトンの言うように、生まれた、または作られたとしましょう。どちらにしても、それは、一度かぎりでこの組み立てのうちに配置され、整えられ、秩序づけられたものとして見いだされたのです。理性のあらゆる舵取りを備えてです。11:6 すべてを仕上げたものが、不完全であったはずはありません。何一つ、サトゥルヌスとサトゥルヌスの一族を待ってはいませんでした。次のことを確かだと思わないなら、人間は愚かでしょう。始めから、雨は天から降り注ぎ、星は光を放ち、光は輝き、雷鳴はとどろいていました。あなたがたがユピテルの手に持たせる雷を、ユピテル自身が恐れていました。また、リベルとケレスとミネルウァより前に、いや、あの最初の人間とやらより前に、あらゆる実りが大地からあふれ出ていました。人間を保ち支えるために備えられたものは、何一つ、人間の後から持ち込まれるはずがなかったからです。11:7 つまり、彼らは、生活に欠かせないそうしたものを見いだしたと言われているのであって、設けたとは言われていません。見いだされるものは、すでにあったものです。すでにあったものは、見いだした者のものとはみなされず、設けた者のものとみなされます。見いだされる前から、あったからです。11:8 それに、もしリベルが、ぶどうの木を示したから神だというのなら、ルクルスはひどい扱いを受けたものです。ルクルスは、初めてさくらんぼをポントスからイタリアに広めました。示した者である彼が、そのために新しい果実の作り手として神に祀られはしなかったからです。11:9 ですから、万物は初めから整えられて成り立っていたのです。自分の務めを果たすための確かな理によって、配分されていたのです。そうであれば、この点では、人間を神性へ選び入れる理由はなくなります。あなたがたがその神々に割り振った持ち場と権能は、初めからあったからです。あなたがたがその神々を作り出さなかったとしても、あったはずです。11:10 しかし、あなたがたは別の理由に向きを変え、神性を授けたのは功績に報いるためだった、と答えます。そうであれば、思うに、あなたがたは、神々を作るあの神が正義にすぐれていることを認めるわけです。これほどの褒美を、軽はずみにも、ふさわしくない者にも、むやみにも分け与えはしなかったはずの神です。11:11 そこで、わたしは、その功績を数え上げてみたいと思います。それが、彼らを天に引き上げるようなものだったのか、むしろ、タルタロスの底に沈めたのではないかを確かめるのです。タルタロスを、あなたがたは、気が向いたときには、地下の刑罰の牢獄だと断言しています。11:12 実際、そこへ押し込められる

のが常なのは、親に不孝な者、姉妹と近親姦を犯す者、人妻と姦淫する者です。乙女をさらう者、少年を汚す者もそうです。また、荒れ狂う者、人を殺す者、盗む者、欺く者、そして、あなたがたのだれかの神に似た者はみなそうです。あなたがたは、自分の神々のだれ一人についても、罪や悪徳から潔白だと証明することはできないでしょう。その神が人間であったことを否むのでなければです。11:13 しかし、彼らが人間であったことを、あなたがたが否めないように、こうした汚点まで加わっています。この汚点は、彼らが後になって神々にされたと信じることさえ許しません。実際、あなたがたは、そうした者たちを罰するために、裁きの座についています。あなたがたのうち正しい人はみな、悪い者や恥ずべき者との取引も、語らいも、交わりも退けます。ところが、あの神は、そうした者たちと同じような者を、自分の威厳を分け合う仲間に迎え入れました。あなたがたは、ある者たちの仲間を拝んでいるのです。それなら、なぜ、その者たちを罪に定めるのでしょうか。11:14 天では、あなたがたの正義がはずかしめられているのです。それなら、最も罪深い者を一人残らず神々にするがよいでしょう。そうすれば、あなたがたの神々に気に入られます。自分たちと同等の者が神として祀られることは、神々にとって誉れなのです。しかし、この不当さを論じ直すのはやめておきましょう。彼らが正しく、潔白で、善い者たちであったとしましょう。11:15 それでも、あなたがたは、どれほど多くの、もっとすぐれた人々を、冥府に残してきたことでしょうか。知恵ではソクラテスのような人、正義ではアリステイデス、戦いではテミストクレス、偉大さではアレクサンドロスです。幸運ではポリュクラテス、富ではクロイソス、雄弁ではデモステネスです。11:16 あなたがたのあの神々のうち、だれが、カトーよりも重みがあって賢いでしょうか。だれが、スキピオよりも正しく、戦いに長けているでしょうか。だれが、ポンペイウスよりも偉大で、スッラよりも幸運で、クラッススよりも富み、トゥッリウス（キケロ）よりも雄弁でしょうか。あの神は、もっとすぐれた者たちを前もって知っていたはずです。それなら、この人々を神々として迎えるのを待つほうが、どれほどふさわしかったでしょうか。11:17 思うに、あの神は急いでしまい、天をきっぱりと閉ざしてしまったのです。そして今、もっとすぐれた人々が冥府でぶつぶつ不平を言うので、きっと赤面しているのです。

12〜14章　神々を侮っているのはだれか

12:1 この話はもうやめます。神々が何であるかを示せば、何でないかも、真理そのものから証明することになると知っているからです。そこで、あなたがたの神々についていえば、わたしに見えるのは、昔のある死者たちの名だけです。わたしは作り話を聞き、その作り話から出た祭儀を見て取るだけです。また、像そのものについていえば、わたしがとがめるのは、ただ次のことです。その材料が、ありふれた器や道具の姉妹だということです。あるいは、同じ器や道具から出て、奉献によって、いわば運命を変えたものだということです。技の気まぐが、その姿を変えるのです。しかも、このうえなく侮辱的に、作る仕事そのものの中で神聖を汚しながらです。ですから、わたしたちは、ほかならぬその神々のために罰せられています。とりわけ、そのわたしたちにとって、本当に、刑罰の慰めとなりうることがあります。神々自身も、神々となるために、同じ目にあっているということです。12:2 あなたがたは、キリスト者を十字架や杭にかけます。しかし、どの像も、まず十字架と杭の上に粘土を重ねて、形づくられるのではありませんか。あなたがたの神の体は、まず十字の横木の上で奉献されるのです。あなたがたは、キリスト者の脇腹を鉤爪で削ります。12:3 しかし、あなたがたの神々には、体のどこにでも、もっと激しく、手斧と鉋とやすりが襲いかかります。わたしたちは首を差し出します。あなたがたの神々は、鉛と膠と釘で付けられる前は、頭がありません。12:4 わたしたちは獣のところへ追いやられます。確かに、あなたがたがリベルやキュベレやカエレスティスに添えている獣です。わたしたちは火で焼かれます。神々も、最初の地金のときから、そうされています。わたしたちは罪に定められて鉱山に送られます。あなたがたの神々は、そこから出てくるのです。12:5 わたしたちは島に流されます。あなたがたのだれかの神も、島で生まれたり死んだりするのが常です。もし、こうしたことによって何かの神性が成り立つのなら、罰せられる者たちが神として祀られていることになります。罰が神威と呼ばれるべきことになるでしょう。12:6 しかし、もちろん、あなたがたの神々は、作られるときのこうした非道や侮辱を感じません。仕えられることも感じないのと同じです。「なんと不敬な言葉だ。なんと神聖を汚すのしりだ」と、あなたがたは言うでしょう。歯ぎしりしなさい。泡を吹きなさい。セネカのような人が、あなたがたの迷信を論じ立てたことがありました。もっと多くの、もっと辛辣な言葉で論じたのです。そのときも、あなたがたは同じようにとがめたのでしたね[1]。12:7 ですから、わたしたちは、冷たい彫像や肖像を拝みません。それはもとの死者たちにそっくりで、鳶もネズミもクモも、正体を見抜いています。そうであれば、気づいた誤りを退けることは、罰よりもむしろ称賛に値するはずではありませんか。12:8 実際、まったく存在しないと確信している者たちを、わたしたちが害しているように見えることなど、ありうるでしょうか。存在しないものは、だれからも何も被りません。存在しないからです。

13:1 「しかし、われわれにとっては神々だ」と、あなたは言います。それなら、どうして、反対に、あなたがたこそが見破られるのでしょうか。自分の神々に対して不敬で、神聖を汚し、宗教心のない者だとです。あなたがたは、神々がいると決めてかかりながら、なおざりにしています。恐れながら、打ち壊しています。神々のために報復までしていながら、もてあそんでいるのです。13:2 わたしが嘘を言っているかどうか、確かめてください。まず、あなたがたは、人によって別々の神を拝みます。そのため、拝まない神々を、当然、怒らせています。一方をひいきにすることは、他方を侮辱しないでは進みません。選ぶことも、退けることなしにはありえないからです。13:3 ですから、あなたがたは、すでに、退ける神々を軽んじているのです。退けることで怒らせるのを恐れてもいません。実際、先に軽く触れたように、どの神の身分も、元老院の評価にかかっていました。一人の人間が意見を求められて望まず、望まないことで罪に定めた者は、神ではありませんでした。13:4 家の神々を、あなたがたはラレスと呼びま

す。その神々を、あなたがたは家の権限で扱います。質に入れ、売り払い、作り変えるのです。あるときはサトゥルヌスから小鍋を、あるときはミネルウァからひしゃくを作ります。それぞれの神が、長く拝まれるうちにすり減り、つぶれたのに応じてです。それぞれの家の主人が、家の必要のほうがもっと神聖だと思い知ったのに応じてです。13:5 公の神々も、同じように、公の権限で汚しています。あなたがたは、競売場で、それを税を生むものとして扱っているのです。こうして、カピトリウムも、青物市場も、同じように入札で求められます。同じ触れ役の声のもと、同じ競売の槍のもと、財務官の同じ記入のもとで、神性は引き渡され、請け負われるのです。13:6 しかし実際、土地は、地租を負わされると値打ちが下がります。人は、人頭税を課されると卑しくなります。これは囚われの汚点だからです。ところが、神々は、多く税を納めるほど神聖になります。いや、神聖であるほど、多く税を納めるのです。13:7 威厳が、もうけの種にされます。物乞いをする宗教が、居酒屋を回ります。あなたがたは、神殿の地所の代金と、聖なる場所に入る代金を取り立てます。神々をただで知ることは許されません。神々は売り物なのです。あなたがたは、神々を敬うために何をしているでしょうか。あなたがたの死者たちにもささげないようなことを、何か一つでもしているでしょうか。13:8 死者にも、同じように堂を、同じように祭壇を設けます。彫像には、同じ装いと、同じしるしがあります。死者が生前どんな年齢で、どんな技を持ち、どんな仕事をしていたか、そのとおりの神になるのです。ユピテルの饗宴と、葬式の会食とは、どこが違うでしょうか。13:9 献酒の柄杓と、死者に献酒する器とは、どこが違うでしょうか。腸卜師と、遺体を清める葬儀屋とは、どこが違うでしょうか。実際、腸卜師も、死んだものに仕えるのです。しかし、あなたがたが、亡くなった皇帝たちに神性の誉れをささげるのは、ふさわしいことです。生きているうちから、その誉れを皇帝たちに引き渡しているのですから。あなたがたの神々は、それをありがたく受け取るでしょう。いや、喜ぶでしょう。自分たちの主人が、自分たちと同等になるのですから。13:10 しかし、あなたがたは、公の娼婦ラレンティナを、ユノたち、ケレスたち、ディアナたちの中で拝みます。せめてライスかフリュネであればよいのですが。また、魔術師シモンを、彫像と『聖なる神』という碑文で神として奉献します。宮廷の小姓の学び舎から出た、だれだか知らない者を、神々の集いの神にします。そうしたとき、古い神々は、新しい者たちより高貴なわけではないにしても、あなたがたから受けた侮辱とみなすでしょう。古さが自分たちだけに授けたものが、ほかの者たちにも許されたからです。

14:1 わたしは、あなたがたの儀式も調べてみたいのです。供え物をささげるときに、あなたがたがどんな人々であるかは言いません。あなたがたは、弱って死にかけたもの、やせ衰えたもの、皮膚病にかかったものを、どれでも屠ります。肥えて傷のないものからは、余計なところを何でも切り取ります。頭や蹄で、家でも奴隷や犬にあてがったはずのものです。ヘルクレスにささげる十分の一からは、その三分の一さえ祭壇に載せません。むしろ、その賢さをほめることにしましょう。失ったものから、何かを救い出しているのですから。しかし、あなたがたの文学に向かうと、なんと多くの笑いぐさを見いだすことでしょう！　あなたがたは、それによって、思慮と、自由人にふさわしい務めへと教え育てられているのにです。14:2 神々は、トロイア人とアカイア人のために、剣闘士の組のように互いに組み合って、戦い抜いたというのです。ウェヌスは、人間の矢で傷を負いました。息子のアエネアスが、矢を射たその人間、ディオメデスに殺されかけたので、連れ去ろうとしたからです。マルスは、十三か月も縛られて、もう少しで衰え果てるところでした。ユピテルは、ほかの天の神々から同じ乱暴を受けないように、ある怪物の働きで救い出されました。そして、あるときはサルペドンの死を嘆いて泣き、あるときは、見苦しくも姉妹に欲情して迫ります。それほど愛してもいなかった昔の情婦たちの名を挙げながらです。14:3 それからというもの、詩人のだれが、自分たちの頭（ホメロス）の権威に倣って、神々を辱める者とならなかったでしょうか。ある詩人は、アポロを、家畜を飼わせるためにアドメトス王に引き渡します。別の詩人は、ネプトゥヌスの築く仕事を、ラオメドンに貸し出します。抒情詩人の中にも、あの人、つまりピンダロスがいます。アエスクラピウスが強欲の報いに雷で裁かれた、と歌った人です。害をなすやり方で医術を行っていたからだというのです。14:4 もし雷がユピテルのものなら、悪いユピテルです。孫に対して情けがなく、腕のよい者をねたんだのです。このうえなく信心深い人々のもとでは、こうしたことは、まことでも明かすべきでなく、

偽りなら作り上げるべきでもないはずです。悲劇作家も喜劇作家も、容赦しません。神々が、ある家の災いや迷いの元とならない劇はないのです。14:5 哲学者たちのことは言わずにおきます。ソクラテスだけで十分です。ソクラテスは、神々を侮辱して、樫と牡山羊と犬にかけて誓うのが常でした。「しかし、だからこそ、ソクラテスは罪に定められたのだ。神々を打ち壊していたからだ」と、人は言うでしょう。確かに、昔から、つまりいつも、真理は憎まれています。14:6 それでも、アテナイ人は、判決を悔いて、のちにソクラテスの告発者たちをも打ち倒し、その金の像を神殿に据えました。そのとき、罪に定めたことが取り消されて、それがソクラテスへの証しとなったのです。また、ディオゲネスも、何やらヘルクレスを茶化しています。そして、ローマのキュニコス派ウァロは、三百のユピテルを、頭なしで登場させています。ユピテルたちと呼ぶべきでしょうか。

訳注

1 別の読みでは『とがめなかった』『よしとした』。

15〜17章　見世物にされる神々と、わたしたちの拝む神

15:1 ほかの浮かれた才知も、神々を辱めることで、あなたがたの楽しみに仕えています。レントゥルスやホスティリウスのような作者たちの洒落た出し物を、よく見分けてください。冗談やからかいの仕掛けの中で、あなたがたが笑っているのは、役者たちでしょうか。それとも、あなたがたの神々でしょうか。姦淫するアヌビス、男にされたルナ（月の女神）、鞭打たれたディアナです。死んだユピテルの遺言状の読み上げ、笑いものにされた飢えた三人のヘルクレスです。15:2 そればかりか、役者たちの台本も、神々のあらゆる醜さを書き記しています。太陽神ソルは、天から投げ落とされた息子を嘆きます。それを、あなたがたは喜んでいます。キュベレは、つれない羊飼いを恋い慕ってため息をつきます。それでも、あなたがたは赤面しません。あなたがたは、ユピテルの罪状が歌われるのを平気で聞いています。ユノとウェヌスとミネルウァが、羊飼いに裁かれるのもです。15:3 あなたがたの神の仮面が、恥ずべき、悪名高い頭を覆っています。汚れた体、女のようにふるまって、その技のために育てられた体が、ミネルウァなりヘルクレスなりを演じています。まさにそのことで、威厳が損なわれ、神性が辱められているのではありませんか。しかも、あなたがたがほめそやすなかでです。15:4 確かに、闘技場の観客席では、あなたがたはもっと信心深くなります。そこでは、人間の血の上で、刑罰の汚れの上で、あなたがたの神々が同じように踊ります。罪人たちに筋書きと物語を提供しながらです。もっとも、罪人たちが、あなたがたの神々そのものの姿をまとうことも、しばしばあります。15:5 わたしたちは、いつか、去勢されたアッティスを見ました。ペッシヌスから来た、あの神です。また、生きたまま焼かれていた男は、ヘルクレスを演じていました。わたしたちは、昼の見世物の残酷な戯れの中で、メルクリウスが焼きごてで死者を確かめるのを笑いもしました。ユピテルの兄弟が、槌を持って剣闘士たちの死骸を運び出すのも見ました。15:6 こうしたことを一つ一つ、さらに調べ上げることなど、だれにできるでしょうか。それらが神性の誉れを乱し、威厳の跡を汚して消すのなら、それはもちろん侮りから出ています。そうしたことを繰り返し演じる者たちの侮りからも、それを演じてもらう人々の侮りからもです。15:7 しかし、それらはただの見世物だとしておきましょう。ところが、わたしが次のことを付け加えたらどうでしょうか。だれの良心も、劣らず思い当たることです。神殿で姦淫が取り決められ、祭壇のあいだで女の取り持ちが行われます。たいていは、神殿番や祭司たちの小部屋そのもので、情欲が果たされます。同じ聖なる髪紐と祭司の帽子と紫の衣をつけたまま、香が燃えるなかでです。そうであれば、あなたがたの神々が苦情を言う相手は、キリスト者よりも、あなたがたのほうなのではないでしょうか。15:8 確かに、神聖を汚す者は、いつもあなたがたの仲間の中から捕まります。キリスト者は、昼間でさえ神殿を知らないからです。もしキリスト者も神殿を拝んでいたら、おそらく、キリスト者も神殿を荒らすでしょう。それなら、こうしたものを拝まない者たちは、何を拝んでいるのでしょうか。15:9 もう分かりきったことです。偽りを拝む者でない人々は、真理を拝む者です。また、自分が誤っていたと認めて誤るのをやめた事柄では、もう誤ることはありません。まずこのことをつかんでください。そして、ここから、わたしたちの秘儀の筋道を残らずくみ取ってください。ただし、その前に、偽りの憶測を打ち返しておきます。

16:1 実際また、ある人々と同じように、あなたがたは、ろばの頭がわたしたちの神だと夢想しました。そのような神についてのこの疑いを持ち込んだのは、コルネリウス・タキトゥスです。実際、タキトゥスは、その歴史書の第五巻で、ユダヤ戦争を民族の起こりから説き起こしています。そして、その起こりについても、民族の名と宗教についても、思うままに論じています。タキトゥスの伝えるところでは、ユダヤ人はエジプトから解き放たれました。あるいは、タキトゥスが思ったところでは、追放されました。そして、アラビアの荒野の、水のきわめて乏しい所で、渇きに苦しんでいました。そのとき、野ろばたちが、たまたま草

を食べたあと水を飲みに行くと見えたので、それを泉の道案内にしました。その恩返しに、同じような獣の姿を神として祀ったというのです。16:2わたしの思うに、こうして、そこから次のことが決めてかかられたのです。わたしたちも、ユダヤ人の宗教に近い者として、同じ像の手ほどきを受けている、ということです。しかし実際、そのコルネリウス・タキトゥス、だれよりも多くの嘘をしゃべるあの人が、同じ歴史書でこう伝えています。グナエウス・ポンペイウスは、エルサレムを攻め取りました。そこで、ユダヤ人の宗教の奥義を見ようとして、神殿に入りました。ところが、そこに像を一つも見つけなかったというのです。16:3もちろん、何かの像で表されるものが拝まれていたのなら、その聖所でこそ、どこよりもはっきり示されるでしょう。そこでは部外者の立会人を恐れることもなかったのですから、なおさらです。むなしい礼拝ではありましたが。16:4祭司たちだけが入ることを許されていたからです。ほかの者たちの目も、張られた幕で遮られていました。ところが、あなたがたは否まないでしょう。あらゆる荷役の獣を、また去勢した馬をまるごと、その獣たちのエポナとともに、あなたがた自身が拝んでいることをです。16:5わたしたちが責められるのは、もしかすると、このことかもしれません。あらゆる家畜や獣を拝む人々の中で、わたしたちはろばだけを拝む者だということです。また、わたしたちを十字架を敬う者だと思う人も、わたしたちと同じ礼拝の仲間になるでしょう。何かの木をなだめて拝むときには、姿はどうでもよいのです。材料の性質が同じであればです。形もどうでもよいのです。それが神の体そのものであればです。16:6それにしても、アッティカのパラスや、ファロスのケレスが、十字架の幹とどれほど違うでしょうか。どちらも、像の形もなく、粗い杭、形のない木として人前に立っているのです。まっすぐに立てて打ち込まれる材木は、どれも十字架の一部です。16:7わたしたちのほうは、仮に十字架を拝むとしても、まるごとの十字架を、欠けたところのない神として拝んでいることになります。あなたがたの神々のもとは、塑像師たちが十字架の上に粘土を重ねて作るのだと、先に述べました。また、あなたがたは、ウィクトリア（勝利の女神）たちをも拝んでいます。しかも、戦勝記念碑では、十字架が記念碑の内側の骨組みです。16:8ローマ人の陣営の宗教は、まるごと、軍旗をあがめ、軍旗にかけて誓い、軍旗をあらゆる神々の上に置きます。軍旗に付いた、像を載せるあの台は、どれも十字架の首飾りです。旗やカンタブラ（旗の一種）の、あの垂れ幕は、十字架の衣です。16:9その念の入れようはほめましょう。飾りのない裸の十字架を、神として祀りたくはなかったのですね。ほかの人々は、確かにもっと穏当に、もっと本当らしく、太陽がわたしたちの神だと信じています。仮にそうなら、わたしたちはペルシャ人の仲間に数えられるでしょう。もっとも、わたしたちは、亜麻布に描かれた太陽を拝むのではありません。太陽そのものを、どこでも、その円盤のうちに見ているのです。16:10つまり、その疑いは、わたしたちが東の方角に向かって祈ることが知られたところから来ています。しかし、あなたがたの多くも、ときには天のものを拝もうと気取って、日の出に向かって唇を震わせています。同じように、わたしたちが太陽の日（日曜日）を喜びに当てるとしても、それは太陽の崇拝とはまるで別の理由からです。そうしても、わたしたちは、サトゥルヌスの日（土曜日）を休みと食事に当てる人々の次に並ぶだけです。その人々も、知りもしないユダヤ人の習わしから外れているのです。16:11しかし、この町では、つい最近、わたしたちの神の新しい版が公にされました。ある男が絵を掲げてからです。獣をかわす芸で雇われた、罪人同然の男です。絵には次のような書き込みがありました。『キリスト者の神、ろばの祭司』1。16:12その者は、ろばの耳をもち、片方の足が蹄で、書物を持ち、トガを着ていました。わたしたちは、名も姿も笑いました。しかし、あの人々こそ、この二つの姿の神をすぐにでも拝むはずです。犬や獅子の頭と混じり合った神々、山羊や雄羊の角を生やした神々を受け入れてきたのですから。腰から下が牡山羊の神々、脚が蛇の神々、足の裏や背中に翼のある神々もです。16:13これは、余分に述べたことです。どんな風評も、やましいところがあるかのように、打ち返さないまま素通りしないためです。いよいよわたしたちの宗教の証明に向かうにあたって、これらをすべて払い清めました。

17:1わたしたちが拝むものは、唯一の神です。この神は、この巨大な全体を、元素や物体や霊のあらゆる備えとともに、無から形づくられました。命じられたその言葉によって、整えられたその理によって、おできになったその力によってです。それは、ご自分の威厳の飾りとするためでした。そこから、ギリシア人も、世界に「コスモス（飾り）」という名を当てたのです。17:2神は、見られる

ことがあっても、見えない方です。恵みによって表されることがあっても、つかむことのできない方です。人の感覚で量られることがあっても、量り知れない方です。だからこそ、まことの神であり、これほど大きな方なのです。一方、ふつうに見られ、つかまれ、量られることのできるものがあります。そうしたものは、それをとらえる目よりも、それを汚す手よりも、それを見いだす感覚よりも小さいのです。しかし、限りのないものは、ただ自分自身にだけ知られています。17:3 このありさまこそが、量られることを受けつけないままで、神を神と量らせるのです。こうして、その大きさの力が、神を、人々に知られた方としても、知られない方としても突きつけます。そして、これが、知らずにはいられない方を認めようとしない人々の、罪の極みなのです。17:4 わたしたちが、このことを神ご自身のみわざから証明してほしいのですか。わたしたちを包み、支え、楽しませ、恐れさせもする、これほど多くの、これほどのみわざからです。それとも、魂そのものの証しから証明してほしいのですか。魂は、体の牢獄に押し込められています。悪い教えに取り巻かれ、情欲や欲望に力を奪われ、偽りの神々の奴隷にされています。それでも、魂は、酔いから、眠りから、何かの病からさめるように我に返り、本来の健やかさを味わうとき、神の名を呼びます。この名だけを呼ぶのです。本来まことであるのは、この唯一の方だからです。17:5 「神は善く、偉大だ」「神が与えてくださるとおりに」というのが、すべての人の声です。魂は、その方を裁き手としても呼び求めます。「神が見ている」「神にゆだねる」「神がわたしに報いてくださる」と言うのです。ああ、生まれながらにキリスト者である魂の証しよ！ 17:6 現に、魂は、こう言いながら、カピトリウムではなく天を仰ぎます。生ける神の座を、その方から知っており、そこから下ってきたからです。

訳注

1 写本の崩れた語の推定。『ろばから生まれた者』と読む説もある。

18〜20章　神の書と、その古さと確かさ

18:1 しかし、神は、書き記されたものという備えも加えてくださいました。わたしたちが、神ご自身にも、そのご計画とみこころにも、もっと豊かに、もっと深く近づけるためです。だれでも望むなら、神について調べ、調べて見いだし、見いだして信じ、信じて仕えることができるのです。18:2 実際、神は、初めから世に人々を遣わされました。義の潔白のゆえに、神を知り、神を示すのにふさわしい人々で、神の霊にあふれていました。それは、次のことを告げ知らせるためでした。神はただひとりであり、万物を造り、人を土から形づくられた方であること。実際、この方こそ、まことのプロメテウスです。時の定まった配置と終わりとによって、世を整えられた方です。それから、雨によって、火によって、裁くご自分の威厳の、どのようなしるしを示されたか。人がご自分の好意を得るために、どのような戒めを定められたか。その戒めが知られずにいたり、捨てられたり、守られたりするとき、どのような報いを用意されたか。すなわち、この方は、この時代が満ちたときに裁きを行われます。ご自分を拝む者たちは、永遠のいのちの報いに入れられます。不敬な者たちは、同じく終わりのない、絶えることのない火に入れられます。そのとき、初めから死んだすべての人が、よみがえらされ、形を新たにされ、数え上げられます。どちらの報いに値するかを、清算するためです。18:3 わたしたちも、かつては、こうしたことを笑っていました。わたしたちも、あなたがたの中から出た者です。キリスト者は、生まれるのではなく、なるのです。先ほど、告げ知らせる者たちと言いました。彼らは、予告する務めから、預言者と呼ばれます。彼らの声も、神性を信じさせるために行った力あるわざも、書物の宝庫に残っています。その書物も、隠されてはいません。18:4 プトレマイオス家の中で最も学識が深く、あらゆる文献に最も鋭い目を持っていたのは、フィラデルフォスとあだ名される王です。この王は、図書館を作る熱心さで、ペイシストラトスに張り合っていたと思います。古さや何かの珍しさのおかげで評判の高い記録は、ほかにもありました。それらと並んで、王はユダヤ人にも書物を求めたのです。当時の文法学者の中で最も認められていた、ファレロンのデメトリオスの勧めによってでした。王は、この人に図書館の監督を任せていました。求めたのは、ユダヤ人に固有の、自国の言葉の書物で、彼らだけが持っていたものです。18:5 預言者たちは、いつもユダヤ人の中から出て、ユダヤ人に向かって語ってきたからです。つまり、父祖たちへの恵みによって神の家の民となった民族に向かってです。昔のヘブル人が、いまのユダヤ人です。ですから、その文字もヘブルの文字で、言葉もヘブル語でした。18:6 しかし、その中身が知られないままにならないように、このこともユダヤ人からプトレマイオスに認められました。七十二人の翻訳者が与えられたのです。哲学者のメネデモスも、この人たちを敬いました。摂理を擁護したこの人は、彼らと考えが同じだったからです。18:7 アリステアスも、このことをあなたがたに断言しています。こうして、ギリシア語に移されて読めるようになった記録が残されたのです。今日でも、セラピスの神殿では、プトレマイオスの蔵書が、ヘブル語の書そのものとともに公開されています。それだけでなく、ユダヤ人も公に読んでいます。18:8 それは、税を払って得た自由です。その書には、安息日ごとに、だれでも近づけます。聞く人は、神を見いだすでしょう。さらに理解しようと努める人は、信じないではいられなくなるでしょう。

19:1 これらの書物の第一の権威は、この上ない古さにあります。あなたがたのもとでも、古い時代を根拠に信用を言い立てることは、宗教にも等しいことです。[1]書物に権威を与えるのは、この上ない古さです。実際、最初の預言者はモーセです。モーセは、過去のことから書き起こしました。世界の創造、人類の増え広がり、やがてその時代の不義を罰した洪水の力です。そして、預言によって自分の時代までを語り、さらに自分の事績によって、未来のことの姿を示しました。時の順序もモーセのもとで初めから整えられていて、世の年数の計算を与えています。19:2 モーセは、あなたがたのもとで最も古いあのダナオスが、アル

ゴスに渡ってきたときより、およそ三百年前の人だと分かります。トロイア戦争よりは千年ほど前で、そこから、サトゥルヌス自身よりも前ということになります。19:3 実際、タッロスの歴史書は、アッスリヤ人の戦いを伝え、ティタンたちの王サトゥルヌスがユピテルと戦ったことを伝えています。それによれば、その戦いは、トロイアの滅びより三百二十二年前であったことが示されます。19:4 このモーセを通して、ユダヤ人に固有のあの律法も、神から送られました。その後も、ほかの預言者たちが多くのことを語りました。彼らも、あなたがたの文書より古いのです。実際、最後に預言を歌った人でさえ、知恵の書き手たちと比べて、少し先んじているか、少なくとも同じ時代の人です。立法者たちと比べてもそうです。19:5 実際、ゼカリヤは、クロスとダリヨスの治世にいました。そのころ、自然学者たちの頭であるタレスは、クロイソスに尋ねられて、神性について確かなことを何も答えませんでした。つまり、預言者たちの声に、心を乱されていたのです。ソロンも、同じ王に、長い生涯の終わりを見るように告げました。預言者たちと同じようにです。19:6 ですから、あなたがたの法も学問も、律法と神の教えから生まれたことが見て取れます。先にあるものこそ、種であるはずです。だから、あなたがたは、わたしたちと同じもの、あるいはわたしたちに近いものを、いくらか持っているのです。19:7 知恵（ソフィア）からは、それを愛することが、フィロソフィア（哲学）と呼ばれるようになりました。預言からは、それをまねる熱心が、詩の予言を切り取ってきました。名誉を求める人々は、何かを見つけると、自分のものにするために、それを改ざんしました。実が種から劣ってしまうことも、起こったのです。19:8 神の書の古さについて、わたしはまだ多くの仕方で論じ続けるところです。もし神の書に、もっと大きな権威が備わっていなかったなら、です。それは、信じさせるための権威で、年代の記録からというより、その真理の力から来るものです。実際、神の書の証しを、何がもっと力強く後押しするでしょうか。世界全体で毎日、予告が一つずつ果たされていくことのほかにはありません。王国の移り変わりも、町々の災いも、民族の滅びも、時代のありさまも、すべて符合しています。何千年も前に予告されていたとおりにです。19:9 そこから、あなたがたが笑うわたしたちの望みも生き生きとし、あなたがたが思い上がりと呼ぶわたしたちの確信も強められます。実際、過ぎたことを確かめることは、来るべきことへの確信を整えるのにふさわしいのです。19:10 声は同じように両方の部分を告げ、文字も同じように書き記しました。神の書のもとでは、時は一つです。わたしたちのもとでは、分かれているように見えるのですが。こうして、残っていて、まだ証明されていないすべてのことも、わたしたちにとっては証明されています。証明されたことと一緒に、当時はどちらも未来のこととして予告されていたからです。19:11 わたしの知るかぎり、あなたがたにもシビュラがいます。真の神の真の預言者を指すこの呼び名が、預言するように見えたほかの者たちにまで、あちこちで使われてきたからです。あなたがたのシビュラたちは、真理から名を借りて偽ったのです。あなたがたの神々と同じようにです。」ですから、さしあたり、ただ一人の預言者の文箱だけでも、何世紀も古さでまさります。まさる相手は、あなたがたの古い書き物のどれをとっても、その中身と題材のすべて、起源、順序、源です。多くの民族や、歴史に名高く記録の古い町々にも、文字の形そのもの、つまり事柄を指し示し、守り伝えるものにもまさります。それどころか、まだ控えめに言っていると思いますが、あなたがたの神々そのもの、神殿そのもの、託宣と祭儀にもまさるのです。その文箱には、ユダヤ人の秘儀全体の宝が納められているように見えます。そこから、いまはわたしたちの秘儀の宝もです。19:12 さしあたり、モーセという人のことを聞いたことがあるなら、その人は、アルゴスのイナコスと同じ時代の人です。ダナオスよりも、四百年近く先んじています。正確には、七年足りません。ダナオスも、あなたがたのもとで最も古い人です。モーセは、プリアモスの滅亡より千年ほど前の人です。ホメロスにも、さらに五百年以上先んじると言ってもよいでしょう。そう言うのに、従うべき先人がいるからです。19:13 ほかの預言者たちは、モーセより後の人々です。それでも、その最後の人でさえ、あなたがたの最初の賢者、立法者、歴史家よりも前にさかのぼるのではないでしょうか。これがどのような順序で証明できるかを述べるのは、わたしたちにとって、難しいというより、途方もない大仕事です。困難ではありませんが、いまは長くなります。19:14 多くの資料の前に座り込み、指を折って数えなければなりません。最も古い民族の文書庫も開かなければなりません。エジプト人、カルデヤ人、ピニケ人のものです。その知識を伝えてくれた人々の同郷の者たちも、呼ば

なければなりません。たとえば、エジプト人マネト、カルデヤ人ベロッソス、さらにピニケ人でツロの王であったヒラムです。また、彼らに続いた人々もです。メンデスのプトレマイオス、エペソのメナンドロス、ファレロンのデメトリオス、ユバ王、アピオン、タッロスです。そのほか、だれかこの人たちを裏づけたり論駁したりする人がいれば、その人もです。そして、ユダヤの古い歴史を、その地の者として擁護したユダヤ人ヨセフスもです。ギリシア人の、諸民族の起源を伝える書き手たちも、照らし合わせなければなりません。何がいつ行われたか、また時の連なりが明らかになって、年代記の数が光を放つためです。世界の歴史と文献の中を、旅して回らなければならないのです。19:15それでも、わたしたちは、証明のいわば一部を、もう持ち込みました。何によって証明できるかを、ちりばめて示したからです。しかし、先に延ばすほうがよいでしょう。急いで論じ尽くせなくなったり、論じ尽くそうとして長くさまよい出たりしないためです。

20:1この先延ばしの代わりに、わたしたちは、もっと大きなものを差し出します。聖書の威厳です。たとえ、古さによって神の書だと証明しないとしても、古さが疑われるとしてもです。このことは、遅れて学ぶことでも、よそから学ぶことでもありません。教えてくれるものが、目の前にあります。世界と、時代と、その成り行きです。20:2起こっていることはすべて、予告されていました。目に見えることはすべて、前もって耳に聞かされていました。地が町々を飲み込むこと、海が島々を奪うこと、戦争が外も内も引き裂くこと、王国が王国とぶつかり合うことです。飢饉や疫病や、その土地ごとの災い、たび重なる死が、多くの地方を荒らすことです。低い者が高められ、高い者が低くされることです。義がまれになり、不法がはびこり、あらゆる良い教えへの心遣いが鈍ることです。季節の務めと元素の働きが道を外れること、怪物や異変によって自然の姿が乱されることです。これらはすべて、先を見通して書き記されていました。20:3わたしたちが苦しむあいだに、それは読まれています。わたしたちが確かめるあいだに、それは証明されています。思うに、予言が真実であることは、神性のふさわしい証しです。ですから、わたしたちのもとでは、未来のことへの信頼も確かなのです。つまり、未来のことも、すでに証明されているのです。毎日証明されていることと一緒に、予告されていたからです。20:4同じ声が響き、同じ文字が書き記し、同じ霊が打ち鳴らします。未来を予告する予言にとって、時は一つです。人間のもとでは、ひょっとすると、時が分けられます。予告が果たされていくあいだ、つまり、未来のものが現在に、そして現在のものが過去に数えられていくあいだのことです。20:5お尋ねしますが、わたしたちが未来のことまで信じるからといって、何の罪を犯しているのでしょうか。わたしたちは、すでに二つの段階を経て、予言を信じることを学んだのです。

訳注

1 括弧の中は、失われた一つの写本にだけ伝わる文。

21章　キリストについて

21:1 しかし、わたしたちは、この一派がユダヤ人のきわめて古い書物に支えられていると述べました。ところが、多くの人は、この一派がかなり新しく、ティベリウスの時代のものだと知っています。わたしたちも、そう公言しています。ですから、ひょっとすると、そのことを理由に、一派の立場が問い直されるかもしれません。最も名高い宗教、少なくとも許された宗教の陰に隠れて、自分の勝手な思い込みを何か隠しているかのように見られるのです。あるいは、こういう理由からかもしれません。わたしたちは、年代が違うだけではありません。食物を除く定めでも、祭りの日々でも、体のしるし（割礼）そのものでも、ユダヤ人と同じことをしていません。名を共にすることもありません。同じ神に仕える身であるなら、当然そうしなければならないはずではないか、というのです。21:2 また、民衆もすでに、キリストを人間の一人として知っています。ユダヤ人が判断したような人間としてです。そのため、わたしたちを人間を拝む者だと考える人が出てくるのも、たやすいことでしょう。しかし、わたしたちは、キリストを恥じてはいません。その名のもとに数えられ、罪に定められることを喜んでいるのですから。また、神についても、違った考えを抱いてはいません。21:3 ですから、神としてのキリストについて、少し述べなければなりません。かつて、ユダヤ人には、神のもとで恵みがありました。そこには、際立った義と、始祖たちの信仰があったのです。そこから、彼らのもとで、民族の大きさも、王国の高さも栄えました。その幸いはたいへんなもので、彼らは神の声によって教えられていました。その声によって、どうすれば神の好意を得られ、神に背かずにいられるかを、前もって戒められるほどでした。21:4 しかし、彼らはどれほど罪を犯したことでしょう。父祖たちを頼みに思い上がって道を外れ、教えから離れて、汚れたありさまへと流れていったのです。たとえ本人たちが認めないとしても、今日の彼らの末路が、それを証明するでしょう。彼らは散らされてさまよい、自分たちの土地からも空からも追われて、世界を流れ歩いています。治める人もなく、王である神もいません。よそ者の権利によってさえ、祖国の地に足跡ひとつ印して挨拶することも、彼らには許されないのです。21:5 聖なる声は、彼らにこうした警告をしていました。それと同時に、すべての声が、いつも同じように告げていました。世の終わりの時期に、神は、すべての民族と民と場所から、ご自分を拝む者たちを選び出される。その人々ははるかに忠実で、神は恵みを彼らに移される。しかも、より豊かな教えを受け入れることができるので、いっそう満ちた恵みを移される、ということです。21:6 そこで、来られたのです。その恵みを新しくし、照らすために、神によって、来ると予告されていた方、あの神の子キリストです。この恵みと教えを取り仕切る方、その教師、人類を照らし導く方として、神の子が告げられていました。ただし、子という名や父の種を恥じなければならないような生まれ方をされたのではありません。21:7 神の子は、姉妹との近親姦からお生まれになったのでも、娘や他人の妻との淫らな交わりからお生まれになったのでもありません。うろこや角や羽をまとった神を、父とされたのでもありません。ダナエの黄金に姿を変えた恋する者を、父とされたのでもありません。21:8 そうしたユピテルを父としたのは、あなたがたの神々です。それに対して、神の子には、淫らな行いによって母となった方はいません。母と見える方でさえ、結婚していなかったのです。しかし、まずその実体を詳しく述べましょう。そうすれば、その生まれのありさまも分かるでしょう。21:9 神がこの世界全体を、言葉と理と力によって造られたことは、すでに述べました。あなたがたの賢者たちのもとでも、ロゴス、つまり言葉と理が、万物の作り手と見なされていることは明らかです。21:10 実際、ゼノンは、これを、すべてを整然と配置して形づくった作り手と定めます。そして、それは運命とも、神とも、ユピテルの心とも、万物の必然とも呼ばれる、としています。クレアンテスは、これらを霊にまとめ、その霊が万物に行き渡っている、と断言しています。21:11 わたしたちもまた、言葉と理と力に、固有の実体として霊を書き添えます。神がそれらによって

すべてを造られたことは、すでに述べました。その霊が語られるときには、その内に言葉が宿り、配置されるときには理が伴い、仕上げられるときには力が統べるのです。21:12 わたしたちは、この方が神から発せられ、発せられることによって生まれたと学びました。そのため、実体が一つであることから、神の子、また神と呼ばれるのです。神も霊だからです。光線が太陽から伸びるとき、それは全体からの一部です。しかし、光線の中にも太陽があることになります。光線は太陽の光線であり、実体は切り離されるのではなく、広げられるからです。21:13 こうして、霊から霊が、神から神が出るのです。光から光がともされるようにです。そこから同じ性質の分け火をいくつ取っても、元の火は損なわれず、欠けることなく残ります。同じように、神から出たものも神であり、神の子です。そして、二者は一つです。21:14 こうして、霊からの霊、神からの神は、在り方において、もう一つの数を成されました[1]。状態においてではなく、順位においてです。そして、元のものから離れたのではなく、そこから出て来られたのです。そこで、神のこの光線は、以前からいつも告げ知らされていたとおり、ある乙女の中に降られました。その胎の中で肉として形づくられ、神と混ざり合った人としてお生まれになるのです。21:15 肉は霊に備えられて、養われ、成長し、語りかけ、教え、働かれます。そして、それがキリストなのです。さしあたり、この作り話を受け入れてください。あなたがたの作り話に似ていますから。そのあいだに、わたしたちは二つのことを示します。キリストがどのように証明されるか。また、あなたがたのもとで、同じような作り話を前もって用意したのはだれか、ということです。その作り話は、こうした真理に敵対し、それを打ち壊すためのものでした。21:16 ユダヤ人も、キリストが来られることを知っていました。つまり、預言者たちが語りかけていた相手は、彼らだったのです。実際、今でも彼らはキリストの来臨を待っています。わたしたちと彼らとのあいだで最も激しくぶつかり合うのは、キリストがすでに来られたことを、彼らが信じないという点です。21:17 実際、キリストの来臨は、二つ示されていました。一つ目は、人間のありさまの低さのうちに、すでに果たされたものです。二つ目は、神性があらわにされた高さのうちに、世を終わらせるために迫っているものです。彼らは一つ目を悟らなかったので、もっとはっきり告げ知らされている二つ目だけを待ち望み、来臨は一つだと考えたのです。21:18 実際、彼らが最初の来臨を悟らなかったのは、彼らの罪が招いたことでした。悟っていれば、信じていたはずでした。信じていれば、救いを得ていたはずでした。彼ら自身、自分たちが知恵と悟りを、目と耳の実りを奪われると書かれているのを読んでいます。21:19 こうして、彼らはキリストを、その低さから、ただの人間だと決めてかかっていました。そのため、その力を見て、魔術師だと考えることになったのです。キリストは、言葉ひとつでダイモンを人々から追い出し、盲人の目を再び開き、らい病人を清め、中風の者を立たせられました。ついには、死人をも言葉ひとつでいのちに戻されました。元素そのものさえ従わせ、嵐を静め、海の上を歩かれました。こうして、ご自分が神の言葉、つまり、あのロゴスであることを示されたのです。初めからあり、最初に生まれ、力と理を伴い、霊に支えられた方です。言葉によってすべてを造っておられ、また造られた、その同じ方です。21:20 その教えによって、ユダヤ人の教師たちや指導者たちは論駁されました。そのため、彼らはひどくいら立ちました。とりわけ、大勢の群衆がキリストのほうへなびいたからです。ついに、キリストはポンテオ・ピラトに訴え出られました。ピラトは当時、ローマの側からシリアを治めていた人です。彼らは、叫び立てる声の力ずくで、イエスを十字架につけるために自分たちに引き渡させたのです。21:21 キリストご自身も、彼らがそうすることを予告しておられました。以前に預言者たちも予告していたのでなければ、それだけでは小さなことでしょう。それでも、キリストは十字架につけられて、その死に固有のしるしを数多く示されました。実際、刑吏の務めに先んじて、ひと言とともに、自ら霊を手放されたのです。21:22 同じその時、太陽が軌道の真ん中を指していたのに、昼の光が取り去られました。このこともキリストについて告げ知らされていたと知らなかった人々は、もちろん日食だと思いました。それでも、あなたがたは、その世界の異変を、あなたがたの秘められた記録の中に記されたものとして持っています。21:23 そのとき、キリストは十字架から降ろされ、墓に納められました。ユダヤ人は、兵士の大きな手勢まで使って、念入りな見張りでその墓を取り囲みました。キリストは、三日目に死からよみがえると予告しておられました。そこで、弟子たちが遺体を盗み出し、疑っている者たちを欺くことのないようにしたのです。21:24 ところが、どうでしょう。

三日目に、突然地が揺れ動き、墓をふさいでいた大石が転がされ、見張りは恐れて散り散りになりました。弟子たちはひとりも姿を見せなかったのに、墓には、葬られた方の抜け殻のほかには、何も見つかりませんでした。21:25 それでも、指導者たちは、弟子たちが盗み去ったのだと言いふらしました。彼らにとっては、その悪事を言い広めることと、自分たちに貢ぎを納めて仕える民を信仰から呼び戻すことが、大事だったからです。実際、キリストは、民衆の前には姿を現されませんでした。不敬な者たちが思い違いから解き放たれないためです。また、少なからぬ報いを定められた信仰が、困難によって成り立つためでもありました。21:26 キリストは、ユダヤの地方ガリラヤで、何人かの弟子たちと四十日ほど過ごされ、彼らが教えるべきことを教えられました。それから、彼らを世界中に宣べ伝える務めに任じると、雲に包まれて天に迎え入れられました。それは、あなたがたのもとでプロクルスのような人々がロムルスについていつも言い張るのよりも、はるかに真実なことです。21:27 ピラトも、自分の良心においては、もうキリスト者でした。キリストについてのこれらすべてのことを、ピラトは当時のカイザル、ティベリウスに知らせました。それどころか、カイザルたちも、キリストを信じたでしょう。もしカイザルたちが世に必要でなかったなら、あるいは、キリスト者でありながらカイザルでいることができたならです。21:28 弟子たちも、世界中に散らばり、神である師の命令に従いました。彼らもまた、追い迫るユダヤ人から多くの苦しみを受けました。そしてついに、ローマで、ネロの残忍さによって、キリスト者の血を蒔いたのです。まさに真理への確信のゆえに、喜んでそうしたのです。21:29 しかし、キリストのふさわしい証人として、あなたがたが拝んでいるあの者たち自身を示しましょう。あなたがたがキリスト者を信じないのは、その者たちのせいです。その者たちを、わたしが引き合いに出して、あなたがたにキリスト者を信じさせるとしたら、たいしたことです。さしあたり、これがわたしたちの教えの筋道です。わたしたちは、一派と名の出どころを、その創始者とともに示しました。21:30 もうだれも、悪評を投げつけてはなりません。だれも、別のことを考えてはなりません。だれにとっても、自分の宗教について偽ることは許されないからです。実際、人が、自分が拝んでいるのとは別のものを拝んでいると言うなら、そのことによって、自分が拝んでいるものを否みます。拝むことと誉れを、別のものに移します。そして、移すことによって、もはや、否んだものを拝んではいないのです。21:31 わたしたちは言います。公に言います。あなたがたに拷問されて、引き裂かれ、血にまみれながら叫びます。「わたしたちは、キリストによって神を拝む」と。あの方を人間だと思うなら、そう思ってください。神は、その方によって、その方のうちに、ご自分が知られ、拝まれることを望んでおられるのです。21:32 ユダヤ人に答えるなら、彼らも、人間であるモーセによって主を拝むことを学びました。ギリシア人に応じるなら、手ほどきの儀式によって人々を縛ったのは、次の人たちです。オルフェウスはピエリアで、ムサイオスはアテナイで、メランプスはアルゴスで、トロフォニオスはボイオティアでそうしました。諸民族の支配者であるあなたがたにも目を向けるなら、ヌマ・ポンピリウスは人間でした。ローマ人に、ひどく手間のかかる迷信を負わせた人です。21:33 キリストにも、神性を考え出すことが許されたとしましょう。それはキリストご自身のものです。ただし、粗野で、まだ荒々しい人々を和らげるための神性ではありません。機嫌を取らなければならない多くの神々で茫然とさせ、人間らしさへと導くようなものではないのです。それはヌマのしたことです。そうではなく、すでに洗練され、その洗練そのものに欺かれている人々の目を開き、真理を知るに至らせるための神性です。21:34 ですから、このキリストの神性が真実かどうか、調べてください。それを知ることで人が善へと造り変えられる、そういう神性であるならば、偽りの神性は捨てられることになります。そのとき、何よりも、あの企みのすべてが見破られます。それは、死者たちの名と像の陰に潜み、ある種のしるしや奇跡や託宣によって、神性があるという信用を作り出しているのです。

訳注

1 古い版には『数ではなく在り方で別のものにした』と読むものがある。

22〜23章　ダイモンの働きと、その告白

22:1 そこで、わたしたちは言います。霊である実体が、いくつかあるのです。その名は新しいものではありません。哲学者たちはダイモンを知っています。ソクラテス自身も、ダイモンの意向を待っていました。当然でしょう。ソクラテスにも、子供のころからダイモンが付き添っていたと言われるのですから。もっとも、それは明らかに、善から思いとどまらせるダイモンでした。22:2 詩人たちも、みな知っています。無学な民衆さえ、ののしるときに、その名をしきりに口にします。実際、民衆は、この悪い種族のかしらであるサタンをも口にします。同じように、魂が自分で知っていることから、同じ呪いの声でそうするのです。22:3 天使についても、プラトンでさえ否みませんでした。どちらの名についても、それがいることの証人として、魔術師たちまでがいます。しかし、ある天使たちが自分から堕落し、そこから、さらに堕落したダイモンの種族が出てきました。この種族は、種族の祖たちとともに、また先に述べたそのかしらとともに、神によって罪に定められたのです。そのいきさつの順序は、聖なる書物によって知られます。22:4 さて、今は、彼らの働きについて説明すれば十分でしょう。彼らの働きとは、人間を覆すことです。こうして、霊の悪意は、初めから、人間の滅びを目指して始まりました。そのため、彼らは、体には病や、何かつらい災難をもたらします。魂には、力ずくで、突然の、尋常でない乱れをもたらします。22:5 人間の二つの実体に近づくために、彼らには、自分の細やかさと薄さが備わっています。霊の力には、多くのことができます。目に見えず、感覚でとらえられないまま、そのわざの中ではなく、結果の中に現れるのです。たとえば、大気の何か隠れた欠陥が、果実や穀物を、花のうちに落とし、芽のうちに枯らし、熟すころに傷めることがあります。また、何か見えない仕方で害された大気が、その疫病の息を注ぐことがあります。22:6 それで、ダイモンと天使の息吹は、同じように見えない感染によって、心にも腐敗を引き起こします。汚らわしい狂気や錯乱によって、あるいは残忍な情欲と、さまざまな迷いによってです。中でも最たるものは、とらえられ欺かれた人間の心に、あなたがたのこの神々を推し勧める迷いです。それは、自分のためにも、脂の煙と血という自分の餌を手に入れるためです。その餌は、像や肖像にささげられるのです。22:7 その息吹にとって、人間を偽りの目くらましで、まことの神性を思うことから背かせることほど、念入りな餌場があるでしょうか。その目くらましそのものを、どのように行うのかも、説き明かしましょう。霊は、みな翼を持っています。22:8 天使もダイモンもそうです。ですから、彼らは一瞬でどこにでもいます。世界全体が、彼らにとっては一つの場所です。どこで何が起きているかを、知るのも告げるのも、同じようにたやすいのです。その速さが神性だと信じられています。その実体が知られていないからです。22:9 こうして、彼らは、ときには、自分が告げることの作り手であるかのように見られたがります。実際、悪いことの作り手であることは、ときにはあります。しかし、善いことの作り手であることは、決してありません。また、神のご計画さえ、彼らはかすめ取ります。かつては預言者たちが語り聞かせているときに抜き取り、今は朗読が響いているときに摘み取るのです。22:10 こうして、そこからも、時の定めのいくつかを取って、予言を盗みながら、神性に張り合うのです。一方、託宣では、どちらにも取れる言葉を、どれほどの才覚で出来事に合わせて整えるのでしょうか。クロイソスのような人々も、ピュロスのような人々も、それを知っています。22:11 ところで、亀が家畜の肉と一緒に煮られていることを、ピュトの神（アポロ）は、先に述べたやり方で告げました。一瞬でリュディアに行っていたのです。彼らは、大気の中に住み、星々の近くにいて、雲と交わっているので、天の備えを知ることができます。そのため、もう感じ取っている雨を、約束までするのです。22:12 病の手当てについても、彼らは、まことに親切なものです。実際、まず害を与え、それから、奇跡と見えるように、新しい、あるいは逆の療法を指図します。その後で害するのをやめるので、治したと信じられるのです。それなら、霊の欺きのほかの才覚や、さ

らには力について、何を述べ立てましょうか。22:13 カストルの兄弟の幻や、ふるいで運ばれた水、帯で進められた船、触れられて赤くなったひげについてでしょうか。それらは、石が神々だと信じられ、まことの神が求められないようにするためのものでした。

23:1 さらに、魔術師たちも、幻を見せ、すでに死んだ人々の魂を辱めます。託宣の言葉を得るために、子供たちを殺します。大道芸人のような目くらましで、多くの不思議を戯れに演じます。夢を送り込みもします。天使とダイモンをきっぱりと招き入れ、その力を自分のそばに控えさせているからです。その天使とダイモンによって、山羊や卓まで、占いをするのが常になりました。魔術師たちがこうしたことをするのなら、なおさらではありませんか。その力が、自分の意志で、自分の仕事のために、他人の商売に役立てていることを、全力を挙げて行おうとするのはです。23:2 あるいは、天使とダイモンが、あなたがたの神々と同じことを行うのなら、神性の卓越はどこにあるのでしょうか。神性は、どんな力よりも上にあると、当然信じなければならないはずです。彼らは、神々だと信じられるもとになるのと同じわざを行っています。それなら、自分を神々にしているのは彼ら自身だ、と考えるほうがふさわしいのではないでしょうか。神々が天使やダイモンと同等だと考えるよりもです。23:3 きっと、場所の違いで区別されるのでしょう。そのため、あなたがたは、ほかの所では神々と呼ばない者を、神殿にいるから神々だと考えるのです。聖なる塔を飛び回る者と、隣近所の屋根を飛び越える者とでは、狂い方が違うように見えるのです。性器や腕を切る者と、自分の喉を切る者とでは、別の力が働いていると言われるのです。23:4 狂いの結末は同じで、そそのかしのやり方も一つです。しかし、言葉はここまでにします。ここからは、事柄そのものの証明です。それによって、どちらの名も同じ性質であることを示しましょう。ダイモンに動かされていることが確かな人を、だれか、まさにここ、あなたがたの法廷の前に引き出してください。23:5 どのキリスト者でもよいのです。キリスト者に語れと命じられると、その霊は、自分はダイモンだと、本当のこととして告白するでしょう。よそで偽って、自分は主だと言うのと同じようにです。同じように、神によって苦しむと思われている者のだれかを、連れて来てください。祭壇で息を吸い込み、脂の煙から神を宿す者、げっぷをして楽になる者、喘ぎながら前もって語る者です。23:6 雨を約束するおとめカエレスティスよ。薬を教えるアエスクラピウスよ。死にかけていたソコルディウスとテナティウスとアスクレピオドトスに、あと一日を与えてやるはずだった者たちよ[1]。ただし、自分はダイモンだと告白しないならばです。ところが、キリスト者に偽る勇気はありませんでした。その場で、あの最も厚かましいキリスト者の血を流してみなさい。23:7 この働きより明らかなものがあるでしょうか。この証明より確かなものがあるでしょうか。真理の素朴さが、皆の前に置かれています。真理には、それ自身の力が付き添っています。何も疑うことはできないでしょう。「魔術か、何かそういう欺きで起きているのだ」と、あなたがたは言うのでしょうか。23:8 あなたがたの目と耳が許すなら、そうは言わないでしょう。むき出しの誠実さで示されることに、何を言い返せるでしょうか。一方で、もし彼らが本当に神々なら、なぜ、自分はダイモンだと偽るのでしょうか。23:9 わたしたちに従うためでしょうか。それなら、あなたがたの神性は、もうキリスト者に服従しています。人間に服従している神性は、神性と見なすべきではありません。しかも、さらに恥になることには、自分に敵対する者たちに服従しているのです。23:10 他方で、もし彼らがダイモンか天使なら、なぜ、よそでは神々として振る舞っていると答えるのでしょうか。実際、神々とされている者たちは、もし本当に神々なら、自分をダイモンだとは言おうとしなかったでしょう。つまり、自分の威厳から自分を引きずり下ろさないためです。それと同じように、あなたがたがはっきりダイモンだと知っているこの者たちも、よそで神々として振る舞う勇気はないはずです。彼らがその名を使っている者たちが、そもそも何らかの神々であるならです。23:11 実際、彼らは、間違いなく上にあり、しかも恐れられるべき者たちのものである威厳を、悪用することを恐れるはずだからです。このように、あなたがたが抱いているその神性は、まったくありません。もしあるなら、ダイモンが告白の中でそれを装うことも、神々がそれを否むこともないはずだからです。23:12 このように、両方の側が、神々であることを否んで、一つの告白に行き着きます。それなら、認めてください。両者は一つの種族、つまりダイモンです。どちらの側でも、それが本当の種族なのです。さあ、神々を探してください。あなたがたが神々だと決めてかかっていた者たちは、ダイモンだと

分かったのですから。23:13 さらに、同じわたしたちのわざによって、あなたがたの同じ神々は明かします。自分たちは神々でなく、ほかにも神々はいないことをです。あなたがたは、それだけでなく、すぐにこのことも知るのです。だれが本当に神であるのか。わたしたちキリスト者が言い表している方がそれなのか。その方がただ一人の神なのか。キリスト者の信仰と教えが定めているとおりに、信じられ、拝まれるべき方なのか、ということです。23:14 その場で、彼らは告げるでしょう。「では、あのキリストとは、その作り話ともども、何者なのか」という問いについてです。キリストは、ありふれた身の上の人間なのか。魔術師なのか。死んだ後、弟子たちによって墓から盗み出されたのか。今はもう冥府におられるのか。23:15 それとも、むしろ天におられ、そこから来られるのか。全世界を揺り動かし、地を恐れおののかせ、すべての人を嘆かせて来られるのか。ただし、キリスト者は嘆きません。神の力、神の霊、言葉、知恵、理、神の子として来られるのか。23:16 あなたがたが何を笑うにしても、彼らも、あなたがたと一緒に笑ってみればよいのです。キリストが、あらゆる時代のすべての魂を、体を元に戻して裁かれることを、否んでみればよいのです。ひょっとすると、ミノスとラダマンテュスがこの務めをくじで得たのだ、と法廷の前で言ってみればよいのです。プラトンと詩人たちが口をそろえて言うとおりにです。せめて、自分の恥と、罪に定められたことの汚点を、はねつけてみればよいのです。23:17 彼らは、自分が汚れた霊であると明かしています。そのことは、彼らの餌からでも、分かってしかるべきでした。血と煙と、家畜を焼く悪臭の火という餌です。また、予言者たち自身のこの上なく汚れた舌からもです。それなら、自分たちが悪意のゆえに、前もって罪に定められていることを、否んでみればよいのです。自分を拝む者たちとも、自分の働きのすべてとも一緒に、同じ裁きの日に定められていることをです。23:18 しかし、彼らに対するわたしたちのこの支配と力は、すべて、キリストの名を呼ぶことによって効き目を持ちます。また、ある事柄を思い起こさせることによってです。審判者であるキリストを通して、神から自分たちに迫ってくると、彼らが待ち受けている事柄です。23:19 彼らは、神のうちにキリストを、キリストのうちに神を恐れて、神とキリストのしもべたちに服従するのです。こうして、わたしたちが触れ、息を吹きかけると、彼らは、あの火を思い描かされ、目の前に突きつけられて、打ちのめされます。そして、わたしたちの命令によって、体からも出ていきます。いやいやながら、苦しみながら、あなたがたの前で恥じ入りながらです。23:20 彼らが自分について本当のことを言うときには、彼らを信じてください。あなたがたは、嘘をつく彼らを信じているのですから。自分の恥になるように嘘をつく者はいません。むしろ、誉れになるように嘘をつくのです。自分に不利なことを告白する者のほうが、自分のために否む者よりも、いっそう確かに信じられます。23:21 結局、あなたがたの神々のこうした証言が、人をキリスト者にするのが常です。わたしたちは、彼らをできるかぎり信じることで、主キリストを信じるのです。彼ら自身が、わたしたちの書物への信頼をかき立てます。彼ら自身が、わたしたちの望みの確信を築き上げるのです。23:22 わたしの知るかぎり、あなたがたは、キリスト者の血によってまで彼らを拝んでいます。ですから、もし、あなたがたに真理を証明しようとするキリスト者の前で、彼らに偽ることが許されるなら、どうでしょう。彼らは、これほど実入りがよく、これほど尽くしてくれるあなたがたを、失いたくはないはずです。それどころか、いつかキリスト者となったあなたがた自身によって、追い払われないようにするはずです。

訳注

1 この節は写本の読みが乱れていて、読み方が定まらない。

24〜26章　宗教の自由と、ローマの支配

24:1 彼らは、自分たちが神々であることを否みます。また、わたしたちが身をゆだねている唯一の神のほかに、神はいないと言い切ります。そうした彼らの告白は、すべて、宗教を害したという罪を退けるのに、十分に足ります。それも、とりわけローマの宗教を害したという罪です。24:2 実際、神々が確かにいないなら、宗教も確かにありません。神々も確かにいないために宗教がないのなら、わたしたちも、宗教を害した罪人では確かにありません。24:3 かえって逆に、その非難はあなたがたに跳ね返りました。あなたがたは偽りを拝み、まことの神のまことの宗教をないがしろにするばかりか、さらに攻め立てています。そうして、まことの方に対して、本当の不信心という罪を犯しているのです。24:4 さて、かりに彼らが神々であることが確かだとしましょう。それでも、あなたがたは、世の共通の考えから、だれか一人の、もっと高く、もっと力のある者がいると認めるのではありませんか。完全な力と威厳を持つ、世界の皇帝のような者です。実際、多くの人は、神性をこのように配します。最高の支配の権は一人の手にあり、その務めは多くの者の手にあると考えるのです。プラトンも、大いなるユピテルが天で、神々とダイモンの軍勢に付き従われている姿を描いています。24:5 ですから、代官も、監督官も、長官も、同じように仰がれるべきだ、と彼らは考えるのです。それでも、カイザルの好意をいっそう得ようとして、働きと望みを（その下の者たちに）移す者がいたら、どうでしょう。皇帝の呼び名と同じように、神の呼び名をも、だれか一人の最高の者のものとして告白しない者です。その者は、どれほどの悪事を犯すことでしょうか。カイザルのほかの者を（皇帝と）呼ぶことも、そう呼ぶのを聞くことも、死罪とされるのにです。24:6 ある人は神を拝み、ある人はユピテルを拝めばよいのです。ある人は天に向かって、ある人はフィデス（信義の女神）の祭壇に向かって、嘆願の手を差し伸べればよいのです。また、あなたがたがそう思うのなら、ある人は祈りながら雲を数え、ある人は天井の格間を数えればよいのです。ある人は自分の魂を自分の神にささげ、ある人は山羊の魂をささげればよいのです。24:7 実際、見てください。これもまた、不信心の罪状に当たるのではないでしょうか。宗教の自由を奪い、神を選ぶことを禁じることです。わたしが拝みたい相手を拝むことは許されず、拝みたくない相手を拝むように強いられるのです。24:8 いやいや拝まれることを望む者はいません。人間でさえ、そうです。だからこそ、エジプト人にさえ、これほどむなしい迷信をふるう権限が許されています。鳥や獣を神として祀り、そうした神のどれかを殺した者を、死罪に定める権限です。24:9 また、属州にも町にも、それぞれに自分の神がいます。シリアにはアスタルテ、アラビアにはドゥサレス、ノリクム人にはベレヌスがいます。アフリカにはカエレスティス、マウレタニアには自分たちの小王たちがいます。わたしが挙げたのは、ローマの属州だと思います。しかし、その神々はローマの神々ではありません。ローマでは拝まれていないからです。イタリアそのものの中で、町ごとの奉献によって神々に数えられている者たちが、ローマで拝まれていないのと同じです。カシヌムの人々にはデルウェンティヌス、ナルニアの人々にはウィシディアヌス、アスクルムの人々にはアンカリアがいます。ウォルシニイの人々にはノルティア、オクリクルムの人々にはウァレンティア、ストリウムの人々にはホスティアがいます。ファリスキ人の神は父クリスで、その誉れのために、ユノさえ添え名を受けました。24:10 ところが、わたしたちだけは、宗教を自分のものとして持つことから締め出されます。ローマ人の神を拝まないわたしたちは、ローマ人を害しているとされ、ローマ人とも見なされません。幸いにも、神はすべての人の神です。望もうと望むまいと、わたしたちはみな、その方のものなのです。24:11 それなのに、あなたがたのもとでは、何を拝むことも許されています。ただ、まことの神は別です。まるで、わたしたちをみなご自分のものとしておられるこの方こそが、すべての人の神ではないかのようにです。

25:1 わたしは、偽りの神性とまことの神性について、もう十分に証明したと思います。証明がどのように成り立つかを示したからです。議論や論証によってだけでなく、あなたがたが神々だと信じている者たち自身の証言によってもです。ですから、この件について、もう何も論じ直す必要はありません。25:2 しかし、ローマ人という名のことが、ちょうど話に出てきました。そこで、ある決めつけが挑んでくる対決を、見過ごさないでおきます。その決めつけを口にする人々は言います。ローマ人は、このうえなく念入りな信心深さの功績によって、世界を手に入れるほどの高みに上げられたのだ、と。また、神々は確かにいるので、ほかの者にまさって神々に務めを果たす者たちが、ほかの者にまさって栄えるのだ、と。25:3 なるほど、この報酬は、ローマの神々が、恩に報いて支払ったものなのでしょう。ステルクルスとムトゥヌスとラレンティナが、支配を押し広げたというわけです。実際、よそから来た神々が、自分の民よりもよその民をひいきしようとしたとは、わたしには思えません。自分たちが生まれ、育ち、名を上げ、葬られた父祖の地を、海の向こうの者たちに与えたとも思えません。25:4 キュベレについては、勝手にさせておきましょう。キュベレは、トロイア人の種族の記念として、ローマの都を愛したのかもしれません。つまり、アカイア人の武器から守られた、自分の郷里の者の記念としてです。あるいは、報復する者たちのもとへ移ることを、見越したのかもしれません。プリュギアを征服したギリシアを、やがて打ち従えると知っていた者たちです。25:5 ですから、キュベレは、都にもたらされた自分の威厳の大きなしるしを、わたしたちの時代にも示しました。マルクス・アウレリウスが、三月十七日に、シルミウムで国から取り去られたときのことです。三月二十四日、ガッリの長であるあのいとも聖なる者は、腕まで去勢するかのように切り裂いて、汚れた血をささげていました。その日に彼は、すでに世を去っていた皇帝マルクスの無事のために、いつものとおりに命令を出したのです。25:6 ああ、のろまな使者たち。ああ、眠たげな公文書。そのせいで、キュベレは皇帝の死を前もって知りませんでした。キリスト者がこんな女神を笑わずにすむように、というわけです。しかし、ユピテルも、自分のクレタがローマの束桿で揺さぶられるのを、すぐに許しはしないでしょう。あのイダの洞穴も、コリュバンテスの青銅のシンバルも、忘れてしまうはずがありません。そこで味わった、乳母のこのうえなく快いにおいもです。25:7 ユピテルは、自分のあの墓を、カピトリウム全体よりも重んじたはずではありませんか。むしろ、ユピテルの灰を覆ったあの地が、世界にまさるようにです。ユノは、サモスを後にしてまで愛したカルタゴの町が、アエネアスの子孫たちの種族によって滅ぼされることを、望むでしょうか。25:8 わたしの知るかぎり、『ここに女神の武具があり、ここに戦車があった』のです。そして、『運命がもし許すなら、ここが諸国を治める王国となるよう、女神はすでにそのころから努め、いつくしんでいた』のです。ユピテルの妻であり姉妹である、あの哀れな女神は、運命に逆らっては何の力もありませんでした！25:9 まさしく、ユピテル自身も運命に従っています。それでも、ローマ人が運命にささげた誉れは、このうえなく身を売った雌狼ラレンティナにささげた誉れほどではありませんでした。その運命は、ユノの定めと願いに逆らって、カルタゴをローマ人に引き渡してくれたのにです。あなたがたの神々の多くが王であったことは、確かです。25:10 それなら、もし神々が支配を授ける力を持っているのなら、自分たちが王であったとき、だれからその恵みを受けたのでしょうか。サトゥルヌスとユピテルは、だれを拝んでいたのでしょうか。どこかのステルクルスだろうと思います。「しかし、後にローマ人は、自分たちの土地の神々とともに、王でなかった者たちまで拝んだではないか」と、人は言うでしょう[1]。25:11 それでも、その神々は、まだ自分たちを拝んでいなかったほかの者たちに、治められていました。まだ神々と見なされていなかったからです。ですから、国を与えるのは、ほかの者たちのすることです。この神々が像に刻まれるずっと前から、国は治められていたからです。25:12 しかし、ローマという名の高みを、信心深さの功績に帰するのは、なんとむなしいことでしょう。宗教が進んだのは、支配を得た後、あるいは、まだ王国であったとしても、国を得た後のことだからです。さあ、それでは、宗教が国の役に立ったとでもいうのでしょうか。実際、迷信じみた細かさは、ヌマによって考え出されはしました。それでも、ローマ人のもとでは、神事はまだ、像によっても神殿によっても成り立っていなかったのです。25:13 宗教は質素で、作法は貧しく、天に届こうと競うカピトリウムもありませんでした。あったのは、芝土で急ごしらえした祭壇と、まだサモス焼きの土の器と、そこから立つ煙です。神その

ものの姿は、どこにもありませんでした。25:14 そのころにはまだ、ギリシア人やエトルリア人の才が、像を作ることで都をあふれさせてはいなかったからです。ですから、ローマ人は、大きくなる前に信心深かったのではありません。したがって、信心深かったから大きくなったのでもないのです。25:15 しかし、宗教のゆえに大きくなったなどと、どうして言えるでしょうか。彼らの大きさは、不信心から生まれたのです。実際、わたしの思い違いでなければ、どんな王国も支配も、戦争によって得られ、勝利によって広げられます。さらに、戦争と勝利は、たいてい、町々を攻め取り、滅ぼすことで成り立っています。25:16 そのしわざは、神々を害さずにはすみません。城壁も神殿も同じように打ち壊され、市民も祭司も等しく殺され、聖なる富も俗の富も変わりなく奪われます。ですから、ローマ人の神聖を汚す行いは、戦勝記念碑の数だけあります。民族に対する凱旋の数だけ、神々に対する凱旋があります。今も残る、捕虜にされた神々の像の数だけ、戦利品があるのです。25:17 つまり、神々は、自分の敵に拝まれることに甘んじ、その敵に終わりのない支配を定めてやっているのです。へつらいよりも、むしろ侵した害にこそ報いるべきだった相手なのにです。しかし、何も感じない者たちは、むだに拝まれるのと同じだけ、罰を下すこともなく害されるのです。25:18 確かに、信じるにふさわしいことではありません。前に述べたように、彼らは、宗教を害しながら大きくなり、大きくなりながら宗教を害しました。その彼らが、宗教の功績によって伸びたように見えるなどとはです。また、その国々がローマの支配の総額に溶かし込まれた者たちも、国を失ったとき、宗教を持っていなかったわけではありません。

26:1 ですから、見てください。国々を分け与えておられるのは、あの方ではないでしょうか。治められる世界も、治める人間そのものも、その方のものなのです。また、世の中で、時そのものに合わせて、支配の移り変わりを定められたのは、あの方ではないでしょうか。その方は、あらゆる時より前におられ、時の集まりである世を造られました。また、町々を高くし、低くされるのは、あの方ではないでしょうか。その方のもとで、人間の種族は、かつて町を持たずにいたのです。26:2 何を思い違いしているのでしょうか。森のローマは、自分の神々のいくつかよりも古いのです。カピトリウムのこれほど大きな構えを築き上げる前から、ローマは王国を持っていました。バビロン人も、神祇官より前に王国を持っていました。メデア人も十五人神官団より前に、エジプト人もサリイより前に、王国を持っていました。アッスリヤ人もルペルキより前に、アマゾンたちもウェスタの乙女たちより前にです。26:3 最後に、もしローマの宗教が国々を授けるのなら、ユダヤがかつて王国を持つことは、決してなかったでしょう。ユダヤは、こうしたありふれた神々をさげすんでいたからです。ローマ人よ、あなたがたは、しばらくのあいだ、ユダヤの神を犠牲で、神殿を贈り物で、民を盟約で敬いました。あなたがたがユダヤを支配することも、決してなかったはずです。もしユダヤが、神に対して、ついにはキリストに対して罪を犯さなかったならです。

訳注

1 この節は写本の読みが乱れていて、読み方が定まらない。

27〜31章　ダイモンのたくらみと、皇帝のための祈り

27:1 神性を害したという訴えに対しては、これだけ述べれば十分です。これで、わたしたちが、ないと示したものを害しているようには見えないでしょう。ですから、供え物をささげるよう呼び出されても、わたしたちは足を踏みとどめます。わたしたちの良心の確信のためです。その確信によって、わたしたちは確かに知っています。像をさらし物にし、人間の名を神として祀る中で、そうした務めがだれのもとに届くのかをです。27:2 しかし、ある人々は、それを狂気だと考えます。わたしたちは、その場では供え物をささげ、心の中では決心を保ったまま、傷つかずに立ち去ることもできます。それなのに、身の安全より強情を選ぶというのです。なるほど、あなたがたは、わたしたちがあなたがたを欺くための知恵を授けてくれるわけです。しかし、わたしたちは見抜いています。そうしたことがどこから吹き込まれるのかをです。だれがこのすべてを操っているのかをです。その者は、あるときは言いくるめる狡さで、あるときは荒れ狂う冷酷さで、わたしたちの堅さを崩そうと働きます。そのやり方も見抜いています。27:3 つまり、ダイモンと天使の作りをした、あの霊です。あの霊は、決別のために、わたしたちに敵対しています。わたしたちが受けた神の恵みのために、ねたんでもいます。そして、あなたがたの心を拠り所にして、わたしたちに戦いを挑みます。ひそかに吹き込んで、あなたがたの心の調子を合わせ、そそのかすのです。わたしが初めに述べた、裁きのゆがみと荒れ狂う不当の、あらゆる形へとです。27:4 実際、ダイモンとそのような霊の力は、すべてわたしたちに従わされています。それでも、彼らは、ろくでもない者のように、しかも奴隷のように、恐れに、ときには反抗を混ぜます。ほかのときには恐れている相手を、害したくてうずうずするのです。27:5 恐れもまた、憎しみを吐き出すからです。それに加えて、彼らは前もって罪に定められていて、その境遇には望みがありません。そこで、罰が先送りされているあいだに、さしあたり悪意を楽しむことを、慰めとみなすのです。それでも、取り押さえられると屈服し、自分の境遇の前に崩れ落ちます。遠くからは攻め立てる相手に、近くでは哀願するのです。27:6 ですから、彼らは、わたしたちに向かって飛び出してきます。反乱を起こす作業場の囚人や、牢獄や鉱山の囚人、そうした刑罰の奴隷のようにです。わたしたちの支配のもとにあるのにです。しかも、自分たちが劣っていること、それだけいっそう破滅に向かっていることを、確かに知っています。そのとき、わたしたちは、心ならずも、対等の者であるかのように立ち向かいます。彼らが攻めるところに踏みとどまって、押し返すのです。そして、信仰の強情のために罪に定められるときほど、彼らを凱旋して打ち負かすことはありません。

28:1 さて、自由な人間を、意に反して、供え物をささげるよう追い立てるのは、たやすく不当と見えるでしょう。ほかの場合でも、神事を行うには、喜んでする心が求められるからです。そうであれば、人がほかの人から神々を敬うよう強いられるのは、まったくばかげていると思われるでしょう。その神々は、自分のために、自分から進んでなだめるべきものなのにです。その人が、自由の権利によって、すぐにこう言い返せることにならないためにもです。「わたしはユピテルの好意など欲しくない。おまえはだれだ」28:2 「ヤヌスが怒って、好きなほうの顔でわたしに向かってくればよい。おまえに、わたしと何の関わりがあるのか」あなたがたは、確かに同じ霊たちに形づくられています。それで、わたしたちに、皇帝の安寧のために供え物をささげるよう強いるのです。あなたがたには強いる必要が、わたしたちには危険を冒す務めが、同じように課されているのです。28:3 こうして、第二の罪名に至りました。もっと尊い威光を害したという罪です。というのも、あなたがたは、大きな恐れと抜け目のない臆病さで、カイザルを敬っているからです。オリュンポスのユピテルその人よりもです。それも当然です。あなたがたがわきまえているのならです。28:4 実際、生きている者なら、だれであれ、死んだ者よりまさっているではありませんか。しかし、あなたがたがそうするのも、道理によるのではありません。たちどころに効く力を顧み

てのことです。それほど、この点でも、あなたがたは自分の神々に対して不信心だと見破られることになるでしょう。人間の支配に、より多くの恐れをささげているのですから。28:5 要するに、あなたがたのもとでは、すべての神々にかけて偽りの誓いをするほうが、たやすいのです。カイザルのゲニウス一つにかけるよりもです。

29:1 ですから、まず確かめてください。供え物をささげられている者たちが、皇帝たちや、だれであれ人間に、安寧を分け与えることができるのかどうかをです。そのうえで、わたしたちを大逆の罪に引き渡してください。もし、その実体が最悪の霊である天使やダイモンが、何かの恵みを施すならです。もし、滅びた者が人を守り、罪に定められた者が人を解き放つならです。そして、あなたがた自身が心で知っているとおり、死んだ者が生きている者を守るならです。29:2 実際、それなら、彼らは確かに、まず自分の立像や肖像や宮を守るはずです。ところが、わたしの見るところ、それらを無事に保っているのは、カイザルたちの兵士の見張りです。それに、その材料そのものも、カイザルたちの鉱山から来るのだと思います。神殿も、まるごと、カイザルのうなずき一つで建っているのです。29:3 現に、多くの神々が、カイザルの怒りを買いました。神々がカイザルの好意を受けることがあるのも、わたしたちの言い分に役立ちます。カイザルが神々に、何か恵みや特権を与えるときです。このように、神々はカイザルの力のもとにあり、すっかりカイザルのものです。その神々が、どうしてカイザルの安寧を自分の力のうちに持てるでしょうか。それを与えることができると見えるほどにです。神々自身のほうが、安寧をカイザルからたやすく得るのにです。29:4 だからこそ、わたしたちは、皇帝の威光に対して罪を犯していることになるのです。わたしたちが、皇帝たちを、彼ら自身の持ち物の下に置かないからです。皇帝たちの安寧のための務めを茶番にしないからです。わたしたちは、安寧が、鉛で継いだ手の中にあるとは考えないのです。29:5 しかし、不信心なのはあなたがたです。安寧がないところにそれを探し、与えることのできない者たちに求めるのですから。安寧を力のうちに持っておられる方は、素通りするのです。そのうえ、あなたがたは、安寧の求め方を知っている者たちを討ち滅ぼそうとしています。求め方を知っているので、それを得ることもできる者たちをです。

30:1 実際、わたしたちは、皇帝たちの安寧のために、永遠の神、まことの神、生ける神に呼びかけます。皇帝たち自身も、ほかの神々にまさって、この神の好意を望んでいます。彼らは、だれが自分たちに支配をお与えになったかを知っています。人間としては、だれが魂もお与えになったかを知っています。そして、感じ取っています。その方だけが神であり、自分たちは、その方おひとりの力のもとにあることをです。自分たちは、その方に次ぐ第二の者で、その方の後では第一の者だということをです。すべての神々より前に、すべての神々の上にいるのです。30:2 当然ではありませんか。皇帝たちは、すべての人間の上にいるのですから。人間は少なくとも生きていて、死んだ者たちにまさっています。皇帝たちは、自分の支配の力がどこまで及ぶかを考え直します。そうして神を悟ります。その方に対しては力を振るえないので、その方によって力を振るっているのだと分かるのです。30:3 それなら、皇帝は天を征服してみればよいのです。天を捕らえて、自分の凱旋の行列で引いて行けばよいのです。天に見張りを送り、天に税を課せばよいのです。それはできません。皇帝が偉大なのは、天より小さいからです。天も、すべての造られたものも、あの方のものであり、皇帝自身もその方のものだからです。30:4 皇帝が皇帝であるのは、皇帝となる前に人間であるのと同じところからです。権力も、霊と同じところから皇帝に来ます。わたしたちキリスト者は、そちらを仰ぎ見て祈ります。手を広げて祈るのは、その手に罪がないからです。頭をおおわずに祈るのは、恥じることがないからです。最後に、唱える言葉を耳打ちする者なしに祈るのは、胸の内から祈るからです。そうして、わたしたちは、いつも、すべての皇帝のために祈り求めています。30:5 皇帝たちのための、長い命、揺るがない支配、安全な家、強い軍隊、忠実な元老院、正しい民、静かな世界。およそ人間として、カイザルとして願うことのすべてです。これらを、わたしは、かなえてくださると知っている方にしか、祈り求めることができません。その方だけが与えてくださるからです。そして、わたしは、願いを聞き入れられて当然の者だからです。わたしはその方のしもべです。その方を敬うのは、わたしひとりです。その方の教えのために殺される者です。その方ご自身がお命じになった、肥えた、より大きないけにえを、わたしはその方にささげます。清い肉体から、潔白な魂から、聖い霊から出る祈りです。わず

か一アスの乳香の粒、つまりアラビアの木の涙ではありません。生のぶどう酒の二しずくでもありません。死を願うような、退けられるべき牛の血でもありません。そうしたあらゆる汚れの上に、さらに汚れた良心を添えたものでもありません。それで、わたしは驚きます。あなたがたのもとでは、いけにえが、この上なく悪徳にまみれた祭司たちに検められます。しかも、だれにとっても、ささげる者たち自身の胸の内より、犠牲の胸の内のほうが調べられるのです。30:6 ですから、このように手を広げて神に向かうわたしたちを、鉤爪がえぐればよいのです。十字架がつるし、火がなめ、剣が喉を断ち、獣が飛びかかればよいのです。祈るキリスト者の姿そのものが、どんな罰にも備えているのです。30:7 善良な長官たちよ、さあ、それをしてください。皇帝のために神に願い求める魂を、絞り取ってください。それが罪とされるのでしょう。神の真理と、神への献身があるところでです。

31:1 それなら、わたしたちは皇帝にへつらったのであり、口にした願いも偽りだったことになります。なるほど、力ずくの扱いを逃れるためにです。その偽りは、さぞ役に立つことでしょう。実際、あなたがたは、わたしたちが主張することを、何でも証明させてくれるのですから。そこで、わたしたちが皇帝たちの安寧を少しも気にかけていないと、あなたが思っているとします。それなら、神の声、わたしたちの書物を調べてください。わたしたち自身もそれを隠していませんし、多くの偶然が、外の人々の手に渡してもいます。31:2 あなたがたは、そこから知ってください。わたしたちには、あふれるほどの善意として、命じられていることがあります。敵のためにさえ神に祈り、迫害する者たちのために良いことを願い求めることです。わたしたちは、皇帝たちの威光のことで罪に訴えられています。その皇帝たちほど、キリスト者の敵であり、迫害する者である人がいるでしょうか。31:3 それどころか、名を挙げて、はっきりと、こう言っています。『王たちのため、支配者たちと権威ある者たちのために祈りなさい。あなたがたにとって、すべてが静かであるためである』（第一テモテ二・一〜二）。実際、国の支配が揺さぶられると、その体のほかの部分も揺さぶられます。そうなれば、わたしたちも、騒ぎとは無縁だと見られてはいても、確かに、どこかで災いの中にいることになるのです。

32〜35章　皇帝のための誓いと、皇帝を神と呼ばないこと

32:1 わたしたちには、皇帝たちのために祈る、もう一つの、もっと大きな必要があります。国の支配のあらゆる状態と、ローマの国事のためにもです。全世界に迫っている、この上なく大きな力があります。恐ろしい苦難で脅かす、世の結末そのものです。それが、ローマの支配という猶予によって遅らされていることを、わたしたちは知っているからです。32:2 ですから、わたしたちは、それを身をもって知りたくはありません。先に延ばされるよう祈るとき、わたしたちは、ローマが長く続くことを願っているのです。また、わたしたちは誓いもします。カイザルたちのゲニウスにかけてではありませんが、彼らの安寧にかけて誓うのです。その安寧は、どのゲニウスよりも尊いものです。32:3 ゲニウスがダイモンと呼ばれ、そこから縮めた言い方でダイモニアと呼ばれることを、あなたがたは知らないのでしょうか。わたしたちは、皇帝たちのうちにある神の定めを、仰ぎ見ます。神が、彼らを諸民族の上にお立てになったのです。わたしたちは知っています。彼らのうちには、神が望まれたものがあることをです。ですから、神が望まれたものが無事であることを、わたしたちは望みます。そして、それを大きな誓いとしているのです。32:4 それに対して、ダイモン、つまりゲニウスを、わたしたちは命じて退けるのが常です。人々から追い出すためです。彼らに神性の誉れを与えようとして、彼らにかけて誓うのではありません。

33:1 しかし、皇帝に対するキリスト者の敬虔と忠誠について、わたしはこれ以上何を言うことがあるでしょうか。わたしたちは、皇帝を仰がなければなりません。わたしたちの主がお選びになった人としてです。ですから、当然こう言えるでしょう。「カイザルは、むしろわたしたちのものだ。わたしたちの神がお立てになったのだから」33:2 ですから、わたしは、自分のものである皇帝のために、いっそう安寧を求めて働きます。安寧を与えることがおできになる方に、それを求めるからだけではありません。かなえていただくにふさわしい者として求めるからだけでもありません。カイザルの威光を神の下に抑えることで、かえって皇帝を神にゆだねるからでもあります。わたしは、その方おひとりの下に、皇帝を置くのです。33:3 下に置くのですから、等しく並べはしません。実際、わたしは皇帝を神とは呼びません。偽ることを知らないからです。皇帝をあざける勇気がないからでもあります。皇帝自身も、神と呼ばれるのを望まないだろうからでもあります。33:4 皇帝が人間であるなら、神に譲ることが、人間にとって大切です。皇帝と呼ばれることで満足すればよいのです。これも偉大な名です。神から授けられる名だからです。皇帝を神と呼ぶ者は、その人が皇帝であることを否んでいます。人間でなければ、皇帝ではありません。33:5 皇帝は、凱旋して、あのこの上なく高い車に乗っているときでさえ、自分が人間であることを思い起こさせられます。後ろから、こうささやかれるからです。「後ろを振り返れ！　自分が人間であることを覚えておけ！」そして皇帝は、確かに、それだけいっそう喜びます。自分の境遇を思い起こさせる言葉が必要なほどの、大きな栄光に輝いていることをです。33:6 もし、そのとき神と呼ばれるなら、皇帝はかえって小さくなるでしょう。そう呼ばれても、本当ではないからです。自分を神と思わないよう引き戻される者のほうが、偉大なのです。

34:1 この国の支配を形づくったアウグストゥスは、主と呼ばれることさえ望みませんでした。これも神の呼び名だからです。もちろん、わたしも皇帝を主と呼びはするでしょう。しかし、それは世間一般の習いとしてです。しかも、神の代わりとして主と呼ぶよう強いられないときにかぎります。34:2 ほかの点では、わたしは皇帝に対して自由な者です。わたしの主は、ただひとりだからです。全能で永遠の神です。皇帝自身の主でもある、同じ方です。祖国の父である人が、どうして主なのでしょうか。それに、権力の名より、慈しみの名のほうが好ましいのです。34:3 家の長たちでさえ、主人よりは、むしろ父と呼ばれます。まして、皇帝が神と呼ばれるべきだということからは、なおさら遠いのです。そんなことは信じられません。信じるなら、この上なく恥ずべきへつらいであるだけでな

く、破滅を招くへつらいにもなります。34:4それは、皇帝を持ちながら、ほかの者を皇帝と呼ぶようなものです。そうすれば、あなたは、持っていた皇帝の、この上なく大きく、なだめようのない怒りを招くのではないでしょうか。その怒りは、あなたが皇帝と呼んだ者にとっても恐ろしいものです。神が皇帝に恵み深くあられることを望むのなら、あなたは神に対して信心深くありなさい。34:5ほかの神を信じるのは、やめなさい。そうして、神を必要としているこの人を、神と呼ぶのもやめなさい。こうした人間を神と呼ぶへつらいが、嘘を恥じないのなら、せめて不吉を恐れるべきです。神として祀られる前にカイザルを神と呼ぶのは、呪いの言葉なのです。

35:1ですから、キリスト者は国家の敵だというわけです。皇帝たちに、むなしい誉れも、偽りの誉れも、無謀な誉れもささげないからです。まことの宗教に生きる人間として、皇帝たちの祝いの日さえも、浮かれ騒ぎではなく良心をもって祝うからです。35:2なるほど、さぞ大した務めなのでしょう。香箱と寝椅子を公の場に持ち出し、町内ごとに宴を開き、町を居酒屋の姿にして、もとの姿を消し去ることは。ぶどう酒で泥をこね、群れをなして駆け回り、乱暴へ、恥知らずなふるまいへ、情欲の誘惑へと向かうことは。35:3公の喜びは、このように公の恥によって表されるのでしょうか。ほかの日にふさわしくないことが、皇帝たちの祝いの日にはふさわしいのでしょうか。カイザルを顧みて規律を守る人々が、カイザルのためにそれを捨てるのでしょうか。悪い習いの放縦が忠誠となり、放蕩の機会が敬虔とみなされるのでしょうか。35:4ああ、わたしたちは、罪に定められて当然です。実際、なぜわたしたちは、カイザルたちのための誓願と喜びを、清く、しらふで、正しく果たすのでしょうか。なぜ、喜びの日に、戸口の柱を月桂樹で陰らせず、灯で昼の光を破らないのでしょうか。35:5公の祝いが求めるとあれば、あなたの家に、どこかの新しい娼家の装いをさせるのは、さぞ立派なことでしょう。それでも、わたしは、第二の威光へのこの敬虔においても、あなたがたの誠実と真実を示したいのです。この敬虔のことで、わたしたちキリスト者は、第二の、神聖を汚す行いの罪に訴えられています。カイザルたちの祝いを、あなたがたと一緒に祝わないからです。慎みも恥じらいも貞潔も、そのような祝い方を許しません。そう祝うよう勧めたのは、ふさわしい理由よりも、むしろ快楽の機会です。ひょっとすると、ここでも、キリスト者より悪いと見破られるのは、あの人々のほうではないでしょうか。わたしたちがローマ人と見なされるのを望まず、ローマの皇帝たちの敵であるかのように扱う人々です。35:6わたしは、クイリテス（ローマ市民）たちそのものを呼び出して問いただします。七つの丘の、あの口の悪い生え抜きの民衆そのものをです。あのローマの舌が、自分たちのカイザルのだれかを容赦するかどうかをです。ティベリス川が証人です。獣の学校も証人です。もし自然が、人の胸を、透けて見えるように、窓にはめる透き通った石のような材料で覆っていたとします。それなら、心の奥に、ある場面が刻み込まれて見えない人が、いるでしょうか。新しいカイザル、また新しいカイザルが、施しの分配を取りしきっている場面です。35:7人々が叫ぶ、あのときでさえ、そう見えるでしょう。「われらの年から、ユピテルがあなたに年を増し加えますように！」キリスト者は、こうした言葉を口にすることを知りません。新しいカイザルを願うことを知らないのと同じです。「しかし、それは群衆だ」と、あなたは言います。35:8群衆であっても、ローマ人です。しかも、群衆ほどキリスト者の引き渡しを求めて叫び立てる者はいません。もちろん、ほかの身分の人々は、その権威にふさわしく、誠実な心から敬虔なのでしょう。元老院そのものからも、騎士からも、陣営からも、宮殿そのものからも、敵意のあるものは何も吹いてこないのでしょう。35:9では、カッシウスやニゲルやアルビヌスのような人々は、どこから出たのでしょうか。二本の月桂樹のあいだでカイザルを包囲する者たちは、どこから出たのでしょうか。カイザルの喉を絞めるために、レスリングの技を使う者たちは、どこからでしょうか。武装して宮殿に押し入る者たちは、どこからでしょうか。あれほど多くのシゲリウスやパルテニウスのような人々の、だれよりも大胆な者たちです。35:10わたしの思い違いでなければ、ローマ人からです。つまり、キリスト者でない人々からです。しかも、あの者たちはみな、不忠が噴き出すその間際まで、皇帝の安寧のために祭儀を行っていました。皇帝のゲニウスにかけて誓ってもいたのです。外と内とで別の者になっていたのです。そして、もちろん、国家の敵という名を、キリスト者に与えていたのです。35:11それだけではありません。いま、罪深い党派の仲間や、それに加勢する者たちが、毎日のように明るみに出されています。反逆者たちのぶど

うの取り入れの後に残った、摘み残しです。その者たちは、どれほど新しく枝の茂った月桂樹で、戸口の柱を飾り立てたことでしょう。どれほど高く明るい灯で、玄関を曇らせたことでしょう。どれほど美しく豪華な寝椅子で、広場を分け合ったことでしょう。それは、公の喜びを祝うためではありませんでした。他人の祝いの中で、自分たちの願いを早くも稽古し、自分たちの望みのひな型と似姿を前もって祝い始めるためでした。心の中では、皇帝の名を取り替えていたのです。35:12 カイザルたちの命について、占星術師や腸卜師や鳥占い官や魔術師に相談する者たちも、同じ務めを果たしています。キリスト者は、こうした術を、自分自身のことのためにさえ用いません。離反した天使たちが明かしたもので、神が禁じておられるものだからです。35:13 しかし、カイザルの安寧を詮索する必要が、だれにあるでしょうか。安寧に逆らう何かをたくらむか願う者、あるいは安寧の後のことを望んで待ち受ける者のほかにです。実際、親しい人々について伺いを立てるのと、主人たちについて伺いを立てるのとでは、心が違うからです。血のつながりの気づかいと、隷属の気づかいとでは、詮索の向きが違うのです。

36〜38章　人類の敵ではなく、迷いの敵であること

36:1 これまで述べたとおりなら、ローマ人と呼ばれていた者たちが、敵であると見破られるわけです。それなら、なぜ、敵と見なされているわたしたちが、ローマ人であることを否まれるのでしょうか。わたしたちが、ローマ人でなく、しかも敵である、ということはありえません。ローマ人と見なされていた者たちの中から、敵が見つかるのですから。36:2 このように、皇帝たちにささげるべき忠誠と敬虔と誠実は、このような務めにあるのではありません。そうした務めは、敵意でさえ、むしろ自分を覆い隠すために果たすことができます。そうではなく、神性が命じておられるふるまいの中にあるのです。そのふるまいは、すべての人に対するのと同じく、まことに皇帝たちにも示されなければなりません。36:3 実際、わたしたちがこうした善い心の行いを負っているのは、皇帝たちに対してだけではありません。わたしたちは、どんな善い行いも、人を分け隔てして行うことはしません。自分自身のために行うからです。わたしたちは、称賛や報いの支払いを、人から得ようとはしません。分け隔てのない善意を求め、それに報いてくださる神から得ようとするのです。36:4 わたしたちは、皇帝たちに対しても、隣人たちに対するのと同じ者です。だれに対しても、悪を望むこと、悪を行うこと、悪を言うこと、悪を思うことを、等しく禁じられているからです。皇帝に対して許されないことは、だれに対しても許されません。だれに対しても許されないことは、おそらく、なおさら、皇帝その人に対しても許されません。神によって、これほど大きな者とされている人だからです。

37:1 前に述べたように、わたしたちが敵を愛するよう命じられているのなら、だれを憎むことがあるでしょうか。同じく、わたしたちは、害を受けても仕返しを禁じられています。行いで相手と同じにならないためです。それなら、だれを害することができるでしょうか。実際、このことについては、あなたがた自身が思い起こしてください。37:2 実際、あなたがたは、どれほどたびたびキリスト者に荒れ狂うでしょうか。あるときは自分の心に、あるときは法に従ってです。また、敵意を持つ民衆が、どれほどたびたび、石と火でわたしたちを襲うでしょうか。あなたがたを差し置いて、自分の権利であるかのようにです。民衆は、バックス祭の狂乱そのもので、死んだキリスト者さえ容赦しません。墓の安らぎから、いわば死の避難所から、キリスト者を引きずり出します。もう変わり果てた者を、もう体のそろっていない者を、切り刻み、ばらばらにするのです。37:3 わたしたちは、これほど固く結ばれ、死に至るまでこれほど奮い立った者たちです。それでも、あなたがたは、わたしたちが受けた不正の仕返しをしたと、いつかとがめたことがあるでしょうか。たったひと晩、わずかな松明があれば、たっぷり復讐できるのにです。悪を悪で清算することが、わたしたちのあいだで許されているならばです。37:4 しかし、神の一派が人間の火で仕返しをすることも、自分が試されて認められる苦しみを嘆くことも、あってはなりません。実際、わたしたちが、ひそかに仕返しをする者としてだけでなく、公然の敵としてふるまおうとするとします。そのとき、部隊の数と軍勢の力が、わたしたちに欠けるでしょうか。37:5 なるほど、マウリ人やマルコマンニ人、それにパルティア人そのもののほうが多いのでしょう。どれほど大きくても、一つの土地と自分たちの国境の中にいる民族のほうが、全世界に広がる民より多いのでしょう。わたしたちは、昨日現れたばかりの者です。それなのに、あなたがたのところをすべて満たしました。町も、島も、村も、自治市も、集会所も、陣営そのものも、区も、組合も、宮殿も、元老院も、広場もです。あなたがたに残したのは、神殿だけです。37:6 どんな戦いに、わたしたちが向かず、進んで臨まなかったでしょうか。軍勢では劣っていてもです。わたしたちは、これほど喜んで殺される者たちなのですから。ただし、この教えのもとで、殺すより殺されるほうが許されている、というのでなければの話です。武器を持たず、反乱も起こさず、ただ仲たがいするだけでも、わたしたちは、あなたがたと戦うことができました。離れ去ることだけが招く憎しみによってです。37:7 実際、これほど大勢の人間であるわたした

ちが、あなたがたから離れて、遠い世界のどこかの片隅へ去っていたとします。そうしたら、きっと、どのような者たちであれ、あれほど多くの市民を失ったことが、あなたがたの支配を恥じ入らせたでしょう。それどころか、見捨てられたことそのもので、あなたがたの支配を罰しもしたでしょう。37:8 間違いなく、あなたがたは、自分たちの孤独におびえたでしょう。物事の静まり返りと、世界が死んだかのような茫然とした有様におびえたでしょう。だれを支配すればよいのかと、探し回ったでしょう。あなたがたには、市民より多くの敵が残ったでしょう。いまは、キリスト者が大勢いるので、あなたがたの敵は少ないからです。あなたがたは、ほとんどすべての町で、ほとんどすべての市民をキリスト者として持っているのです。37:9 それなのに、あなたがたは、わたしたちを、人間の迷いの敵と呼ぶより、むしろ人類の敵と呼ぶほうを選びました。しかし、だれが、あの隠れた、いたるところで心と健康を荒らす敵どもから、あなたがたを奪い返すでしょうか。ダイモンの襲撃のことを言っているのです。わたしたちは、それを、報いもなく、代価もなく、あなたがたから追い払っています。37:10 わたしたちの復讐としては、それだけで十分だったでしょう。そのあと、空になった持ち物が、汚れた霊たちに開かれることです。しかし、あなたがたは、これほどの守りの見返りを考えもしません。あなたがたにとって迷惑でないどころか、なくてはならない種族を、敵と決めつけるほうを選びました。わたしたちが確かに敵だからです。ただし、人類の敵ではなく、むしろ迷いの敵なのです。

38:1 それなら、この一派は、いくらか穏やかに扱われて、許された結社の中に数えられるはずではありませんか。この一派は、許されない結社について恐れられるようなことを、何一つしないのです。実際、わたしの思い違いでなければ、結社を禁じる理由は、公の秩序への配慮にあります。町が党派に分かれないためです。党派に分かれれば、張り合う贔屓どうしのぶつかり合いで、たやすくかき乱されるからです。民会も、集会も、議会も、演説の集いも、見世物さえもです。人々が、自分の暴力の働きを、売り物の、雇われの仕事として、すでに稼ぎにし始めていたときには、なおさらです。38:2 しかし実際、わたしたちは、栄光や地位を求める熱がすっかり冷めているので、徒党を組む必要がありません。公のことほど、わたしたちに縁遠いものはありません。わたしたちが認める国は、ただ一つ、すべての人の国、つまり世界です。38:3 同じように、わたしたちは、あなたがたの見世物を捨てます。迷信から生まれたと知っているその起源を捨てるのと、同じだけ捨てるのです。見世物で扱われる事柄そのものとも、わたしたちは無縁だからです。わたしたちは、語ることでも、見ることでも、聞くことでも、何の関わりも持ちません。戦車競走場の狂乱とも、劇場の恥知らずとも、闘技場のむごさとも、運動場のむなしさともです。38:4 わたしたちが、ほかの楽しみを先に選び取るなら、それで、どうしてあなたがたを傷つけるのでしょうか。楽しむことを知ろうとしないとしても、それはわたしたちの損です。もし損だとすればですが、あなたがたの損ではありません。しかし、わたしたちが、あなたがたの好むものを退けるのは確かです。あなたがたも、わたしたちのものを楽しみはしません。38:5 しかし、エピクロス派には、快楽の何らかの真実、つまり心の平静を定めることが許されました。そして、キリスト者の快楽は、大きな務めなのです[1]。

訳注

1 この節は写本の読みが乱れていて、読み方が定まらない。

39章　キリスト者の集まりと愛の食事

39:1 では、いま、わたし自身が、キリスト者の結社の務めを明かしましょう。悪いことを退けたからには、善いことを示すためです。わたしたちは一つの体です。宗教をともに知り、教えが一つであり、望みの盟約で結ばれているからです。39:2 わたしたちは寄り合って、一つの集い、一つの集まりとなります。手勢を組んだかのように、祈りによって神を取り囲み、祈り求めるためです。この力ずくは、神に喜ばれます。わたしたちは、皇帝たちのためにも祈ります。その臣下や権威ある者たちのため、世の安定のため、物事の平穏のため、終わりが延ばされるように祈るのです。39:3 わたしたちは、神の書物を読んで思い起こすために寄り合います。今の時の様子が、何かを前もって警告すること、あるいは見直すことを求めるならばです。いずれにせよ、わたしたちは、聖なる声で信仰を養い、望みを奮い立たせ、確信を固めます。それに劣らず、掟を繰り返し教え込んで、掟の教えを固めます。そこではまた、勧めと戒めと、神の名による譴責も行われます。39:4 実際、裁きも、大きな重みをもって行われます。神が見ておられることを確かに知っている者たちのもとでのことだからです。ある人が、祈りと会合の交わり、あらゆる聖なるやり取りから退けられるほどの罪を犯したとします。それは、来るべき裁きの、この上ない前もっての判決なのです。39:5 上に立つのは、試されて認められた長老たちです。その誉れは、代価によってではなく、証しによって得たものです。神のものは、どれも代価で手に入るものではないからです。金庫のようなものがあるとしても、入会金で集められるのではありません。宗教を金で買い取ったかのような金ではないのです。39:6 各人は、月に一度の日に、あるいは望むときに、わずかな施しの金を置きます。ただし、望むなら、またできるならです。だれも強いられず、自分から進んで差し出すからです。これは、いわば慈しみの預け物です。39:7 実際、そこからは、宴にも酒盛りにも支払われません。むさぼり食う店に、心ならずも払われることもありません。貧しい人々を養い、葬るために使われます。財産も親もない少年や少女のため、もう家から出られない老人たちのため、また難船した人々のためにも使われます。鉱山にいる人や、島や牢獄にいる人がいれば、その人々のためにも使われます。ただし、神の一派のためという理由によってであればです。その人々は、自分の告白のゆえに、養われる者となるのです。39:8 しかし、このような愛の働きこそが、ある人々のもとで、わたしたちに汚点を焼き付けます。「見よ、あの者たちは、どれほど互いに愛し合っていることか」と、彼らは言います。彼ら自身は、互いに憎み合っているからです。「また、互いのために死ぬ覚悟ができていることか」とも言います。彼ら自身は、互いに殺し合う覚悟のほうが、できているだろうからです。39:9 また、わたしたちが互いを兄弟と呼ぶことにも、彼らは怒り狂います。わたしが思うに、ほかでもなく、彼らのもとでは、血縁の名がすべて、情愛の呼び名として、仮に使われているからです。しかし、わたしたちは、あなたがたの兄弟でもあります。ただ一人の母である自然の権利によってです。もっとも、あなたがたは悪い兄弟なので、人間とはとても言えません。39:10 しかし、兄弟と呼ばれ、兄弟と見なされるのは、次の者たちのほうが、どれほどふさわしいことでしょうか。ただ一人の父である神を認めた者たちです。聖さの、ただ一つの霊を飲んだ者たちです。同じ無知の一つの胎から、真理の一つの光へと、おののきながら出てきた者たちです。39:11 しかし、わたしたちが、正当な兄弟でないと思われているのは、ひょっとすると、こういうわけでしょうか。わたしたちの兄弟の間柄について叫び立てる悲劇がないからでしょうか。あるいは、わたしたちが家の財産によって兄弟となっているからでしょうか。あなたがたのもとでは、家の財産こそが、たいてい兄弟の間柄を断ち切るのです。39:12 ですから、心も魂も一つに交わっているわたしたちは、持ち物を分かち合うことをためらいません。わたしたちのもとでは、妻のほかは、すべてが分け隔てなく共有されています。ほかの人間が分かち合いを行う、ただ一つのところで、わたしたちは分かち合いをやめるのです。その人々は、友人の妻を自分のものにするだ

けでなく、自分の妻も、ごく辛抱強く友人に差し出します。思うに、先祖の、しかも最も賢い人々の、あの教えに従っているのでしょう。ギリシア人ソクラテスと、ローマ人カトーの教えです。彼らは、子供を得るために、しかもほかの所でも子供をもうけるために娶った妻を、友人たちと分かち合いました。妻たちが嫌がったのかどうかは、わたしにはまったく分かりません。39:13 実際、夫たちがこれほどたやすく譲り渡した貞潔を、妻たちが気にかけるはずがあったでしょうか。ああ、アッティカの知恵の、ローマの重々しさの手本よ。女衒です、哲学者も監察官も。それなら、わたしたちのこれほどの親愛が汚されても、何の不思議があるでしょうか。39:14 実際、あなたがたは、わたしたちのささやかな食事を、悪事のことで悪く言うばかりか、ぜいたくだとまでなじります。なるほど、ディオゲネスの言葉は、わたしたちについて言われたのでしょう。「メガラ人は、明日死ぬかのように買い込んで食べ、決して死なないかのように家を建てる」。39:15 しかし、人は、他人の目のちりを、自分の目の梁よりもたやすく見つけるものです。これほど多くの区や、市民の組や、組合がげっぷをするので、空気が酸っぱくなります。サリイが食事をするときには、貸し手が要るでしょう。ヘルクレスにささげる十分の一と供え物の宴の費用は、会計係が計算するでしょう。アパトゥリア祭、ディオニュシア祭、アッティカの秘儀のためには、料理人の徴集が触れ出されます。セラピスの食事の煙には、火消したちが呼び起こされるでしょう。39:16 キリスト者の食堂だけが、とがめられます。わたしたちの食事は、その名によって、自分のわけを示しています。ギリシア人が愛を言うときの名で呼ばれるのです。どれほど費用がかかっても、慈しみの名のもとに費用をかけることは、もうけです。わたしたちは、この元気づけで、貧しい人々をだれでも助けるからです。あなたがたのもとで取り巻きたちが養われる、その仕方で助けるのではありません。彼らは、腹のために身を売る約束で、侮辱を受けながら太らされます。自由を奴隷の身に落とすことを、誉れとして求めるのです。そうではなく、神のもとでは小さな者たちへの顧みのほうが大きい、その仕方で助けるのです。39:17 食事のわけが立派なら、教えのほかの決まりも、そのわけから量ってください。宗教の務めから出たものなので、何一つ卑しいことも、慎みのないことも許しません。神への祈りを先に味わうまで、食卓に着きません。39:18 飢えた人々が食べられるだけを食べ、貞潔な人々に役立つだけを飲みます。夜のあいだも神を拝まなければならないことを、忘れない者として満腹します。主が聞いておられることを知っている者として語り合います。39:19 手を洗う水と灯りが運ばれた後、それぞれが皆の真ん中に呼び出されます。聖書から、あるいは自分の才から、できる仕方で神に向かって歌うためです。ここで、その人がどれほど飲んだかが試されます。同じく、祈りが食事を閉じます。39:20 そこから、人々は散って行きます。殴り合いの群れになるのでも、走り回る組になるのでも、放埒に繰り出すのでもありません。同じ慎みと貞潔への心遣いに向かうのです。夕食よりも、むしろ教えを食べた者としてです。39:21 キリスト者のこの寄り合いは、許されない結社と同じなら、確かに、許されないとされて当然です。結社について訴えがあるのと同じ名目で、だれかがこれを訴えるなら、罪に定められて当然です。わたしたちは、いつか、だれかを滅ぼすために集まったことがあるでしょうか。39:22 わたしたちは、集まっていても、散らばっているときと同じ者です。皆そろっていても、一人ひとりのときと同じ者です。だれも害さず、だれも悲しませません。正しい人々、善い人々が寄り合い、敬虔な人々、貞潔な人々が集まるとき、それは結社と呼ぶべきではなく、議会と呼ぶべきです。

40〜42章　災いはキリスト者のせいではなく、キリスト者は役に立たない者でもないこと

40:1 むしろ反対に、結社の名をあてがうべきなのは、次の者たちです。善い人々、正しい人々を憎んで、共謀する者たちです。潔白な人々の血を求めて、口々に叫ぶ者たちです。しかも彼らは、憎しみを言い繕うために、あのむなしい言い分まで掲げます。公のあらゆる災い、民のあらゆる不幸は、キリスト者が原因だと思っているのです。40:2 ティベリス川が城壁まで上がったとします。ナイル川が田畑まで上がらなかったとします。天が止まって雨が降らず、地が揺れ、飢饉が起こり、疫病がはやったとします。すると、すぐに「キリスト者を獅子に」です。40:3 そう叫ばれるのです。これほど大勢の人を、一頭の獅子に、でしょうか。お尋ねしますが、ティベリウスより前、つまりキリストの来臨より前に、どれほどの災いが世界と町々を打ち倒したでしょうか。わたしたちは、ヒエラ、アナフェ、デロス、ロドス、コスの島々が、何千もの人々もろとも沈み去ったと読んでいます。40:4 プラトンも、アジアやアフリカより大きな土地が、大西洋に奪い去られたと語っています。また、地震がコリントスの海を飲み干しました。波の力はルカニアを切り離し、シキリアの名へと追いやりました。40:5 これらのことは、確かに、住む人々に損のないまま起こりえたはずはありません。では、そのとき、どこにいたのでしょうか。あなたがたの神々を軽んじるキリスト者が、とは言いません。あなたがたの神々そのものがです。大洪水が全世界を、あるいはプラトンが考えたように平地だけを、消し去ったときのことです。40:6 実際、神々が洪水の災いより後の者であることは、神々が生まれ、死んだ町々そのものが証言しています。神々が建てた町々もそうです。町々もまた、あの災いより後にできたのでなければ、今日まで残ってはいないはずだからです。40:7 パレスチナは、まだエジプトからユダヤ人の群れを迎え入れていませんでした。キリスト者の一派の起こりも、まだそこに根を下ろしていませんでした。そのとき、パレスチナの隣の地方ソドムとゴモラを、火の雨が焼き尽くしたのです。その地は、今も焼けたにおいがします。そこに木の実があっても、目に見えるところまでは実であろうとしますが、触れると灰になります。40:8 また、エトルリアもカンパニアも、そのころすでに、キリスト者のことで苦情を言っていたわけではありません。天からの火がウォルシニイに、その山からの火がポンペイに降り注いだときのことです。ローマでは、まだだれもまことの神を拝んでいませんでした。そのころ、ハンニバルは、カンナエで、ローマ人の指輪によって、自分の殺戮の数を升で量っていたのです。40:9 カピトリウムそのものをセノネス人が占領したとき、あなたがたの神々は皆、すべての人に拝まれていました。しかも都合のよいことに、町々に何か災いが起こると、城壁と同じ災いが神殿にも及びました。それで、わたしは今、このことをはっきり示せます。災いは神々から来るのではありません。神々の身にも起こるからです。40:10 人類は、いつも神に対して悪くふるまってきました。まず、神への務めを果たさない者としてです。人類は、神を部分的には知りながら、尋ね求めませんでした。それどころか、拝むためのほかの神々まで、自分でこしらえました。次に、人類は、潔白の師であり、罪の裁き手であり、その償いを取り立てる方を、尋ね求めませんでした。そのため、あらゆる悪徳と罪に染まって育ったのです。40:11 しかし、もし尋ね求めていたなら、当然、求めた方を知り、知った方を敬ったはずでした。そして、敬った方を、怒る方としてよりも、恵み深い方として経験したはずでした。ですから、人類は、今も怒っておられるのは同じ方だと知るべきです。キリスト者がまだ名づけられる前、以前からいつも怒っておられた、その方です。40:12 人類は、その方の良いものを用いていました。人類が自分のために神々をこしらえるより前に、その方が生み出しておかれたものです。それがその方の良いものだとは気づきませんでした。それなら、なぜ、悪いこともその方から来ると悟らないのでしょうか。人類は、その方に対して恩知らずであり、その同じ方に対して罪ある者なのです。40:13 それでも、昔の災いと比べるなら、世界が神からキリスト者を受け取ってからは、今起こることのほうが軽いのです。そのときから、世の潔白

が不正を和らげ、キリスト者が神にとりなす者となり始めたからです。40:14 たとえば、夏の天気が冬の季節を雨から遠ざけ、年の実りが心配されるときです。あなたがたは、毎日満腹し、すぐにまた昼食をとろうとしています。浴場も居酒屋も娼家も営まれています。そのあいだに、あなたがたは、ユピテルに雨乞いのいけにえをささげ、民にはだしの行列を触れ出します。カピトリウムで天を求め、天井の格間から雲を待ちます。神そのものにも、天そのものにも、背を向けたままです。一方、わたしたちは、断食でひからび、あらゆる節制でやつれ、生きるためのあらゆる糧を後回しにします。荒布をまとい、灰の中を転げ回り、嘆き訴えて天をたたき、神の心に触れます。そして、わたしたちがあわれみを絞り取ると、誉れを受けるのはユピテルなのです。

41:1 ですから、人の世にとって災いの種は、あなたがたです。あなたがたこそ、公の災いをいつも招き寄せる、罪ある者です。あなたがたのもとでは、神は軽んじられ、像が拝まれているのです。実際、怒るのは、拝まれている者たちよりも、ないがしろにされている方だと考えるほうが、信じやすいはずです。さもなければ、あの者たちは、まことにこの上なく不正です。キリスト者のせいで、自分を拝む者たちまで害するのならです。その者たちを、キリスト者の罪から切り離すべきなのにです。41:2「それは、あなたがたの神にもはね返る。その神も、不敬な者たちのせいで、自分を拝む者たちまで害されるのを許すのなら」と、あなたがたは言います。まず、その方の定めを受け入れてください。そうすれば、その言い分を投げ返しはしないでしょう。41:3 実際、その方は、永遠の裁きを、世の終わりの後にと、きっぱりと定められました。ですから、裁きの条件である選り分けを、世の終わりより前に急がれません。それまでのあいだ、その方は、人類全体の上に等しく、寛大でもあり、責めもなさいます。41:4 その方は、良いことは不敬な者たちにも、悪いことはご自分の者たちにも、共通のものになさろうとしました。わたしたちが皆、等しく分け合って、その方の寛大さと厳しさを経験するためです。わたしたちは、その方のもとでこのように学んだので、寛大さを愛し、厳しさを恐れます。あなたがたは反対に、どちらも見下しています。そこで、世のあらゆる災いは、神から下されることになります。わたしたちには、もしそうなるとすればですが、戒めとして、あなたがたには懲らしめとしてです。41:5 しかし、わたしたちは、決して害されはしません。第一に、この世でわたしたちに関わりがあるのは、できるだけ早くここを去ることだけだからです。次に、何か災いが加えられても、それはあなたがたの罪のせいにされるからです。41:6 しかし、わたしたちも、あなたがたとつながっている者として、何かにかすめられることがあります。それでも、わたしたちは、むしろ神が告げ知らせておられたことが成ったと認めて喜びます。その告げ知らせは、つまり、わたしたちの望みの確信と信仰を固めてくれるのです。しかし反対に、あなたがたの拝む者たちから、わたしたちのせいで、あらゆる悪いことがあなたがたに起こるとします。それなら、なぜ、これほど恩知らずで、これほど不正な者たちを、拝み続けるのでしょうか。その者たちは、キリスト者が苦しむときには、むしろあなたがたを助け、守るはずでした。あなたがたを、キリスト者の罪から切り離すべきなのにです。

42:1 しかし、わたしたちは、損を与えるという別の名目でも訴えられています。仕事の上で役に立たない、と言われるのです。どうしてそうなるのでしょうか。わたしたちは、あなたがたとともに暮らす人間です。同じ食べ物、同じ衣服、同じ家財を使い、生きるための同じ必要を持っているのです。実際、わたしたちは、バラモンでも、インドの裸の賢者たちでもありません。森に住み、暮らしから追われた者ではないのです。42:2 わたしたちは、神であり、主であり、創造者である方に、感謝を負っていることを覚えています。その方が造られたものの実りは、何一つ退けません。もちろん、度を越したり誤ったりして用いないように、控えめにはします。ですから、わたしたちは、この世で、あなたがたとともに暮らしています。あなたがたの広場も、市場も、浴場も、店も、仕事場も、宿屋も、定期市も、そのほかの商いも、なしで済ませてはいないのです。42:3 わたしたちも、あなたがたとともに船に乗り、兵役に就き、畑を耕し、同じように商いを交わします。技も、わたしたちの働きも、あなたがたの用に差し出します。わたしたちは、あなたがたの仕事とともに、また、その仕事によって生きています。それなのに、どうしてその仕事にとって役に立たないと見られるのか、わたしには分かりません。42:4 しかし、たとえあなたの儀式に通わなくても、その日にも、わたしは人間です。サトゥルナリア祭に、夜明けに湯あみはしませ

ん。夜も昼も失わないためです。それでも、まともで健やかな時刻には湯あみします。わたしの温かさと血の気を保ってくれる時刻です。湯あみの後にこわばって青ざめることなら、死んでからでもできます。42:5 リベラリア祭に、公の場で食卓に横になることはしません。それは、最後の食事をとる、獣と戦う者たちの習いです。それでも、食事をするところでは、あなたの蓄えから食べています。頭に載せる花冠は買いません。しかし、花はそれでも買うのですから、わたしがどう使おうと、あなたに何の関わりがあるでしょうか。42:6 わたしは、花は、自由に、ほどけたまま、どこにでも散らばっているほうが、好ましいと思います。しかし、花冠にまとめられたとしても、わたしたちは、花冠を鼻で知っています。髪で香りをかぐ人々は、勝手にすればよいのです。わたしたちは、見世物には集まりません。それでも、わたしは、その集いで売られるものが欲しくなったら、それぞれの売り場から、もっと自由に手に入れます。42:7 香は、確かに買いません。アラビアの国々が苦情を言うのなら、シバびとは知るがよいのです。シバびとの品物は、神々をいぶすためよりも、キリスト者を葬るために、もっと多く、もっと高く求められているのです。「少なくとも、神殿の収入は日ごとに目減りしている。賽銭を投げる者が、今どれほどいるだろうか」と、あなたがたは言います。42:8 実際、わたしたちには、人間にも、物乞いをするあなたがたの神々にも、助けを差し出すだけの余力はありません。また、求める者のほかには分け与えるべきではないと考えています。それなら、ユピテルが手を差し出して受け取ればよいのです。そのあいだにも、わたしたちのあわれみが町内ごとに費やすものは、あなたがたの宗教が神殿ごとに費やすものより多いのです。42:9 しかし、ほかの税は、キリスト者に感謝するでしょう。わたしたちは、誠実さから、負っているものを納めるからです。その誠実さによって、わたしたちは、他人のものをかすめ取ることを控えています。そのため、あなたがたの申告の不正と偽りで、どれほど税が失われているかを数えてみれば、勘定は容易につくでしょう。一つの項目の苦情は、ほかの勘定の得で埋め合わされるのです。

43〜46章　キリスト者は国に損を与えず、ただひとり潔白で、哲学者とも違うこと

43:1 確かに、わたしは告白しましょう。キリスト者が実りをもたらさないと、本当に苦情を言えるのはだれかをです。もし、そういう者がいるとすればですが。最初に来るのは、取り持ち屋、連れ込み屋、その下働きの水汲みたちです。それから、刺客、毒を盛る者、魔術師です。さらに、腸卜師、占い師、占星術師です。この者たちの役に立たないことは、大きな実りなのです。43:2 それでも、この一派によってあなたがたの財産が被る損失は、どんなものであれ、何らかの助けで埋め合わせることができます。あなたがたが何一つ恐れなくてよい者たちを、あなたがたは、どれほど重んじるでしょうか。あなたがたからダイモンを追い出す者たちを、とは、もう言いません。あなたがたのためにも、まことの神に、ひれ伏して祈りをささげる者たちを、とも、もう言いません。おそらく、あなたがたは信じないでしょうから。

44:1 しかし実際、国のあの損失は、大きくもあり、本当でもあるのに、だれも目を向けません。町のあの損を、だれも量りません。わたしたちが、これほど多くの正しい者として貴やされ、これほど多くの潔白な者として使い果たされているのにです。実際、わたしたちは今、あなたがたの審理を証人に呼びます。あなたがたは、毎日、裁かれるのを待つ、牢につながれた者たちの上に立ち、判決によって罪状の決着をつけています。44:2 あなたがたは、これほど多くの罪人を、さまざまな罪の罪状とともに数え上げています。そこには、刺客、すり、神聖を汚す者、人を堕落させる者、浴場の泥棒がいます。そのうちのだれが、キリスト者とも書き添えられているでしょうか。44:3 あるいは、キリスト者が、その名目で訴え出られるとします。そのうちのだれが、これほど多くの罪人と同じような者でしょうか。牢獄は、いつもあなたがたの仲間であふれかえっています。鉱山は、いつもあなたがたの仲間でうめいています。獣は、いつもあなたがたの仲間で太らされています。見世物を催す者たちは、いつもあなたがたの仲間から、罪人の群れを養っています。44:4 そこに、キリスト者は一人もいません。いるとすれば、ただキリスト者であるというだけの者です。あるいは、ほかの何かでもあるなら、その者はもうキリスト者ではありません。

45:1 ですから、潔白なのはわたしたちだけです。それが必然であるなら、何の不思議があるでしょうか。実際、必然なのです。わたしたちは、潔白を神から教えられて、それを完全に知っています。完全な師から明かされたものとしてです。そして、それを忠実に守っています。侮ることのできない見極め手から命じられたものとしてです。45:2 一方、あなたがたには、人間の評価が潔白を伝え、同じく人間の支配が潔白を命じました。そのため、あなたがたの持つ教えは、本当の潔白に至るには、十分でもなく、それほど恐れるべきものでもありません。善を示すための人間の賢さは、それを課すための権威と同じほどのものです。賢さが欺かれやすいのと同じほど、権威も侮られやすいのです。45:3 そもそも、どちらがより十分でしょうか。『殺すな』と言うことでしょうか。それとも、『怒ることさえするな』と教えることでしょうか（マタイ五・二一〜二二）。どちらがより完全でしょうか。姦淫を禁じることでしょうか。それとも、目だけの情欲からさえ遠ざけることでしょうか。どちらがより練られているでしょうか。悪事を禁じることでしょうか。それとも、悪口まで禁じることでしょうか。45:4 どちらがより行き届いているでしょうか。害を加えることを許さないことでしょうか。それとも、害への仕返しさえ許さないことでしょうか。ただし、知っておいてください。あなたがたの法でさえ、潔白に向かうように見えるものは、神の法から借りてきたものなのです。より古い原型としての、神の法からです。45:5 モーセの時代については、すでに述べました。しかし、人間の法に、どれほどの権威があるでしょうか。人は、その法を逃れることもできます。たいていは、犯した罪を隠したままです。また、ときには、自ら望んで、あるいはやむをえず罪を犯し、法を侮ることもできるのです。45:6 そのうえ、どんな罰も、死を越えては続かない短いものであることに照らして、これらのことを思い直してください。エ

ピクロスも、そのようにして、あらゆる責め苦と痛みを軽んじています。小さい痛みは侮ってよく、大きい痛みは長くは続かない、と言い立てるのです。45:7 実際、わたしたちは、すべてを見張っておられる神のもとで吟味されます。そして、その方からの永遠の刑罰を、当然のこととして前もって見ています。そのため、わたしたちだけが潔白に向かって進むのです。知識は満ちていて、身を隠すことは難しく、責め苦は長く続くどころか永遠に続くほど大きいからです。わたしたちは、その方を恐れているのです。恐れるわたしたちを裁く者自身も、やがて恐れなければならない方です。わたしたちが恐れるのは、地方総督ではなく、神なのです。

46:1 思うに、わたしたちは、キリスト者の血を求めるすべての罪の訴えに対して、立ち向かいました。わたしたちは、自分たちのありさまのすべてを示しました。また、示したとおりであることを、どのような仕方で証明できるかも示しました。つまり、神の書物が確かであることと古いこと、また、霊的な力（ダイモン）の告白によってです。46:2 だれが、あえてわたしたちを論駁するでしょうか。言葉の技巧によってではなく、わたしたちが証明を組み立てたのと同じ仕方で、真理に基づいて論駁する者がです。しかし、わたしたちの真理が一人一人に明らかになっていくあいだ、不信仰は、この一派の善さについては言い負かされます。その善さは、もう経験からも、付き合いからも知られているからです。それでも不信仰は、これを決して神のわざとは考えず、むしろ一種の哲学と考えます。46:3 「同じことを、哲学者たちも勧め、公言している。潔白、正義、忍耐、節制、貞潔だ」と、人は言います。わたしたちは、教えの点では彼らと比べられます。それなら、なぜ、教えを奉じる自由と、罰を受けないことでは、同じように彼らと等しくされないのでしょうか。46:4 あるいは、なぜ彼らも、わたしたちと同等の者として、務めを強いられないのでしょうか。わたしたちが果たさないために危険にさらされている務めです。実際、だれが哲学者に、供え物をささげることや、（ゲニウスに）かけて誓うことや、昼間にむなしい灯を掲げることを強いるでしょうか。46:5 それどころか、哲学者たちは、あなたがたの神々を公然と打ち壊し、あなたがたの迷信を書き物でも責めています。しかも、あなたがたはそれをほめるのです。多くの者は、皇帝たちにさえ吠えかかります。あなたがたはそれを我慢します。そして彼らは、獣に投げ与えよと宣告されるより、むしろ像や給金で報われやすいのです。46:6 しかし、それも当然です。哲学者は、哲学者と呼ばれるのであって、キリスト者とは呼ばれないからです。哲学者というこの名は、ダイモンを追い払いません。どうして追い払えないのでしょうか。哲学者たちは、ダイモンを神々の次に数えているのにです。ソクラテスの言葉に、「ダイモンが許すなら」というものがあります。46:7 同じソクラテスは、神々を否んで、真理について何ほどかを悟っていました。それなのに、最期には、アエスクラピウスに雄鶏を切り分けてささげるよう命じていたのです。思うに、アエスクラピウスの父の誉れのためでしょう。アポロが、ソクラテスをすべての人のうちで最も賢いと歌ったからです。46:8 ああ、なんと思慮の足りないアポロでしょう。神々がいることを否んでいた人に、知恵の証言を与えたのです。真理が憎まれれば憎まれるほど、真理を本心から示す者は、反感を買います。一方、真理に混ぜ物をし、真理を装う者は、まさにそのことで、真理を追い回す者たちの好意を取りつけます。46:9 哲学者たちは、あざける者、損なう者として、なんと敵意をもって真理を装い、装うことで損なっていることでしょう。名声を追う者だからです。キリスト者は、真理を、なくてはならないものとして求め、損なわずに示します。自分の救いを気づかう者だからです。46:10 このように、あなたがたが思うのとは違って、わたしたちは、知識の点でも、教えの点でも、哲学者と同等ではありません。実際、自然学者たちの頭である、あのタレスは、神性について尋ねたクロイソスに、何か確かなことを答えたでしょうか。考えるための猶予を何度ももらいながら、無駄にしたのです。46:11 キリスト者なら、どんな職人でも、神を見いだし、示します。そして、そこから、神について尋ねられることのすべてを、行いによっても表します。プラトンは、万物の作り手は見いだすのも容易でなく、見いだしても、皆に語り明かすのは難しい、と断言しているのにです。46:12 さらに、貞潔のことで張り合うとすれば、わたしは、アテナイの判決の一部を読みます。ソクラテスが、若者を堕落させる者と宣告された判決です。キリスト者は、相手の女でさえ取り替えません。また、わたしは、遊女フリュネが、上に横たわるディオゲネスの欲情に、さかりがついて応えたことも知っています。プラトンの学園のスペウシッポスという者が、姦淫の中で死んだとも聞い

ています。46:13 キリスト者は、自分の妻に対してだけ、男として生まれています。デモクリトスは、自分の目をつぶしました。女を情欲なしに見ることができず、手に入れられなければ苦しんだからです。そうして、自分を罰することで、自分の不節制を告白しているのです。46:14 しかしキリスト者は、目を無事に保ったまま、女を見ません。心が、情欲に対して盲目なのです。品行の正しさを弁護するとしましょう。ほら、ディオゲネスは、泥だらけの足で、プラトンのおごった寝椅子を、別のおごりで踏みつけます。キリスト者は、貧しい者に対してさえ、おごりません。46:15 慎みで争うとしましょう。ほら、ピュタゴラスはトゥリオイの人々のもとで、ゼノンはプリエネの人々のもとで、僭主の座をねらっています。しかしキリスト者は、造営官の職さえねらいません。平静さで渡り合うとしましょう。リュクルゴスは、ラケダイモン人に自分の法を改められたので、食を断って死ぬことを選びました。キリスト者は、罪に定められても感謝します。46:16 誠実さで比べるとしましょう。アナクサゴラスは、預かり物を、敵に返しませんでした。キリスト者は、外の人々からも、誠実な者と呼ばれます。裏表のなさで立ち向かうとしましょう。アリストテレスは、親しい友ヘルメイアスを、恥ずべき仕方でその地位から去らせました。キリスト者は、自分の敵さえ傷つけません。46:17 同じアリストテレスは、アレクサンドロスを導くより、むしろ恥ずべきほどにへつらいます。その恥ずかしさは、プラトンが腹のためにディオニュシオスに売られるのと同じほどです。アリスティッポスは、紫の衣をまとい、重々しい見かけの陰で、放蕩に暮らします。ヒッピアスは、町に陰謀をめぐらしているあいだに殺されます。46:18 自分の仲間が、あらゆる残虐さで散らされても、そのためにこうしたことを企てたキリスト者は、一人もいません。「しかし、あなたがたの中にも、教えの規則から外れる者がいる」と、ある人は言うでしょう。それでも、そういう者は、わたしたちのもとでは、キリスト者とはみなされなくなります。ところが、あの哲学者たちは、そのような行いをしながらも、知恵の名と誉れのうちにとどまり続けているのです。46:19 このように、哲学者とキリスト者に、どんな似たところがあるでしょうか。ギリシアの弟子と、天の弟子です。名声を商う者と、いのちを商う者です。言葉で働く者と、行いで働く者です。物事を建てる者と、壊す者です。誤りの友と、誤りの敵です。真理をゆがめる者と、真理を元どおりに保ち、解き明かす者です。真理を盗む者と、真理を守る者です。

47〜48章　真理は哲学より古いこと、よみがえりと永遠の裁き

47:1 わたしの思い違いでなければ、真理はすべてのものより古いのです。すでに組み立てておいた、神の書物の古さも、この点でわたしの役に立ちます。そのため、この書物が、後のあらゆる知恵の宝庫であったことは、たやすく信じられるでしょう。もし、この本の分量を、もう抑えているのでなければ、わたしは、この証明にも筆を進めるでしょう。47:2 詩人のうちで、ソフィストのうちで、預言者の泉からまったく飲まなかった者が、だれかいるでしょうか。ですから、哲学者たちは、そこから自分の才の渇きをうるおしたのです。こうして、彼らがわたしたちのものから持っているものが、わたしたちを彼らと似たものに見せるのです。47:3 思うに、そのために、ある人々によって、哲学までも追い出されました。テーバイ人、スパルタ人、アルゴス人のことです。哲学者たちが、わたしたちのものに手を出したからです。彼らは、前に述べたように名声を追う者で、雄弁だけを欲しがる者です。順序立てて整えられた聖書の中で何かに行き当たると、好奇心にまかせた自分のやり方で、それを自分の作品へ向けました。ゆがめるのをためらうほどには、それが神のものだと十分に信じていませんでした。また、十分に理解してもいませんでした。それは当時まだ半ば曇っていて、それが自分たちのものと見えていたユダヤ人にさえ、覆い隠されていたからです。47:4 実際、真理に何らかの単純さがあれば、それだけいっそう、人間のこまごました詮索が、信仰を軽んじて、それを変えていきました。そのため、彼らは、見つけていた確かなものまで、不確かなものの中へ混ぜ込んでしまいました。彼らは、ただ神を見つけただけで、見つけたとおりには論じなかったからです。こうして、神の性質についても、本性についても、座についてまで争うほどになったのです。47:5 ある者は神を非物体だと言い張り、ある者は物体だと言い張ります。前者はプラトン派で、後者はストア派です。ある者は神が原子から成ると言い、ある者は数から成ると言います。エピクロスとピュタゴラスの考えです。またある者は、火から成ると言います。ヘラクレイトスにはそう思えたのです。そして、プラトン派は、神が物事を気づかうと言います。それに対してエピクロス派は、神は暇で、何もせず、言ってみれば、人間の事柄にとってはだれでもない者だと言います。一方、ストア派は、神を世界の外に置きます。陶工のように、外からこの塊を回すというのです。プラトン派は、世界の内に置きます。舵取りのように、自分が治めるものの内にとどまるというのです。47:6 同じように、世界そのものについても、彼らの説は分かれます。生まれたものか生まれないものか、過ぎ去るものかとどまるものか、です。魂のありさまについても同じです。ある者は魂を神的で永遠だと主張し、ある者は解けて消えるものだと主張します。それぞれ思ったとおりに、説を持ち込み、あるいは作り変えたのです。47:7 哲学者たちの才が、古い書物をねじ曲げたとしても、不思議ではありません。彼らの種から、ある者たちが出ました。その者たちは、わたしたちの、このできて間もない備えまでも、自分の意見によって、哲学の説に合うように改ざんしました。そして、一つの道から、曲がった、抜け出せない小道を、いくつも切り開いたのです。47:8 この一派に分かれがあることは、知られています。このことを言っておくのは、そのために、この点でもわたしたちが哲学者と等しいと、だれにも見えないためです。また、弁明がまちまちであることから、真理を裁く人がいないようにするためです。しかし、わたしたちは、わたしたちの改ざん者たちに、手短に抗弁します。真理の規範とは、キリストから来て、その方の連れ（使徒たち）を通して伝えられたものです。これらのまちまちな注釈者たちは、使徒たちよりかなり後の者だと証明されるでしょう。47:9 真理に逆らうものはすべて、真理そのものを材料に組み立てられました。この敵対の働きをするのは、迷いの霊たちです。この霊たちが、救いの教えをこのように改ざんすることを仕組みました。この霊たちが、ある作り話も送り込みました。似ていることを使って、真理への信頼を弱めるためです。あるいは、むしろその信頼を自分のほうへ勝ち取るためです。こうして、人は、詩人も哲学者も信じるべきではないのだか

ら、キリスト者も信じるべきではない、と思います。あるいは、キリスト者を信じるべきではないのだから、なおさら詩人と哲学者を信じるべきだ、と考えます。47:10 ですから、わたしたちは、神がやがて裁きを行われると告げ知らせると、笑われます。詩人も哲学者も、同じように冥府に裁きの座を置くからです。また、地獄でおどすと、同じように大笑いされます。地獄とは、地下での刑罰のための、ひそかな火の宝庫です。47:11 死者のもとには、同じように、ピュリプレゲトンという川があるからです。また、わたしたちがパラダイスの名を挙げるとします。それは、神的な心地よさに満ちた場所で、聖徒たちの霊を迎えるために定められています。そして、あの火の帯という一種の囲いの壁で、世の人々の知るところから隔てられています。ところが、それを信じる気持ちは、エリュシオンの野に先に占められているのです。47:12 お尋ねしますが、哲学者や詩人のもとにある、これほどよく似たこうした話は、どこから来たのでしょうか。わたしたちの秘儀からにほかなりません。わたしたちの秘儀から来たのなら、わたしたちのものが先にあったことになります。それなら、わたしたちのもののほうが、信じるに足り、なおさら信じられるべきです。その写しでさえ、信じられているのですから。47:13 もし、彼らが自分たちの考えから得たのなら、わたしたちの秘儀は、後から来たものの写しとみなされることになります。それは物事の決まりが許しません。実際、影が体より先に来ることも、写しが本物より先に来ることも、決してありません。

48:1 さあ、それでは、ある哲学者が、人はラバから、蛇は女からできる、と断言するとします。ラベリウスが、ピュタゴラスの説について言うとおりです。そして、その哲学者が、言葉の力で、あらゆる論拠をその意見のほうへねじ曲げたとします。その哲学者は、同意を呼び起こし、そのために動物を断つべきだという信念まで植えつけるのではないでしょうか。48:2 ひょっとすると自分の曾祖父のだれかの牛肉を買うことになるのではないか、と思い込む人も、いるのではないでしょうか。しかし実際、キリスト者が、人から人が、ガイウスからガイウスその人が戻ってくると約束するとします。そのキリスト者は、民衆から、話を聞く集いのためにさえ求められず、むしろ石打ちのために求められるでしょう。48:3 もし、人間の魂を体へ行き来させる何らかの理屈があるなら、なぜ魂は同じ実体に戻らないのでしょうか。元に戻されるとは、もとあったものになることだからです。魂は、もうもとあったものではありません。もとあったものでなくならなければ、そうでなかったものにはなれなかったからです。48:4 だれがどの獣に作り変えられるように見えるか。もし、そういう方面で戯れたいなら、暇にまかせて、多くの論点が要るでしょう。しかし、わたしたちは、むしろ自分たちの弁明に（それを使います）。わたしたちは、人が人から戻ってくると信じるほうが、はるかにふさわしいと説きます。だれがだれの代わりでも、人間でさえあればよいのです。そうして、魂の同じ性質が、同じありさまに戻されるのです。たとえ同じ姿にではなくてもです。48:5 いずれにせよ、元に戻されることの理由は、裁きが定められていることにあります。ですから、必ず、もとあったその人自身が出されることになります。善い、あるいはその反対の値打ちについての裁きを、神から受けるためです。そのため、体も出されます。魂だけでは、しっかりした素材、つまり肉体なしに、何も受けることができないからです。また、魂が神の裁きによって受けなければならないことはすべて、肉体なしに値したものではないからです。魂は、肉体の中で、すべてをしたのです。48:6「しかし、解けてしまった素材が、どうして出されることができるのか」と、あなたは言います。人よ、あなた自身をよく見なさい。そうすれば、このことが信じられるとわかるでしょう。あなたが存在する前に何であったかを、思い返しなさい。もちろん、何でもありませんでした。もし何かであったなら、覚えているはずだからです。48:7 ですから、あなたは、存在する前には何でもありませんでした。存在しなくなるときにも、同じく何でもない者になります。それなら、なぜ、無から再び存在することができないのでしょうか。あなたが無から存在することを望まれた、同じ造り主ご自身のみこころによってです。48:8 あなたに、何の新しいことが起こるでしょうか。存在しなかったあなたが、造られました。再び存在しなくなっても、また造られるでしょう。できるなら、あなたがどのようにして造られたかを説明しなさい。そのうえで、どのようにして造られるかを尋ねなさい。48:9 それでも、かつてあったものになるほうが、きっとたやすいはずです。一度もなかったものに造られたことも、同じように難しくはなかったのですから。なるほど、神のお力が疑われるのでしょう。神は、世界のこれほど大きな体を、存

在しなかったものから、それに劣らず、空虚とむなしさという死から据えられました。そして、すべての魂に命を与える霊によって、それに命を吹き込まれました。また、その世界そのものを、人間のよみがえりの手本として、あなたがたへの証しのために、はっきりと示されたのです。48:10 光は、毎日殺されては、また輝きます。闇も、同じように、退いては次に来ます。星々は、死んでは生き返ります。季節は、終わるところで始まります。実りは、実りきっては、また戻ってきます。確かに、種は、朽ちて解けてこそ、いっそう豊かに芽を出します。すべては、滅びることで保たれ、すべては、滅びから作り直されるのです。48:11 人よ、あなたは、これほど大きな名です。デルポイのピュティアの銘からでも学んで、自分を知るならです。あなたは、死んではよみがえるすべてのものの主人です。そのあなたが、滅びるために死ぬのでしょうか。あなたがどこで解けても、その素材はあなたを返すでしょう。どんな素材があなたを壊し、のみ込み、消し去り、無へと散らしてもです。48:12 全体の持ち主である方が、無そのものの持ち主でもあるのです。「それなら、いつまでも死に、いつまでもよみがえらなければならないのか」と、あなたがたは言います。もし万物の主がそのように定めておられたなら、あなたは、心ならずも、自分の定めの法を経験することになるでしょう。48:13 しかし実際には、神は、告げ知らせておられたとおりにお定めになりました。宇宙を、異なるものから組み立てた理があります。すべてが、相反する実体から一つにまとまって成り立つようにしたのです。空虚なものと固いもの、生き物と命のないもの、捉えられるものと捉えられないもの、光と闇、いのちそのものと死からです。その同じ理が、時代をも、こう定め、区切った条件によって、つなぎ合わせました。わたしたちが住む、物事の始まりからのこの最初の部分は、時の中で、終わりへ流れていきます。一方、わたしたちが待ち望む次の部分は、限りない永遠へと延びていきます。48:14 ですから、終わりが来るとき、つまり、そのあいだで口を開けている境が来るときです。そのとき、世界そのものの有様も、同じく時のものなので、移り変わります。それは、あの永遠の配剤の前に、幕のように張り渡されているのです。そのとき、人類はすべて元に戻されます。この時代に値した善か悪かの決着をつけ、そこから、果てしない永遠の続く限り、その報いを支払うためです。48:15 ですから、もう死はなく、くり返されるよみがえりもありません。わたしたちは、今と同じ者であり、後で別の者になることもありません。神を拝む者たちは、永遠にふさわしい実体を上に着せられて、いつまでも神のもとにいます。一方、不敬な者たちと、神に向かって全き者でない者たちは、同じく絶えることのない火の刑罰の中にいます。彼らは、その火の本性そのものから、朽ちないことの助けを受けるのです。つまり、神的な助けです。48:16 哲学者たちも、ひそかな火と、人目にふれる火との違いを知っています。このように、人間の用に仕える火と、神の裁きに仕える火とは、まったく別のものです。後者は、天から雷を放ち、あるいは地から山々の頂を通して噴き出します。実際、それは焼くものを滅ぼし尽くしません。かえって、使い尽くしながら、新たにするのです。48:17 このように、山々は燃え続けながらとどまり、天から打たれた者も無事で、もうどんな火によっても灰になりません。これは、永遠の火の証しとなり、刑罰を養う、絶えることのない裁きの手本となるでしょう。山々は焼かれても、なお残ります。まして罪人たちと神の敵たちは、どうでしょうか。

49〜50章　思い込みと呼ばれる教えと、殉教という勝利

49:1 これらは、わたしたちのもとでだけ、思い込みと呼ばれます。哲学者や詩人のもとでは、最高の知識、すぐれた発見と呼ばれるのにです。彼らは賢く、わたしたちは愚かだというのです。彼らは誉れを受けるべきで、わたしたちは笑われるべきだ、いや、それ以上に罰せられるべきだというのです。49:2 今は仮に、ここで守られていることが偽りで、思い込みと呼ばれて当然だとしましょう。それでも、必要なものです。愚かだとしましょう。それでも、役に立つものです。それを信じる人々は、永遠の罰を恐れ、永遠の安らぎを望むので、より善い者にならざるをえないからです。49:3 ですから、真実だと思い込むことが益になるものを、偽りと言い、愚かとみなすことは、益になりません。役に立つものを罪に定めることは、どんな名目によっても、まったく許されません。ですから、思い込みは、あなたがたのもとにあるのです。役に立つものを罪に定める、まさにそのことが思い込みなのです。49:4 同じように、それらは愚かなものでもありえません。いずれにせよ、たとえ偽りで愚かだとしても、だれにも害を与えません。実際、それらは、ほかの多くのものと同じようなものです。あなたがたは、そうしたものには何の刑罰も科しません。むなしく作り話めいていても、害のないものであるかのように、訴えもせず、罰もしないのです。49:5 しかし実際、このようなことについては、もしそうなるとすればですが、笑いものに処すべきです。剣や火や十字架や獣に処すべきではありません。この不正な残忍さに、この盲目の民衆は喜び躍り、はやし立てます。それだけではありません。あなたがたのうちのある人々も、それを誇っています。不正によって、民衆の人気を取ろうとする人々です。49:6 まるで、あなたがたがわたしたちに対してできることのすべてが、わたしたちの思いのままではないかのようです。確かに、わたしがキリスト者であるのは、わたしがそう望むときです。ですから、あなたがわたしを罪に定めるのは、わたしが罪に定められることを望むときです。あなたがわたしに対してできることも、わたしが望まなければ、できません。それなら、あなたにできることは、もうわたしの意志によるのであって、あなたの権力によるのではありません。49:7 同じように、民衆が、わたしたちが苦しめられるのを喜ぶのも、むなしいことです。同じように、民衆が自分のものだと言い張るその喜びは、わたしたちのものだからです。わたしたちは、神から離れるより、罪に定められるほうを選ぶのです。反対に、わたしたちを憎む人々は、喜ぶのではなく、悲しむはずです。わたしたちは、自分で選んだものを手に入れたのです。

50:1 「それなら、なぜおまえたちは、われわれが追い迫ると不平を言うのか。苦しむことを望んでいるのなら、望みどおりの苦しみを与えてくれる相手を、愛すべきなのに」と、あなたがたは言います。確かに、わたしたちは苦しむことを望みます。ただし、兵士が戦いを望むのと同じ仕方でです。50:2 確かに、喜んで苦しむ者はいません。恐れ、危険にさらされなければならないからです。それでも、兵士は全力で戦います。そして、戦いについて不平を言っていた者が、戦いに勝つと喜びます。栄光と戦利品とを手に入れるからです。50:3 わたしたちにとっての戦いとは、法廷に呼び出され、そこで首をかけて、真理のために争うことです。一方、勝利とは、争って求めたものを手に入れることです。この勝利には、神に喜ばれるという栄光と、永遠に生きるという戦利品があります。50:4 しかし、わたしたちは言い負かされます。確かに、そうです。手に入れたときにです。ですから、わたしたちは、殺されるときに勝ったのであり、言い負かされるときに、ついには勝者となって出て行くのです。今は、わたしたちを「柴の者」「半車軸の者」と呼んでもかまいません。わたしたちは、半分の車軸の杭に縛りつけられ、柴の束に囲まれて焼かれるからです。50:5 これが、わたしたちの勝利の装いです。これが、しゅろ模様の凱旋の衣です。このような車に乗って、わたしたちは凱旋するのです。ですから、負けた者たちに、わたしたちが気に入られないのは当然です。実際、そのために、わたしたちは捨て鉢で破れかぶれの者とみなされるのです。しかし、この捨て鉢と破れかぶれこそ、あなたがたのもとで

は、栄光と名声のためであれば、勇気の旗を高く掲げるのです。50:6 ムキウスは、自分の右手を、祭壇の上に喜んで残しました。ああ、なんという魂の気高さでしょう。エンペドクレスは、自分の全身を、カタネの人々のアエトナ山の火に与えました。ああ、なんという心の力でしょう。カルタゴを建てた、ある女は、結婚の後（夫の死後）、火葬の薪に身を与えました。ああ、なんという貞潔への賛辞でしょう。50:7 レグルスは、自分一人が多くの敵と引き換えに生き延びることのないように、全身にいくつもの十字架の責め苦を受けました。ああ、なんと勇敢な人、捕らわれの身でも勝利した人でしょう。アナクサルコスは、死に至るまで大麦をつく杵で打ち砕かれたとき、言いました。「打て、打て、アナクサルコスの皮袋を。おまえが打っているのは、アナクサルコスではないのだから」。ああ、なんという哲学者の度量の大きさでしょう。自分のそのような最期についてさえ、冗談を言ったのです。50:8 自分の剣で、あるいはもっと穏やかな別の死に方で、名誉と引き換えの取引をした人々のことは、省きます。実際、見てください。拷問との戦いまでも、あなたがたによって冠を授けられるのです。アッティカの遊女は、刑吏がもう疲れ果てたとき、最後に、自分の舌をかみ切って、荒れ狂う僭主の顔に吐きかけました。声までも吐き出すためです。たとえ責めに負けて望んだとしても、共謀者たちを明かせないようにするためです。50:9 エレアのゼノンは、ディオニュシオスから、哲学は何をもたらすのかと尋ねられて、死を軽んじることだと答えました。そして、僭主の鞭打ちにさらされても動じず、自分の言葉に、死に至るまで封印をしたのです。確かに、ラケダイモン人の鞭打ちは、身内が励ましさえする目の前で、厳しくされます。そして、流した血の量だけ、家に忍耐の誉れをもたらすのです。50:10 ああ、なんと許された栄光でしょう。人間のものだからです。その栄光のためなら、死とあらゆる残虐を軽んじても、破れかぶれの思い込みとも、捨て鉢な信念とも数えられません。その栄光には、祖国のため、支配のため、友情のためなら、神のためには許されないほどの苦しみが許されているのです。50:11 それでも、あなたがたは、これらの人々みなのために、像を鋳造し、肖像に銘を記し、碑文を刻んで、永遠に残します。なるほど、記念のものでできる限り、あなたがた自身も、死者にいわばよみがえりを与えているのです。50:12 ところが、まことのよみがえりを神から望む者が、神のために苦しむと、狂っているというわけです。それなら、善良な長官たちよ、さあ、それをしてください。キリスト者を民衆にいけにえとしてささげれば、民衆のもとで、ずっと善良になれるでしょう。わたしたちを責めさいなみ、拷問にかけ、罪に定め、すりつぶしてください。あなたがたの不正こそ、わたしたちの潔白の証拠だからです。50:13 そのために、神は、わたしたちがこうした苦しみを受けるのをお許しになるのです。実際、あなたがたは最近も、キリスト者の女を罪に定めて、獅子にではなく取り持ち屋に引き渡しました。そうして、わたしたちのもとでは、貞潔の汚れが、どんな刑罰よりも、どんな死よりもむごいとみなされていると、告白したのです。50:14 しかし、あなたがたの残忍さは、どれほど手が込んでいても、何の役にも立ちません。かえって、この一派への誘いとなります。わたしたちは、あなたがたに刈り取られるたびに、数を増します。キリスト者の血は種なのです。あなたがたの中でも、多くの人が、痛みと死を耐え忍ぶように勧めています。キケロは『トゥスクルム荘対談集』で、セネカは『偶然の出来事について』で勧めました。ディオゲネスも、ピュロンも、カリニコスもそうです。50:15 しかし、その言葉は、キリスト者が行いで教えて得るほど多くの弟子を、見いだしません。あなたがたがとがめる、あの強情そのものが、教師なのです。実際、それを見て、その事の内に何があるのかを調べようと心を揺さぶられない人が、いるでしょうか。50:16 調べたら、加わらない人が、いるでしょうか。加わったら、苦しみを受けることを切に願わない人が、いるでしょうか。神の恵みをすべてあがない取り、自分の血で埋め合わせて、神からあらゆる赦しを得るためにです。この働きには、すべての罪が赦されるからです。50:17 ですから、わたしたちは、その場で、あなたがたの判決に感謝するのです。神のことと人のこととは、このように相反します。あなたがたに罪に定められるとき、わたしたちは神によって無罪とされるのです。

護教論

2026年11月23日版
著者　テルトゥリアヌス
制作　藤遥
発行　christian-classics-jp
公開　https://christian-classics-jp.github.io/site/tertullian-apology/
原稿　https://github.com/christian-classics-jp/site/tree/master/books/tertullian-apology
全文を、ラテン語原文（Apologeticum）からAIを使って翻訳しました。
訳文はCC0 1.0で公開しています。引用した聖書の本文は含みません。